

百合が見たいだけです(切実)

オパール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

百合好き男、相原ヒロは唐突に死に、これまた唐突に転世させられた。テンプレ乙。難易度ハードな生存率低なシンフォギア世界に飛ばされたヒロはとあることを思い至って黒塗りの高級車に追突してしまう。

後輩をかばいすすべての責任を負った三浦に対し、車の主、暴力団員谷岡が言い渡した示談の条件とは……。

※あらすじを変更しました。(特に意味は)ないです。

あくまで根本はギャグ時空です。

誹謗中傷はご遠慮ください

目次

箸休め

キャラ設定

1

くたびれバレンタイン

18

おかしい。こんなことは許されない

33

本編

百合が見たいだけです(切実)

51

でも(百合でなくとも)幸せならOKで

す
|
65

双翼って単語にときめきクライシス

75

何故そこでたやまんツ?! | 89

異聞：ノンケが気付いたら百合ハーレ

ム出来た件 | 104

総受け愛されガールきねクリパイセン

| 113

ザババは神じゃなくて天使だから(確

信) | 134

始まりのセレナーデ | 154

色々と変わっちゃまった世界で | 171

奏×翼×マリア!!? | 194

S・O・N・G・青春白書 | 205

何でもない日常が幸せなんだと思う

226

今も昔も男は弱いよ ————— 241

L I L Y L O V E R S X X

261

ざつく薔薇ん ————— 289

筆頭、独走 ————— 310

「赤青」「黄緑」「人形過激団」『w i t

h F』 ————— 326

縛ってけZENRA ————— 342

怒られ拉致られのち決戦 ————— 364

内通疑惑？ 知るか！ そんなことよ

りかなセレだ！ー前ー ————— 387

内通疑惑？ 知るか！ そんなことよ

りかなセレだ！ー中ー ————— 408

箸休め

キヤラ設定

相原ヒロ

神様転生させられた主人公の百合男子。悪属性

天の鎖と贖作もとい原作乖離剣エアー持たされてシンフォギア世界に放り込まれた性癖的にはノンケだが自分があれこれするより百合見てる方が興奮出来る変態、ただし仮に相手がノンケでも幸せならOKです

熟考の結果、元は男のカリオストロとプレラーティも守備範囲に入るという結論に至った

百合を見たいだけの自分がプチハーレム形成してることに不安な意味でのドキドキが止まらない

前世でNTR被害を二回ほど受けたけど百合好きは生まれついでのものだから特に関係は無かったりする

ただし軽度の女性不信発症中

その実態は言葉巧みにのらりくらりと自分に向けられる好意を避け続けるだけの臆

病者

「ひび×サンとか良いよネ」

余談だが顔はS・O・N・G男性陣最下位。だが悪くもない上に良くもない、というか特筆できる点も無い。そのことからかわれると心が折れる弱小メンタル

あと事件の度にエヌマる以外で死にかけてたりする

具体的には生身でネフシユタンファイネと殴り合い、F・I・S・時代のきりしらに叩つ斬られ、オートスコアラに囲まれたりしてた。パヴァリア相手にも生身での戦闘を強いられるため死ぬ率跳ね上がっている

ただ当人は「死にたくない」という感情を持つてはいるものの、前世で唐突に死んだ転生者、という経緯故に自分の死生感に関してはかなりドライ。そのときが来たならあつさり受け入れるほどに執着はゼロ

立花響

原作主人公。S・O・N・G一のイケ魂持ち。女子力：低

基本的には原作通りの経歴で謂れのない中傷を受けていた所にヒロに助けられた以外は特に変わりは無い

そのヒロに対してはLoveかLikeかイマイチわかってなかったがLoveに

限りなく近いLikeで落ち着いた

「ヒロさんが言っていた。好意的に接する女性同士ほど尊いものは無いって！ 意味は全然わかりません!!」

小日向未来

響の嫁。女子力：高

響を庇ってくれたヒロに対しては少なくとも好意的に思っている

ただし響に懐かれてる時のヒロはちよつと……

でも響を大事に思ってくれてることもわかっているから複雑だったり

愛の強さでシンフォギアの強さが決まるという極論を示した場合たぶん最強

「ヒロさん。響のこと、気にしてあげてください」

風鳴翼

我らがSAKIMORI。女子力：壊

今作では奏が元気に生存しているのでそこまで抜き身の刀めいた雰囲気は無い。むしろポンコツの気が出てきてるとはヒロの談

ヒロは奏に次ぐ戦友でそれだけだと本人は思ってるが端から見れば明らかにLov

e してるためそこを奏にいじられまくる日々を過ごしている

近頃ちよつとだけ素直になった

「相原か？ ああ……感謝している。様々なことだな。……待て、何を笑う」

雪音クリス

みんな大好き総受け気質の愛されガール。女子力/Zero

響に好かれ未来に構われ翼に導かれきりしらに懐かれ、おまけにヒロからエンジェル呼ばわりされてる

口が悪いだけでメチャクチャ良い子。ヒロのトレンドとしてセレナや奏との絡みを今か今かと待ち望まれている

「そういう話は家でやれバカア!!」

天羽奏

運命を変えられた元祖ガングニール装者。女子力：低

ヒロ曰く「全方位姉御」な後輩達にグイグイ迫っていくスタイル

例のライブの日に命を落とすところをヒロに止められ、そこからしばらく戦線離脱を余儀なくされたところに代役として戦ってきたヒロを見る内に絆された

ヒロに対してもガンガンいこうぜなスタイルを通すけど未来やセレナの見立てでは「誘い受け」らしい

「もう昔のあたしとは違うからな。歌もS・O・N・Gの任務も今まで以上に全力で行くぞ。……そこ、「恋も」とか言うなッ」

櫻井了子

櫻井理論の提唱者で、元フィーネの器

身体はフィーネに塗り潰され人格も消失していたがヒロの尽力でフィーネの器にされてからの記憶を失った状態で復活

才媛なのは変わらないためS・O・N・Gの主任研究員として元気にマッドに生を謳歌中

こつそりヒロから弦十郎とのカプを推されたりする
「ところでヒロ君の聖遺物の出所ってどこなのかしら」

マリア・カデンツアヴナ・イヴ

みんなのたやマおねいさん。女子力：中

最年長として色々気を張ることも多いがセレナというメンタルリセット要員がいる

ためそれなりに余裕も持っている

セレナを救ってくれたことに端を発し、自分の全裸にテンション跳ね上がったヒロからその場の勢いのまま求愛染みた発言を受けて落ちた（その発言に関してヒロは後になつばに処された）

自分より年下だが何かと周囲に気を配ったり甘えるきりしらに構ったりしているヒロを甘やかしたい願望に目覚めている

純白イノセント熱唱出来るくらいには乙女。下手したら装者の中で一番乙女

「だだだ、男性経験ッ!? あ、あるに決まって……ちよつと、笑うんじゃないッ!!」

暁切歌

装者最年少の元気いっぱいのアホの子。女子力/Zero

みんなの妹分の立場に甘んじることなく努力を続ける面もある

ヒロという兄貴分が出来てからというものの全力で甘えに行っている。時折妙な知識を教わっては吹聴して回るためそのツケはかなりデカイ時がある

「ああ、マリア! 手紙は! 手紙だけは!!」

月読調

マリア大好き、セレナ大好き、S・O・N・Gのみんなも大好き

だけどやっぱり切ちゃん超好き。女子力：高

たぶん一番の常識人

切歌同様ヒロを兄のように慕ってガンガン甘えていく

ヒロと切歌が二人して暴走しがちなためストツパーの役割も担ってたりする

「マリアもセレナも幸せになるべきだから。……あ、でも切ちゃんはわたしが幸せにするからね」

セレナ・カデンツァヴナ・イヴ

運命を変えられた元祖アガートラム装者。Love勢筆頭

女子力：徐々にながって現状中

ネフィリム鎮静のための絶唱後に命を落とすはずのところをエヌマったヒロに助けられて、その時、顔はわからないが鎖と乖離剣だけが強烈に記憶に焼き付いたことでヒロを「王子様」と見なすようになる

フロンティア事変で再会した時あまりにも理想と思い出補正からかけ離れた百合厨具合に幻滅しかけるも、何やかんや自分を助けた時と同じようにマリアやきりしらも助けてくれたことに惚れ直す

ヒロの部屋の合鍵を持つてる辺りやや他よりリード気味
奏から言わせればあざといらしい

「姉さんや切歌、調に優しくしてくれてありがとう、ヒロ」

風鳴弦十郎

S・O・N・G司令。シンフォギア世界において最強のOTONA

ヒロからこっさりリスpektされてる。曰く「こんなイケオジになりたい」とのこと
ヒロのプチハーレム状態は「もつとやれ」的な姿勢

ただし刃傷沙汰にだけはしてほしくないと思ってる

あとたぶんステータスはほとんどEX

「命短し恋せよ乙女という言葉もある。男の甲斐性の見せ所だぞヒロ君！」

緒川慎次

S・O・N・G所属のリアルニンジャ

カラテではなく、磨き上げた自らのジツで装者達のフォローを行う善なるニンジャ

そのワザマエは装者達すら戦慄させ、そのあまりのNRSに一度ヒロはしめやかに失

禁した

「ドーム、相原IIサン。緒川慎次です」

フイーネ

超先史文明の巫女。元祖ラスボスにしてほしいこいつのせい

ここにおいては一期時点ではそのまま一度は消滅、二期の事件でPエンハイムと名乗る錬金術師が用意したホームンクルスの器に放り込まれて現在は完全に死んだことにして隔離されている

生存バれるとやばいからネ

殺されたんじゃ!?

「残念だったなあ。トリックだよ」

ナスターシャ教授

マリア、セレナ、切歌、調のママ

「よっしゃラッキー!」の一言で颯爽と助け出されて現在はアメリカに戻っている

憑き物が落ちたと言われるほどに穏やか、むしろ素が出てきてる

「一度間違えてしまった以上、今後はあの子達の未来を見守りましょう」

ウエル博士

ご存知最低の英雄

一応生き残ってはいるがネフィリムごっそり削られたため深淵の竜宮ではなくナスターシャと一緒にアメリカに。

S・O・N・G・に対しては協力する意思が無いため余計なことしないように結構重い監視を付けられる

「恐ろしい……僕自身の才能がア!!!」

ヒロとは会う度に眼鏡に何かしらをされている。

エルフナイン

大天使

辿った道筋はだいたい原作通りだが身体はキャロルのものではなくヒロの母親のツテで仕入れた女性体の身体に記憶知識経験そのまま写したものになっている

ヒロが何かしらに巻き込まれると割と泣く

「ヒロさんに想いを寄せる方々のフォニックゲインが時々とんでもない数値を出しているのですが……」

キャロル・マールス・デインハイム

G Xのラスボス。天使

想い出を焼き尽くす直前でヒロの華麗なインターセプトが入ったためほんの少しだけ想い出は残ってたりする

ただそれでも錬金術に関するものは残らなかったため、他国から見ても利用価値／＼Z eroのためにS・O・N・Gに身柄を保護されているだけの現状

ある程度の知識等はS・O・N・Gメンバーから聞いているため了子の補佐的ポジション

オートスコアラ達からは今でも大切な唯一のマスターとして愛されている。彼女達への想い出も焼き尽くしてしまったキャロルでも、そんなオートスコアラ達へは少なからず大切に思っている

「オレの髪は玩具じゃない」

ガリイ・トウーマン

性根の腐ったオートスコアラ。青河童

想い出集めに奔走してたらヒロパパに凹られその後取っ捕まった挙げ句マイナス方

向に魔改造、以後ヒロにいびり倒されるといいうインガオホーなことに

暇を持て余してはいるがときどき様子見と称して遊びに来るヒロとは端から見たら喧嘩友達、ただし当人達は隙あらば互いの首を狙っている

「絶対許さんわあのガキ」

レイア・ダラーヒム

地味は似合わない派手好きなオートスコアラ。黄色ディーラー、あるいは蛍光色妹をぬところされ自分も大幅グレードダウンされたが何かと今の状況を気に入ってたりする

オートスコアラ達やフィーネを交えて派手にギャンブルに興じたりヒロが持ってきたゲームで盛り上がったりとたぶん一番劣化したボディでの生を謳歌してる
「派手なこと、目立てることは良いことだと思う」

フアラ・スユーフ

あらあらうふふ系になったオートスコアラ。緑ママさん

何かとクセの強い他の三人を見守る系。レイアと同じく特に今の状況に不満は無い

模様

G Xの事件中に翼に叩つ斬られたこととヒロの全力の腹パン喰らったことからちよつと痛みがクセになつてしまつている

「あの衝撃……想い出を焼き尽くしたとしても、きつとあれだけは忘れませんわ……」

ミカ・ジャウカーン

末つ子な過激思考のオートスコアラ。

戦闘特化型故にボディも色々とながつていたがシンフォギア世界の錬金術師に不能はあんまり無い、他と同じく一般人並にまでグレードを下げられたけど特に気にしていない、というかそもそもよくわかつてない

燃費の悪さは相変わらず、事あるごとにガリイに迫つて想い出補給。でも人間の食べ物もスキだゾ

「お菓子はいいブンメイだゾ」

サンジェルマン

実は圧倒的ヒロイン属性を誇る中間管理職の錬金術師

悪の女幹部でありながら根っこは心から人類の未来を憂う素敵な人

ただしここでは全裸の上司とフリーダムな同志に振り回される胃痛持ち

「お母さん……職場が地獄です」

カリオストロ

ヒロの天敵、TS枠その1

元詐欺師だけどサンジェルマンとの出逢いで色々心境も変わった女性ホルモン煮えたぎるc.v. 蒼井

飄々とおちやらけてるように見せかけて、サンジェルマンへの信頼と忠義は本物、そういう意味ではギャップ萌え

肉体的にも精神的にも男女どっちもイけるやべーやつ

「あーしの愛馬は凶暴です」

プレラーティ

ヒロの天敵、TS枠その2

かつて快楽に耽っていた、そっち方面ではカリオストロ以上にやべーやつ

アダムに対しては何一つ信用せずむしろ疑念しか抱いていないため、どうやってサンジェルマンから引き離すかをカリオストロと二人で模索中

「男から女へと変わった、やろうと思えば逆も出来る。つまり——生やせる、というワ

ケダ」

主人公逃げて超逃げて

アダム・ヴァイスハウプト

パヴァリア光明結社の統制局長。裸の錬金術師。割とすぐ脱ぐやべーやつ

公式で無能呼ばわり、才能無いのに慢心しきつた結果、あらゆる意味で足下掬われて爆発四散した慢心野郎

過程はともかく、底力はラスボスの風格が無くも無かった

ここではどうなるか、作者も計りかねていたりする

平行世界ではただの変態

「到達してみせる、目指す場所へと」

ヒロの母親

ぶつちやけど〇えもん粹

国動かせるレベルの資産家、国に限らず国連の軍事行動にすら口出せる発言力、エルフナインの新しい器用意するツテがあるなど作者としてもどうしてこんな都合増し

増しな存在にしたのかわからなくなるレベル

AUOの蔵でも持つてるのだろうか

旦那（婿養子）も存命でメチャクチャ愛し合っていたりする

「息子の嫁？ 特にこだわりは無いからクズでないなら誰でも構わんよ」

ヒロの父親

OTONA

普段は温厚でほわほわしてる優男だが、一度キレると妻にしか止められなくなるや

ベーやっ

ヒロの生存力の高さはこの人が育てた

浮気も不倫もしないどころか妻以外の異性は眼中に無い

「ハーレム？ 良いじゃないか、家族が増える」

相原ヒナ

平行世界におけるヒロ。こちらは女性

基本的にヒロと同じだが、こちらは乖離剣と鎖を持たない代わりに蔵持ちでガンガンノイズに斬り込んでいくスタイル

ヒロと比べてややメンタルが強い。具体的にはNTR食らってもノンケと百合スキ一貫けたくらいには。

本人はノンケなのに気付いたら百合ハーレム出来ていたこと、尻と言わず身体余すことなく装者達から狙われていることに日々怯えている

「でも最近みんなが魅力的に見えてくるんだよね……」

余談だがとある錬金術師に貞操を狙われている。

ヒロと出会うことになった場合、百合好きなどころで意気投合するだろうけど、片や鎖と乖離剣、片や蔵持ちなため

「おう蔵寄せや」

「おう鎖と乖離剣寄せや」

と、どっかのクラス違いの大英雄もかくやとばかりの不毛な争いが勃発する。

ヒロは防戦特化、ヒナはゴリ攻め特化なためたぶん決着は着かない

くたびれバレンタイン

2月14日

それは一年に一度の、乙女の聖戦が日本各地で勃発する、戦争の日
策を巡らせ、他者を蹴落とし、己が望む結末を掴み取る。そんな、たった24時間限
定の血みどろの戦さ場

乙女達は知っている。これは戦争だと

乙女達は理解している。逃げるは恥だし役立たずだと

乙女達は、この言葉を何よりも胸に刻む

戦わなければ、生き残れない

これは、どこかで起きた、或いは、どこかで起こりうるバレンタインデーの一幕――



「くたばれバレンタイン!!! (挨拶)」

アイサツは大事。古事記にもそう書いてある。

まあ朝目覚めて第一声がこれというのはどうかと自分でも思う。

ただ関係無いケド、聞いてくれ。とんでもない夢を見たんだ。

まさかアダムがあんなことをやるとは思わなかった。夢だけど

カリオストロの雄声やプレラーティとサンジェルマンさんのシャウトには震えたね。

夢だけど

にしても、今日は珍しくセレナが来ていない。いつもは大声出そうものなら注意しに

来るハズなんだけど

「ま、いっか」

それならそれで自分の時間が作れるし、顔なり何なり洗ってメシにしよう。幸い今日

は何も――

「……2 / 14」

……

……あ、もしもし、お疲れ様です。相原です。今日ってバイトの手って……あ、大丈夫?

夫? そうですか、わかりました。失礼しまーす

「……くたばれバレンタイン!!!! (2回目)」



バレンタインデー、乙女の聖戦とは言ったが、それがどういう意味合いなのかは千差万別。王道を往く者もいれば、親しい友人と送りあうに留める者もいる。

そしてとある女子校にも、そんな一幕が

「ひーびき」

「んお? どしたの、未来?」

「はいこれ。ハッピーバレンタイン」

「おお!? ありがとう未来! やー、毎年悪いねえなんだか」

「ふふっ。そう思うなら、もっと私に心配とかかけないようになってほしいかな」

「たはは……それを言われるとなあ……つと、今年は一味違うんだよねえ」

「?」

「私から未来にも、ハッピーバレンタイン!」

「……え、嘘。響が?」

「その反応ひどくない!?!」

立花響と小日向未来。十年来と呼んでも良い親友同士、いつもと変わらぬ言葉と態度。その睦まじさに興奮する馬鹿がないおかげで、それはそれは穏やかなムードである。

「クスツ、冗談だよ。ありがとう響」

「まったくもう。未来、最近いじわるじゃない？」

「ヒロさんばかりじゃなくて、もうちよつと構ってくれたら直るかもねー」

「うえああ……！」

「……お返し、期待しててね？」

「……うん。私もちゃんとお返し用意するからね！」

「あつ、響さんいたデス！」

「やっぱり未来さんも一緒。クリスマス先輩、ほら」

「わかつてる！ わかつてるから引つ張んな！」

「ほえ？」

「ん？」

そんな響と未来へと歩み寄る三つの人影。

先輩、友人、後輩、戦友。いくつもの数奇な巡り合わせにより今の関係に至った、暁切歌、月読調、雪音クリス。

各々の手にはそれぞれを象徴する色合の小袋が

「響さん。それに未来さんも。ハッピーバレンタイン」

「デース!!」

「……ん」

三者三様に差し出されたそれ。響も未来も、嫌な顔ひとつせず、笑顔のままに受け取った。

花も恥じらう十代の乙女が5人。微笑ましく、また愛らしいその光景、見る者が見れば、さぞや「平穩」という言葉が浮かんだだろう。

まあそんな平穩を壊すのも、また日常の象徴なのだが

「立花さん！ あたしのチョコを受け取って！」

「雪音さん、一目見た時から憧れてました!!」

「小日向さん、この後アバンチュールと洒落こまない!？」

「暁さん是非とも私の妹に!!」

「調ちゃん抱きたい（迫真）」

乙女5人が、乙女がしてはいけない顔になったのは、想像に難くない



場所を変えよう。

テーブルに着くのは三人のトップレディ。

朝焼けのような緋色の長髪、やや露出多めな装いの天羽奏。そのバストは豊満である。その奏の相方にして親友、さらりと艶のある蒼い髪を靡かせるSAKIMORI、風鳴翼

その二人の向かいに座る、桃色のふわふわしたロングヘア、ネコミミめいた頭頂部がチャームポイントなマリア・カデンツァヴァ・イヴ。バストも豊満だ

三人が囲むテーブルに置かれた、いくつも仕切りが入れられた小箱。日にちから察するに、中身はチョコ

「……………ん、うまい！」

「確かに……………甘すぎず、かといつて苦味もほどほど。味や形も数の分だけ違いがある。見た目も華やか……………流石だな、マリア」

「そう、よかった。料理はともかく、お菓子なんて初めてだったから、好評なようで何よりだわ」

「しつつかし、バレンタインだからって手作りとはねえ。本当に根っこは生娘だよなあマリアは、あたしらの中じゃ最年長だったのに」

「フフツ、それブーメランよ奏」

「緒川さんや司令を初めのS・O・N・Gの面々、お父様とそれに……相原か。ふつ……こういう世間の催とは無縁と想っていたが、こうしてみると悪くないものだな」

「お前まだヒロ用のチョコも用意できてないだろ」

「さらりと流そうとしてるけど、彼が何を喜ぶかどうか相談に来たの貴女じゃない」

「ハイっ」

涼しげな顔から一転、胸を抑えて突つ伏した翼とそれに笑い声を上げる奏とマリア。

そんな二人を恨めしげに睨むも、当の女性らはどこ吹く風。

そもその目的を思い返し、年長、なれど乙女な三人もまた、今日という日に想いを

馳せていた



セレナ・カデンツァヴナ・イヴはご機嫌だった。

数日前より準備していた、仲間達と共に想い人へと送るバレンタインのチョコレター。

サプライズも兼ねて、家に行くことを伝えず、一緒に皆が待つ S. O. N. G. の司令部へと向かおうと胸に秘めていた。

(びっくりするだろうなあ……喜んでくれるといいけど)

ウキウキとした気分と雰囲気隠すことなく、今の彼の部屋の呼び鈴を鳴らす。直後聞こえてきたのは、何やらバタバタと騒がしい音。

「……? ヒロー?」

『アイエ!? セレナ……ちよ、ちよつと待つて! 今のタイミングはよろしくない!』

「……入るよー?」

『ダメ! 絶対にノウウ!』

普段は何の躊躇いもなく OK を出してくれる彼が、何やら切羽詰まった様子。

怪訝に思ったのも束の間

セレナの耳に届いたのは、明らかに発禁モノの女性の声だった

「——明るい内から何してるのツツツ!!」

合鍵を使って手慣れた様子で部屋へと突入

「入るなって言っただろうがアツツツ!!」

もはや半泣きの彼——相原ヒロの姿。

有り体に言って、半裸であった

「~~~~~!!!?」

一瞬で朱色に染まるセレナの顔。それは怒りか羞恥か、或いは予期せずしてソレを見てしまった高揚か

いずれにせよ、彼女の次の言葉は決まっていた

「——ヒロオツ!!!」



「反省しろヘンタイ!!」

「流石に庇えないから鬼は外デス!」

「福は内……!」

「痛い痛い! ちょっと、節分とつくに終わってるんですけどオ!」

ほぼ連行という形でいつもの潜水艦にやってきたヒロ。セレナとのあれこれにより正座させて縛り付けられたまま、愛されガールと仲良しザババによる制裁を食らっていた。

彼にも言い分はあるが、古来よりこういう場では男の立場は弱いのである

「やめて! 顔が凹む! 骨格変わる! 装者の肩で人に豆まきは洒落にならないから

!

「詳しいことは知らないですが、セレナが真つ赤になったまま塞ぎこむ辺り、とんでもねーことしたのは確かデス！ もんどーむよーデス!!」

「罪は重いですよ、ヒロさん」

「しやらくせえ！ こちとら半強制的に禁欲させられてるようなもんなんだぞ！ 一人の時間に発散させて何が悪い!?!」

「んなことデカい声で言うんじゃねえこのスットコドッコイ!!」

「アー!!」

顔どころか全身に叩き付けられる炒り豆の嵐。流石に辛くなってきたのか、近場にした同性に助けを求めた。

「男がみんな司令や緒川||サンみたいだと思ふなよ!? そうですよね藤堯さん！ 藤堯さんなら俺の気持ちわかりますよねえ!?!」

「……」フイツ

「おいこらそこの童貞イイイイ!!」

厄介事に首は突つ込まない。藤堯朔也、大人の処世術である。

「……」ヒロ

「か、奏、さん……」

ついに助けかと思つた矢先、だが南無三。

奏とその背後に立つマリアの手には、同じく大量の炒り豆が

「……あたしにも納得いかねえ。ていうか許せねえ」

「ヒエツ」

「私達は映像の向こうの女未満かア!!!」

「アッ ツー!!? いいつたい目がアッ!!!」

「すんませんでした」

「もう……せつかくの場なのに」

精一杯頭を下げて謝罪するヒロと見下ろす一同。呆れた様子のマリアの声がなおキツい

「セレナも、なんだ。ごめん」

「う、ううん……」

こちらにも非があつたと自覚があるのか、ぎこちないながらも返す。そんな二人を見守っていた面々。やがて、響が沈黙を破り、告げた。

「それじゃ! そろそろあれ出しませう!」

あれ？ と鸚鵡返し of ヒロ。ちょっと待ってて、と告げられ待つこと一分弱、戻ってきた装者達の手には、それぞれが用意したそれが、あった。

「ハッピーバレンタインです!!」

「――」

「初めて会って、助けてくれたあの日から、ずっとずっと、ヒロさんに感謝してます」

はにかみながら、響が

「戦さ場に於いて、並び立ってきた日々……私は、気付かぬ内に支えられていた。だから……ありがとう」

ぎこちないながらも、翼が

「初めて会った時には、正直迷惑にしか思ってたよ。けど……お前が身体張ってくれたから、あたしは今、ここにいますよ。気がしてる。ありがとな、ヒロ」

いつも通りの笑みを浮かべた、奏が

「その、なんだ……あたしだって、お前に感謝することだって、あるんだっての……いいから、受けとれ！」

照れ臭そうに、クリスが

「セレナを助けてくれた。切歌と調に優しくしてくれた。そして……私達を、誰よりも真つ先に受け入れてくれた。それだけで、本当に嬉しかった。……ありがとう、ヒロ」

聖母の名に恥じない微笑みの、マリアが

「あたし達、色々と大変なことしちゃったデス」

「でも、響さん達と一緒に、ヒロさんは私達の側に立つてくれた」

「ありがとう、ヒロさん！」

花咲くような満面の笑顔で切歌と調が

「何度も伝えてきた。けど、それでもまだ言い足りないんだ。姉さんや、みんなと一緒にいられるこの今は、ヒロが私にくれたものだから……ヒロ。本当に、本当に……ありがとう」

頬を染めながら、まっすぐその目を見つめるセレナが

今日まで重ね積み上げてきた日々が、その全てが、無駄ではなかったのではと

目の前に広がる、皆の笑顔を見て

かつて画面の向こうから眺めるだけだった悲劇を、防いだことは、少なくとも、間違
いではなかったのではと

「……ったく」

視界が滲む。頬が熱い。それでもしつかり前を見て

「ごっちこそ——ありがとう」

その日は、ヒロにとって、忘れ得ぬ1日だった



「……キャロル。ハッピーバレンタイン」

「……は？」

「えっと、今日は、大切な人に感謝を伝える日だって、ヒロさん達から聞いたんです。だから……」

「そんなことに割く時間があるなら……」

「でも！」

「ッ……」

「それでも、ボクがここにいるのは、元々、キャロルがボクを生み出してくれたから……」

「……」

「……だから、ありがとう、キャロル。ボクを……この世界と出会わせてくれて」
「……フンツ」

「わわっ。……キャロル、これは」

「借りは作らん。取っておけ。……菓子なぞ、一人で二つもいらん」

「——キャロルツ!!」

「ガツ!?! 抱き付くな阿呆が!?!」

誰かが望んだそんなキセキ

誰かが求めたそんなミライ

ある種の、何かの戯れとしても、誰かがこの瞬間に感謝している
ハッピーバレンタイン、世界

おかしい。こんなことは許されない

——その日は、どうにもぼんやりとしていた

起きた時から妙に頭が冴えない。

朝は珍しくセレナが来ることも無かったので、身支度を終えた後、自分で用意した朝飯食つてもまだ頭の中に霧がかかったように薄ぼんやりとしている。

風邪か？　とも思ったけど、計れば平熱。頭痛を始めにそれを思わせる兆候は無し。詰まるところ、原因不明。

バイトも休み、文字通りすることも無いからゆっくり休むか、なんて考えてたら、狙い済ましたかのようにS・O・N・G・から呼び出しコール。

まあ意識はハッキリしてるし、大したことでもないだろう。S・O・N・G・に顔出してそのまま出ずっぱりでも良いか、なんて楽観的に考えていた。

……それがアカンかったんやろなあ

・ターゲット第1号：許容範囲

「……マリアさん」

「あら、ヒロ。どうしたの？」

「ちよつとお訊きしたいことがあります」

「そうなの。それで、何を？」

「……」

「……ヒロ？」

「……」

「ちよつと、どこ見て……」

「マリアさん」

「な、なに？」

「ちよいちよい、『言えば胸触るくらい構わない』とか言ってますよね」

「え、ちよつ、今それを言うの!？」

「その『触る』を許す範囲ってどのくらいなんです？」

「ど、どのくらい……?？」

「一口に『触る』と言っても色々あると思うんです。軽く手を当てるだけなのか、ガッツリ押し付けるのか。それともそのまま揉むまでありなのか」

「もっ……!？」

「服の上からか、或いは突き抜けて生でもOKなのか」

「ちよ、ちよつと待つてヒロ！ 貴方、どうしたの!? 今までそんなこと言わなかったのに！」

「どうしたも何もご好意に甘えてみようと申ただけです。それで、どうなんです？ どこまで許せるかはマリアさんの匙加減に任せます。それを踏まえて俺は今ここに宣言します」

「な、なにを……」

「マリアさん。俺は今から——貴女のおっぱいに触ります」

「もし仮に、マリアさんが許すと言うのであれば、触るに留まらず好き放題にします」

「好き放題ツ!？」

「ええ。具体的に言うならまず服を」

「ま、待ちなさい！ 待つてえ！」

「はい」

「す、好き放題につて……その、まさか、て、手で触る以外にもじやあ、ない……わよね？」

「まさか。俺の頭で思い付く限りの全てやらせてもらいます」

「触ります。揉みます。もうメチャクチャにします」

「や、やだっ、やめて！ やめなさいその手つき！」

「何故です」

「ふっ、服！ 服の上から少し触るまで！ そこから先はまだお預け！ そこからは

……！」

「そこからは？」

「け、結婚するまでダメなんだからアツ!!」

「乙女脳!」

※殴られた上に逃げられた

・ターゲット第2号：コンプレックスくらい抱いて良いじゃない防人だもの

「相原」

「はい」

「私は防人だ」

「そうですね」

「と、同時に歌女でもある」

「存じております」

「だから、諸人の前に出ること。そこで歌うことも私の責務だ」
「そうですね」

「だから、恥を晒さぬように普段から気を遣ってもいる」

「間食なり夜食なり控えたり、欠かさずトレーニングしたりですね」

「ああ。だから、剣でもある私の身体に、余分な脂肪など欠片ほども無い。……余分な、

脂肪など、無い」

（おつ、自虐か？）

「……相原」

「はい」

「自分で申告するのも烏滸がましいとわかつてはいる。壁だの盾だの揶揄する不躰な輩が
いようともだ。……私の身体は、均整が取れていると自負している」

「わかつてます」

「……奏やマリアはなんであなんだろう」

「……」

「……」

「……翼さん」

「……笑いたくば笑え。一時の気の迷いだ」

「需要はあります」

「要らぬが一応聞いておこう。どこにだ？」

「……俺とか？」

「……」

「……」

「……」

「……揉んで良いですか？」

「天 誅 ツ ！ ！ 」

・ターゲット第3号：サバサバ姉御系が恥じらうのクツソ興奮する

「なあヒロ」

「なんです奏さん？」

「お前、本当に男なんだよな？」

「ええ、もちろん」

「……前から思ってたんだけどさ。あたしらの誰かしらに手え出そうとか考えないのか？」

「前に仕返して押し倒したら真っ赤になって固まった人が何か言ってる」

「忘れてよ！」

「……んで。手え出すか考えたかどうかでしたっけ？ そりやありますよ。美少女か美女しかないんですから」

「お、おう」

「ちなみに現在進行形でどうやって奏さんにセクハラしようか考えてます」

「待て、それは流石に唐突が過ぎる」

「何言ってますか。いつもこっちの都合まったく考慮せずにボディタッチかましてくるくせに」

「ぐぬっ」

「つーわけなんでおっぱい触って良いですよね？」

「……お前、何か今日おかしくないか？」

「そうですね？」

「そんなセクハラ祭な奴じゃなかったろ」

「なるほど、オープンにする欲求を変えただけで幻滅したと」

「いや、違うからな!？」

「じゃあなんです？ 俺だって我慢の利かなくなる日もありますって」

「……」

「……………」

「……………胸」

「はい？」

「触りたいんだろ？ ……良いよ。お前なら」

「やったぜ」ワシッ

「」

「……………おお」

「……………の、ノータイムで、しかもホントに来る、とか……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」プルプル

「……………奏さん」

「な、なん、だよ……………」

「このまま服の中に手え突っ込んで生で良いですか？」

「駄目に決まってるだろ!?! ここ本部の廊下だぞ!」

「露出プレイとか興奮しません？」

「するかアツ!! ……あ」

「?」

「後ろ」

「はい?」

「いや、その……………翼」

「えっ」

壁一（●）

「ヒエッ」

ターゲット第4号：Q. 色気より食い気、と言わんばかりの元氣澆刺明朗快活っ娘がもによっている。あなたならどうする?

「あ、ありのまま、今起こったことを話すデス! あたしは本部に入ったと思っただら響さんを膝の上に乗せてそのまま後ろから抱き着いてるヒロさんに遭遇していた。何を言ってるかわからねーと思うだろうデスが、あたしも何を見たのかわからなかった。デレ期だとかリバみたいなのはチャチなものじゃあ断じて無いデス。もつと恐ろしいもの

片鱗を……」

「説明ありがとう切ちゃん。……でも、どういう状況なんだろう、これ」

「……」 ギュー

「あーうー……きりかちやーん、しらべちやーん。たすけてえー」

「……とりあえず言えることは」

「未来さんがこの場にいらなくて良かった、てことデス。いたらヒロさん、とつくにミンチ
デスよ」

「ひ、ヒロさあん……何なんですかこれえ……」

「……響ちゃん、収まり良いだろうなって前から思ってた」

「へっ?」

「思った通りスツポリだわ。いやー抱き心地最高かよ」

「はわわわっ」

「……」

（う、うう……嬉しいけど恥ずかしい、離れたいのにまだこのままでいたい、とか。自分でもわけわかんない……頭がフットーしそうだよお……みくう、たすけてえ……）

「……スウー」

「ひえっ!?!」

「……」クンカクンカ

「ぎやあああああッ!? におい!? におい嗅がれてるウウウウッ!?」

「h s h s

「やつ、やだ、やだあ! やめ、やめてくださいヒロさあん! 絶対へんな匂いとかして
ますからあ……!」

「やだ。めっちゃ良い匂いしてる。もつと感じさせてホラ」

「うあああ……!」

「ど、どうするべきデスカ……助けた方が……」

「う、ん……あ」

「デス?」

「ういーっす遅くな……何をやってんだ変態共オ……ッ!?」

「クリス先輩の熱いドロップキックだよ切ちやん」

「……とりあえずは一件落着デス?」

A. 最高だった……

・で。

「……というわけでして」

「……まさか、ヒロ君がそんな行動に出るとはな……何かしら異常があると見るべきだろうが……了子君？」

「それが何も無かったのよねえ。脳波は正常。何かおクスリ入れたとかも無いようだし」

「てことは了子さんが何かしたって線は無し、か」

「奏ちゃん？」

「……それで、今」

「何すかこの仕打ち。良いじゃないですか性欲の赴くままに行動したって」

「だからって何でこんなところでやるんだよこの変態！」

「なんじゃあ！ 別にええやろがい！」

「どこ人だお前！」

「クリス君が説教中、と。響君やマリア君は？」

「よほどシヨックだったみたいでさ。部屋に引っ込んでる」

「そうか……仕方ない。俺からも言って聞かせよう」

「お願いします、司令」

「……ヒロ君」

「司令。助けてください。俺、別に自分が悪いことしたとは思ってないです」

「本部入りして早々に四人の女性にセクハラ働いておいてか」

「今までさんざつぱら挑発されてきた借りを返しただけです」

「……ふう」

「なんです。司令だつてあるでしょう、性欲のままに動きたい瞬間」

「は？」

「男なんて格式高く言ってますケド、生物学的に見れば所詮はオスですし。俺も司令も」

「ネ？」

「君は何を言っているんだ……？」

「男はみんなケダモノつてそれ一番言われてるから。こんなパツと見枯れてる司令も裏じゃエロ本読みまくりのAV観まくりよ」

「いや、それよりもだなヒロ君。今日の君は」

「覚えが無いとは言わせませんよ司令」

「……何をだ」

「俺、緒川Ⅱサン、藤堯さん。そして——司令の四人で18禁なあれこれ貸し借りして
るの」

「」

「……旦那？」

「……………」

「緒川さん」

「……………」

「藤堯さん……………」

「やめてくれ切歌ちゃん。そんな目で見ないで……………」

「まあ三人共、立派な男性だものねえ」

「……………今はその話は関係な……………待て。ヒロ君はどこに」

「……………あれ。そういえば」

「……………おいお前ら」

「あ、キャロル」

「今アガートルームの装者があの男に拐われてたが」

『……………』

「……………捕まえろオ！ 大至急だツ!!!」

「やべえぞ、あたしらはセクハラ止まりだったけどセレナ相手じゃあいつ一線越えかねない!!」

「私は立花を呼ぶ！ 暁、月読はマリアを頼む！」

「わかりました！」

「ダツシユで行つてくるデス！」

「クリスはあたしと来てくれ！ 数が多い方が良い！」

「ええ……あたし関係無い……」

「速く！」

「ひ、ヒロ？ 急にどうしたの？」

「お持ち帰りする」

「えっ」

「お持ち帰りする」

「き、聞こえてなかったわけじゃなくて！ そ、その、それって……」

「言葉通りの意味だけど」

「あ、う……で、でもこんなの、どうして突然」

「嫌か、やっぱり」

「い、嫌とかじゃなくて……」

「セレナ」

「うっ……」

「……」

「や、ヒロ……顔、近い……」

(ど、どうしよう……こんなの、急すぎる……)

(お持ち帰り、って……やっぱり、そういう意味なの……?)

(うわわ、ヒロの家ついちゃった……どうしよう、どうしよう)

(ああ、姉さん、ごめんなさい……ママ、次に会う時に言わなきゃいけないことが出来ちゃう……)

(マリア姉さん、ママ……わたし、オトナになっちゃう……!)



意識が浮上する。

目の前にセレナがいた。

ついでに言う腕の中だった。

「why?」

何故にこうなったかを秒で思い返す。

「……」

死にたくなつた

何をやらかしてんだ、数時間前の俺エ……！

ちなみにセレナに特に異常は無い。服はちゃんと来てるし室内に乱れや妙な匂い等々、一切無い。

ヒワイは 一切 無い です

『あう、あの。ヒロ……』

『ん？』

『その、わたし。初めて、だから……その……優しく、して、ね？』

『別に心配しなくていいって』

『ふあっ』

『じゃ。おやすみ』

『………えっ』

抱き枕にただけだったようで

そうこうしてる内に、目を覚ましたらしいセレナから一言

「………何か言うことは？」

「………ごめんなさい」

結局、なんで俺があんな凶行に及んだのかはまるつきりわからなかった。

そう、自分でも理由が思い至らない。

S・O・N・G・ではどうやら、童貞拗らせすぎて暴走した、とのことで片付けられたらしい。そんな程度の結論で良いのか

とりあえず、迷惑かけた全員に土下座して謝った。特に酷いことしちまった5人には念入りに

……しっかし何だったんだろう

本編

百合が見ただけです（切実）

「貴方は しんでしまいました。 転生しますか？」

「いいです」

神様転生というものがある。

早い話が、「何らかの事情により命を落とした者に神様が何かしらの特典プレゼントしつつ、二次元の世界に転生させる」というもの。

二次創作において一定の層に人気のある設定だと知ってはいたものの、まさか自分がその立場に立たされる日が来るとは思ってもなかったわけで。

「良い、ですか。では特典の方は」

「えっ。……いやいや、違うよ!？」

いいつて言うのはそういう「良い」じゃなくて結構ですって意味！ 遠慮！ No

Thank you!

「でももうそっちの方向で決まったので」

「冒頭30字にも満たないやり取りで!？」

「えー、ではですね。某鎖とガワだけ真似た乖離劍的なあれで決まりましたので」

「雑すぎイ!? てかどっかの熊も言つてたけどホントに神様つて人間の都合考えないのね! そりゃギリシヤ神話も「だいたいゼウスのせい」とか言われるわ!」

「おうあの全自動種付ストライクフリーダム下半身と一緒にすんなや」

「アツハイ」

ていうかこの方どんな神かは知らんけど割と俗世に染まつてるな……

「ちなみに貴方——歌はお好きですか?」

「は、歌? ……まあ割とアニソンとか特撮系はよく聴くけど」

「じゃ歌と百合入り淫れる絶唱世界にご案内Death」

「百合見れるんですかでも最後おかしイヤッター!」

日本語おかしいつて?

自棄だよ（断言）



諸君

私は百合が好きだ

諸君

私は百合が好きだ

諸君

私は百合が大好きだ

などという長つたらしい演説をするつもりは無い!!

自分で言うのはあれだが、俺は俗に言う「百合男子」という奴だ。古今東西、ありとあらゆる女の子同士がキャツキャウフフとイチャイチャらーぶらーぶしててるのを見るのが好きなのだ。

無論、ノンケな男女の純愛も大好きだがそれとこれとはまた別問題、男女には男女の、百合には百合の魅力というものがあるのだ。

さて、ではそんな俺が転生先に（強制的に）選ばれた二次元世界。歌と百合入り乱れる世界とくれば心当たりは一つしかない。

『戦姫絶唱シンフォギア』

『ノイズ』という特異指定災害に対抗するために『歌』の力で戦う女の子達のバトル物アニメだ。

笑い有り涙有り、熱血有りのシリアス有りと、男子が好きなジャンルを盛大に放り込

んでレッツ・ラ・ませませしたシリアスな笑いを誘う人気作品。

2017年7月現在、第四期「AXZ」放送中！

さて、女の子達のバトルアニメ、と前置きしたからには、主要な登場人物は殆どが10代の少女達だ。戦「姫」って付いてるしネ！

当然、俺好みの百合ン百合んな展開も、匂わせる程度ではあるがそれなりにある。放送期間中は、深夜にテレビにかじりついてニヤニヤしながら見ておりました。

キモいつて？ 知ってる。

まあそんな世界に転生したからには当然そんな光景を楽しみたいわけで

「あーいいわあー……」

「ふらわー」という飲食店がある。今世でバイト先に選んだ店だ。シンフォギアファン
の諸氏ならば理由は言うまでもないだろう。

「はぐつ！ むぐむぐ……んー♪」

「ほーら、がつつかないの響。ソース付いてる」

「んああ、ごめんごめん未来」

「もう……」

だがあえて言おう！

今！

目の前で繰り広げられている!!

立花響×小日向未来、ひびみくを見たいがためであると!!!

「あつ、ヒロさん！ 暇ならヒロさんが焼いてくださいよー」

「そうだね。ヒロさんの焼いたの、私も久しぶりに食べたいです」

「いやいや。俺のことは気にせずジャンジャン焼いて仲良く食べな」

仕事はする。

好物の百合も見る。

両方やらなくっちゃあいけないのが百合男子の辛いところだぜ……

……いやまあ、本当は遠巻きに眺めるだけに済ませたかったんだけどネ。

色々あつて顔見知りというか友人というか

……思いつきり関係者です、ハイ。

「でもそろそろクリスマスちゃん達も来る頃だから……」

「クリスマスちゃん来るんですかヤッター!!」

個人的に受けが似合う少女ランキング1位の彼女が!?

ひびみくで満足してる場合じゃねえ!!

「……ヒロさん、クリスマスちゃんの事になると途端にご機嫌になりますよね」

「ん？そうか？まあぶっちゃけ（百合総受け担当的な意味で）好きだし」「ヴえええ!!」（男女的な意味で）好きい!!」

ガタアツ!! と椅子蹴っ飛ばす勢いで立ち上がった響ちゃん。

……おっとーまた言葉のチョイスまちがえたかな？

「そ、そんなっ! そんな話聞いてませんよ私!!」

「ちよ、ちよつと響……」

「あー、落ち着こうか響ちゃん。たぶんお互いの間に認識というか前提が擦れ違ってる可能性が……」

普段の俺がどういう認識で接してるのか知ってるはずなのにこの慌てよう。

とりあえず誤解を解こうと続けようとした時であった。

「チーイス」

「お邪魔するデース!」

「こんにちは」

店の扉を開けて入ってきたのは見目麗しい三人の美少女達

即ち——!!

「いらっしやいませー! きりしら&総受けのクリスちゃん入りまーす!!」

「誰が総受けだコラア!!」

暁切歌

月読調

そしてマイリリイエンジェルこと雪音クリスちゃんのご来店。

ヒヤッハー小柄なボディから溢れる愛され総受けオーラがたまんねえぜ!!!

「クリスちゃん！ 切歌ちゃんに調ちゃんもこっちこっちー!」

「デカイ声で呼ばなくても聞こえるっつーのこのバカ!」

「開口一番ひどい!」

きやいきやいと姦しく騒ぎながら各々の席に着く一同。

それぞれ飲み物とお好み焼きの注文を取った後に厨房へ戻る俺。

「あーお腹ペコペコデスよー」

「ちやんと座らなきやお行儀悪いよ切ちゃん」

「ねえクリスちゃん。何で未来の隣なの？私の隣でも良いじゃん」

「良かねーよ。お前の隣じゃ落ち着いて食えねーからに決まってるだろ」

「えー!」

「まあまあ響。はい、クリス。おしほり」

「おお、サンキュー未来」

ああ〜良いっすねえ……

もうただの女友達同士のやり取りではあるんだけど、これだけで俺にとつては至福なのである。

そんな光景を見て時間が過ぎていく内に、再び店の扉が開いたことに振り向く。

「ああ、やはりここにいたか」

「切歌、調。店長さんやヒロに迷惑はかけていない？」

そこにいたのは風鳴翼さんとマリア・カデンツァヴァ・イヴさん

即ちつばマリ!!!

「あつ、翼さんにマリアさん！」

「お帰りなさいデス、マリア！」

「……いらつしやいませ、翼さんにマリアさん。お二人で来るなんて珍しいですね」

なるべく平静を装って二人に声をかける。無論、おしぼりを渡すことも忘れない。

「ええ、ありがとうヒロ。はい、翼」

「ああ」

流れるような動作で翼さんにおしぼりを渡すマリアさん。

その瞬間に僅かに触れあう二人の指先！

あーもう無理。しんどい。尊い。

何がつてこの空間が。

「ン、ンツ」

「……どうした？」

「いえ、何でも」

「そうか……」

「あ、そうそう。もうすぐ二人も来るはずだけど」

「二人……あの、まさか」

「ええ——」

「ごんちはーツス！」

「ごんにちはー」

「——奏とセレナも」

「ンッ」

あつ、無理死ぬ



……さて。

現在の時間軸は魔法少女事変、つまりGXの少し後辺り。

では何故この時点どころか一期時点で他界しているはずの天羽奏とセレナ・カデンツァ・イヴが存命しているのか。

……はい、そうです。俺のせいではない

神様からの特典というのが、またこの世界の法則ぶち壊しかねない代物だったわけ
で。

天の鎖と乖離剣

このワードで察しは付くと思うけど、まあAUOです。

ただし一般人だった以上、蔵は流石に無理だったように。

鎖はノイズへ干渉出来るけど（位相差障壁とは何だったのか）倒せはせず、乖離剣もガワを真似ただけで見た目は威力大減衰された地の理verのあれしか撃てない。その上一発撃つだけで三途の川見る羽目になるというもので、エヌマらずに一回振るって殴るだけでぶっ倒れる一発屋性能に片落ちしている。こちとら凡人の雑種だから是非もないネ！

ただし相手は死ぬ

そりやもう死ぬ

実際にやったわけではないがフィーネマックス大変身だろうとウエル入りネフィリムだろうと全力全開キャロルちゃんだろうとたぶん死ぬ。

まあそんなわけだから

『カデンツァヴナ姉妹愛を邪魔すんなやエヌマエリシユウウウウウ!!!』

とか

『天羽奏のCPには無限の可能性があんだよエヌマエリシユウウウウウ!!!』

とか

『このままいけば原作通りの濃厚なひびみく見られるけど女の子の涙には勝てなかったよエヌマエリシユウウウウウ（物理）!!!』

とかとか

やってたら原作破綻しました！反省はするけど後悔はないです！！

まあそのおかげというかそのせいでというか、原作では見られなかった絡みたくさん見れてお兄さん大満足です。

ただ原作破綻以外にも起きてしまった問題がある。

それは――

「ヒロさーん。そろそろこっち来てくださいよー」

「みんなヒロさんのお好み焼き食べたいそうですよ」

「お、おいヒロ？その、なんだ……こっち、来るなら来ていいぞー！」

「相原。その、私も立花や小日向と同じ……」

「おいおい翼、それじゃ伝わりにくいって。ヒロー！あたしと翼の間空いてるぞー！」

「ちよっ、奏え！」

「姉さん、ヒロのこと誘わないの？」

「へっ!?ちよ、何よセレナ……」

「ヒロー、一緒に食べよー？」

「じー……」

「ハッ！調のじー……が出たデス！これはわたし達と一緒に食べなきゃ収まらない流れデス！」

何か全員から懐かれちゃったんだよなあ!!

「マジどうしてこうなった……」

俺は

百合が見たいだけです
（切実）

でも（百合でなくとも）幸せならOKです

「勘違いされがちだけど俺、性癖的にはノーマルなんで」

「いや、それはわかってる」

S. O. N. G. 拠点として使われているクツソカッコいい潜水艦の一室、早い話が休憩所的な場所で藤堯さんとボーイズトーク。

何、片方は「ボーイ」なんて年齢じゃない？知ってる。

「なんかこう、あるじゃないですか。可愛い女の子や綺麗な女性がこう、同性との友情からほんの一步だけ進んでる絡み方とか関係性みたいな。あれ俺としてはメチャクチャ尊いというかクツソ好きなんで出来る限り近くで眺めていたいっていう、何て言うかほら……あるジャン？」

「悪い、そこまで饒舌に語られるとちよつと……」

「いや別に同性同士でいなきやとか女の子は女の子同士男の人は男の人同士とかそういう決めつけとか押し付けは短絡的バカの思考なんで幸せに仲良くしてくれれば俺としてはオールオツケーなんで」

「落ち着け」

「はい」

藤堯さんは手元のノーパソをカタカタしながら疲れた目で俺を見る。

「……何で毎度そういう話に俺を付き合わせるかな」

「司令は枯れてますし」

「失礼！」

「緒川さんは声がプレイボーイですし」

「偏見！……他に友達とかは」

「高校を一年目で中退した上に地元離れたバカにそんなのいるとお思いですか」

例のツヴァイウィングライブの後日、街中で警察沙汰レベルの喧嘩起こして退学です

わ！前世じゃそんなハマ起こさなかったのにネ！

まあ女の子の涙には勝てないから是非もないよネ！！

……やっべ、思い出したら泣けてきた

「まあでもその縁で響ちゃん達と関わることになれたんで結果オーライですかネ」

「ふうん……」

長い目で見るとまったくオーライじゃないけどネ



響ちゃんと未来さん（ちゃん付けとか無理）との出逢いは簡潔に話すなら立花家が周
囲から謂れの無い誹謗中傷を受けていた頃、立花父が蒸発して少しした頃だった。

学校でも家でも周りから「人殺し」「自分だけ逃げおおせた人でなし」だの何だのと叩
かれ、傷つけられ、家族以外には未来さんくらいしか味方のいなかった響ちゃんは、目
も当てられないレベルまで憔悴しきっていた。

当時の俺は前世で原作を見ていた関係で、下手に関わるとよく知る原作が壊れてしま
うこと、大好きなひびみくの絡みが減ってしまうのではというまさに外道な危惧もあつ
た（まあ原作云々に関してはこの時点でセレナも奏さんも助けていたので今更感はある
たが）

……それでもまあ、「加害者」を押し付けられている「被害者」の女の子が顔を伏せて
静かに泣いてる姿を目にして、見て見ぬフリなんて、俺には出来なかったわけだ

前世なら放置して我関せずを貫いたかも知だが、転生者となった今なら少なくとも何か
出来るのでは、という驕りもあつたわけだ

結果

『悪い、ちよつと持ってた』

『え、ちよつ』

一緒に下校してた当時の友達が狼狽えるのを余所に、その頃まっさらなJC響ちゃん
とJC未来さんを囲んでいた集団（見知った女子も何人かいた）一人をとりあえず殴っ
ておいた

『このままいけば原作通りの濃厚なひびみく見られるけど女の子の涙には勝てなかつた
よエヌマエリシユウウウウウ（物理）!!!』

そんな感じでLET'S ☆^{スマブラ}大乱闘

見るからに怯えきつてたひびみく庇いつつ逆上してきた連中をちぎつては投げち
ぎつては投げ、明らかに人じゃないナニかを殴るブツとか持ち出して来たのもいたには
いたけど、今生の父親の教えで鍛えに鍛えたおかげか当時の筋力と耐久はBはあった気
もする（錯覚）。

頭に血が上りきつてたおかげで自分が何を言ったかあんまり覚えてないケドひびみ
く曰く

『生きるか死ぬかを経験したJC寄って集ってdissるとか善悪も知らない幼稚園児で
すかテメーら』

とか

『生き残りなら俺もそうですけどーなのに俺には何にもして来ないでいたいけな女の子だけ苛めるとか恥ずかしくないんですかテメーら』

とか

『ひびみくの尊さわからないとかちよつと三日三晩調教もとい教育案件ですかテメーら』

とかとか

その場の勢いって怖いよネ！自分でも何やらかすかわからないもん！



と、まあそんな具合でフィーバーしすぎた結果、見事に暴力行為に傷害に器物損壊に知らぬ間に公務執行妨害までやっちゃってたらしく見事に数え役満で警察沙汰。幸か不幸か、母方の実家が玄孫の代まで遊んで暮らせるレベルとかいうちよつとよくわからない資産家なため、それもあって少年院行きは免れたという、リアルじゃ絶対に起こり得ないご都合全開な結末に。

まあ高校は退学になったし、両親からはメチャクチャ怒られた上にタコ殴りにされたけど。

ちなみにこの件に関しては俺がポリス署で拘留されてる間、響ちゃんと未来さんの家族の皆さんが必死で俺の弁護をしてくれていたらしい。これも後から親に聞いた。

釈放され、これからどうするかなー、とか考えていた矢先にひびみくと遭遇。

聞くとところによると俺がやらかした一件で病院送りにされた奴の身内が二人と同じ学校にいたらしく、そこから響ちゃんと未来さんに手を出すと今度は自分が、みたいな風潮が広がっていったらしい。結果的に響ちゃんと立花家への風当たりは少し大人しくなったそう。

「にへー……♪」

「……」

「未来さんそんな目で見んといてくれますか？」

それ以来二人から、特に響ちゃんにはメチャクチャ懐かれることに。「なまえをよんで（意識）」と魔砲少女めいた一言で名前呼びあうようになり、しばらくして二人がリディアンに入学するという話をされたと思っただらわーでバイトすることになった。いた、何を言っつて○

冗談はさておくとして、実際原作を知る身としては二人が仲睦まじくしている様を割と近くで見られるというので断る理由も無い（勿論この本音は伏せてる）ので、二人の

誘いに乗って現在に至る、というわけだ。

現在、隣の未来さんはやや暗い視線を俺に、俺の肩にしなだれかかる響ちゃんは特に気付かないようでごろごろ喉鳴らしてる。犬っぽいくせして猫か。

未来さんの視線が実際コワイ

『エヌマエリシユウウウウウ（物理）!!!』

そんな叫びと一緒に現れた人は、私にとって家族と未来以外で初めての味方になってくれた

『生きるか死ぬかを味わった女の子囲うとかガキかテメーらア!!』

お父さんがいなくなつて、私も家族もみんながボロボロになつていた時、自分が傷付いてでも庇つてくれた人。お世辞にもカッコいいとは言えないけど、そんなことはどうでもよかつた

『あのライブ会場の生き残りならここにもしいるんだけどさあ……俺に来ないで、被害者

でしかない子一人に絞って詰るとか恥ずかしく……思っていないんだろうネ、知ってる
！」

大勢に囲まれて、大暴れして、殴られて、殴り返して

『この二人の仲の良さ見て人殺し呼ばわりしか出来ねーとかちよつと教育だぞゴラア
！！』

結局、その人だけが警察に捕まって、後から高校も退学になったって聞いた時、申し
訳ない気持ちでいっぱいになって

『ごめんなさい！ほんとに、本当にごめんなさい！』

『あーいや、別にそんな謝られると逆に困るんじやが……』

『でも、私のせいで退学になったって……』

『いや俺がド派手にフイーバーした結果だしなあ』

『……あのっ、私に出来ることなら、何でもします！助けてもらったのに、何もお返しで
きないとか、そんなの嫌ですツ！！』

『ん？今何でもするって言ったよね？』

けど、その人——相原ヒロさんは笑って言った

『んじやあ友達……あん時一緒にいた女の子、いるでしょ？』

『え、未来、ですか？……あの、未来を巻き込むのは……』

『違う違う。申し訳ないって本気で思ってるならさ——あの子と仲良くしてほしいかな』

『——え?』

『好きなのよネ。女の子同士が一緒に仲良くしてるっていうのが』

『そんな……そんなことで……!』

『俺にとつては大事なことですぐ文句ある?』

『……無い、ですけどっ……!』

……正直、あの時はどんな無茶苦茶なことを言われても従うくらいの気持ちだった

申し訳なさすぎて、一方的に助けられただけで、ヒロさんが送るはずだった高校生活を私が奪ってしまったような気さえして

でも——

『それとき、人が善かれと思つてやったことの結果を「自分のせいだー」とか感じるのつて、逆にそつちの方が失礼だからネ?』

『うっ……』

『……だからさ、あの子と仲良くしてるところ、たまにでいいから俺に見せてよ。それだけで俺のやったことは、少なくとも俺にとつては無駄なことじゃなかったって思えるから』

『……はいっ！』

それから、未来と一緒に頻繁にヒロさんと会うようになった。ヒロさんは家がお金持ちだというけど、自分で使う分は自分で稼げ、というスタンズらしくバイトを探してあちこち駆け回るヒロさんを手伝ったりもしたりした

リディアンに通うことを決めて、未来も一緒に来てくれるって言うってくれて、駄目元で誘ったらヒロさんもリディアンから近いふらわーでバイトすることになって、今でも未来もヒロさんも一緒にいる……いてくれる

だから、あの日からヒロさんみたいに誰かを迷わず助けられるような人になりたいと思うようになった。あのライブで見た奏さんや翼さんと同じように、得することなんて無くても、泣いてる誰かのところに駆けつけるヒロさんみたいに

ヒロさんをどう思ってるか、と誰かに訊かれたら、私は迷わずこう答える

——私を助けてくれた、私の憧れの人の一人、と

双翼つて単語にときめきクライシス

天羽奏は復讐者である

理不尽な災害に家族を奪われ、その忘れ形見となった自分と遺されたとある欠片を捧げ、振るい、その運命という名の地獄へとその身を投じることになった

だが彼女は、そうするにはあまりにも力に欠けていた

神代の撃槍を満足に扱えず、繋がるだけで血反吐を吐き、命を削り、人としての未来さえ擲つてなお、神槍は彼女に振り向きもしなかった

だが、彼女は己の無力さえ糧にした

自分から全てを奪ったモノを根絶やしにするまで、弱音など吐いている暇はなく、やがて出逢った、自身の片翼足り得る少女と共に、歌い奏で、戦場を駆け続けた

——やがて、命さえ含めた全てを燃やし尽くした歌を以て、天羽奏の命は塵と消えた

それでも、忌まわしいモノ共は尽きることなく、世界と人々から命と幸福を奪い続けた

彼女は初めて呪いを懐いた

自分の成してきたこと全てが、無駄で無意味で無価値だと突き付けられたように感じて、天羽奏は運命を呪い、憎んだ

その想念はやがて世界に拾われ、彼女は——かつてよりも更に強い、大切な記憶すら磨耗するほどの復讐心を獲得した

風鳴翼はSAKIMORIである

彼女曰く、この身は剣にして人々を守護せし防人であるが、第三者から見ればTSURUGIでSAKIMORIな蒼のセイバーでなもんである

TSURUGIを振るい、生命を守護^{まも}り、同時に歌女として才を示すその姿は、あらゆる人の希望である

いつしかSAKIMORIとしての彼女の存在は後世において英雄視され、いついかなる時代においても、諸人の命を守護る存在となる

「サーヴァント・アヴエンジャー」

「同じく、セイバー」

「クソツタレな運命とやらは、あたしが全部沈めてやる」

「人の営みを守護する剣として、この場へと馳せ参じた」

「さあ、行こうぜ。一匹残さず塵殺ミナゴロシだ」

「剣を捧げ、あらゆる物からの護りとなろう」

「——という夢を見たんだ！」

「試合の最中に何をお前は云うか！（蒼ノ一閃）」

「ちよつと俺生身ッ!？」



「翼さん、防人とか何とか言いますけど生身の俺に技ぶつばなすとかありなんです？」

「私の剣を余さず捌き防いだ男子おのこの云うことではないな」

「鎖ありきですけどネ……」

ノイズの位相差障壁無効にする上に装者の皆様のアームドギアでの攻撃すら防ぐ天の鎖の頑丈さに改めて戦慄、まあどんな大英雄も封殺する上にこの世界じゃ便宜上、完全聖遺物扱いにされてるしネ。

今回みたいに翼さんの鍛練にちよいちよい付き合われる俺。曰く、「歌女として動くことは平和なことの証左ではあるが、有事の際の防人としての務めへの備えを怠ることは出来ない」と早口で告げられたのが確かフロンティア事変終わったすぐ後の辺り。

生身の俺よりギア使える響ちゃんやクリスちゃんでもいいのでは、という俺の言葉は、「まだ学生の立花や雪音、Linkerありきでなければ戦えない奏やマリア達に無理は強いられない。それにすぐに試合に赴ける」とのこと封殺。後に続いた「それに暇だろう？」という本人にしてみれば何気ない一言だったろうが、割と俺のハートはひび割れた。

ちなみに頻度は少ないが、ここにセレナも加わることもままあったりする。

「……しかし、相原も腕を上げているな」

「そうですか？」

「ああ。まともに扱うのはあの鎖くらいだというのに、その用途を自分で幅広げている」
「決定打は皆さんに任せつきりですけどネ」

「そうでもないさ。立花も言っていた。お前がいるといつもより拳のノリが鋭いと」

「本人の気分の問題だと思うんですがそれは」

「……それに……わたしも、その」

「？」

「お疲れさん、翼！」

「キャツ……か、奏？」

「おつふう」

不意打ち

ただし俺にはなく（ある意味俺にも）翼さんに。

突然翼さんの背後から肩を組んだのは、ツヴァイウィングの片翼、天羽奏。翼さんと

は大親友。

翼さんにじゃれつく奏さんという、正直この光景を拝めるだけで何もかもが最果てに至るレベルで眼福である。

「いつも良い光景ありがとうございます！」

「ん？ああ、別にいいのにさ。しかし、こんなのでありがたがるのか、あたしはヒロが未だにわからないねえ」

「ちよ、ちよつと奏、私鍛練の後で汗とか……」

「今さら気にするなつてー。あたしと翼の仲だろー？」

「ひやつ、あ、ダメ、相原が見てる……！」

「あー困ります奏さん！その絡み方は色々と困ります奏さん！奏さん！あー！困ります！あー！」

て ……うん。やつぱり、あの時の行動とその後の苦労も無駄にはならなかったんだなつ



天羽奏は、本当ならとあるライブの日に命を落としていて

その運命を覆したのが、他でもない俺なわけで

『得意先からチケット貰ったけど母は興味無いから嫁さん候補でも誘って行ってこい
(意訳)』

と、母親から渡されたツヴァイウィングのライブチケット。嫁さん候補も何も当時1
5の俺にそんなこと考える必要無かつたんですがそれは。

しかし受け取ってしまった以上は行くしかなく、かと言っても誘うような相手もい
なかつた。ポッチジャナイヨー

そして迎えてしまったライブ当日。

——俺はその日、その出来事が起こるまで完全に、その日が原作において、天羽奏
の命日となっていたことを忘れていた

その結果

『……冷静に考えてみたらさ』

辺りで巻き起こる悲鳴と断末魔。

ノイズが人を巻き込んで炭になっていく様。

そして、嵐と呼べる勢いでノイズを狩るツヴァイウイングの姿

『もつとやべえのと遭遇したけど、ノイズとかち合うの初めてじゃねえの俺?』

前世ではマスコットだの癒し担当だのと色々と言ってたけど、いざ目の前にするとそれが全くの見当違いだと思ひ知る。目にするだけでこれは常人の手にはおえない存在だつて、素人目にもわかる。

『——はっ』

特攻仕掛けて諸共に炭化する、という前知識があつたおかげで、初撃は何とか避けられた。けど、その時の俺には持っていた天の鎖がノイズに通用すると知らなくて、だから出来ることなんて何も——

『何してる! 速く逃げろ!』

斬ツ、とノイズの一匹が灰になる

その手のガングニールを振り抜いた奏さんに襟を掴まれて放り出されて

呆けている間にも、他の観客達は次から次へとノイズに食われて灰になって、翼さんと奏さんも物量にそちらへ意識を割くことも出来ないで

その内、また俺にノイズが向かってきていた

『ッ、まずい、逃げろオッ!!』

——気付けば、俺は

『——あ、あツツツ!!』

翳した右手、防げる確証も無かったのに、俺の手は鎖を呼び出して、向かってきていたノイズを弾き飛ばしていた

『……効いた』

『なっ、んだよあれは……!!?』

『ノイズを!?!』

——ノイズを弾いただとオツ!?

その瞬間司令の声が聞こえた気がしたけど気のせいだネ!

『……ははっ』

正直、その一回でだいたい察して、調子に乗ったんだと思う

『——来いや雑音ツツツ!!』

飛び出す場所は際限無く、出せる数も十本以上は当たり前で、縛り上げて投げ飛ばし、鞭打ちの要領で叩き落とす

まあ、干渉出来るだけで、倒していたのはツヴァイウィングの二人だった

『何なの、あの人……!!』

『話は後で……っ、まずい!?!』

『クツ、はは……なんだ、やれるじゃんよ才俺!』

まあ、だからというか、知ってたからと言うか

俺を狙いから外したノイズが響ちやんに向かっていつて

奏さんがそれを庇って、ガングニールが砕けて

——その欠片が原作通り、響ちやんに食い込んで

『——おい! しっかりしろ!!』

『目を開けてくれ! ——生きるのを諦めるなッ!!』

——俺が原作における展開を思い出したのは、その瞬間だった

『……待て、なんで忘れてたんだ俺』

数の減る気配の無いノイズを払いながら、まっすぐに奏さんの所に走る

奏さんは槍を掲げて、うっすらと笑みを浮かべて

『……一度、何もかも忘れて、思いっきり歌いたかったんだよな』

絶唱

装者の奥の手中の奥の手、ただし使えば、奏さんは死ぬことを、俺はよく知っていて

——今にして思えば、俺はこの時、奏さんの命よりもツヴァイウィング、というより原作ではついぞまともに拝めなかった翼さんと奏さんの未だ見ぬ絡みが見れなくなることへの危惧をこそ案じていたのではないか、と思う

だから

『はっ、うぐっ?!?』

『奏!?!』

『……すみません、ちよーつとそれやめてください』

奏さんの身体と口を鎖で封じて、その前に一歩

『ぐう、うううう!!』

『……死んでほしくないんですよネ。何だと訊かれても俺のために、としか言えません

ケド』

右手を前に

イメージするのは彼の王の光輝

地面が光って、豪奢で華美で荘厳な——原初の地獄を誘うモノが顕れる

『——起きろ』

時が止まった気さえして、俺はその空気を鼻で笑いながら手にしたそれを天に向ける
銘は無い、だがあえて呼ぶとするなら、その名は1つ

——乖離劍エア

『世界を割くは、彼の王が乖離劍』

呼び出せる鎖を全て使って、あちこちに散ったノイズを正面に纏めて固める

会場の外に出ようとしていた奴らも、翼さんと対峙していたのも、一つの例外も無しに縛り上げる

エアが吼える

唸りを上げて深紅の波が渦を為して——俺の身体から、気力や体力、生命そのものと言つてもいいナニカが吸われていく

『お前らに恨みなんて無いし、ここを片付けてもまたいつか現れるのも知ってるよ。けど……天羽奏この人に死なれちゃ俺が困るんだよネ』

腕を引く

臨界を越えた力が弾けるように暴れだすのを、必死に堪えて耐え抜く

『それともう一つ』

『天羽奏のCPには無限の可能性があんだよエヌマエリシユウウウウウ!!!』



まああれで死ねたら感動的だったんだが

それをきっかけにして二課に色々バレてあれこれ訊かれたり暗に『協力しなかつたら拘束』とか言われたりして本格的に原作に絡むことになったりかなつばにハッスルすることになったりフィーネ入り櫻井女史にポロツと色々溢しちやったりとかしたりクリスちやんとボーイミーツガールめいたり（大嘘）

「奏さん近いです」

「そうか？」

「……ムー」

「翼さんそのジェラシーめいた視線は奏さんに向いてると信じてます」

「ジェラ……!?!」

あの一件直後（ひびみくと出逢う前後辺り）は助けられた程度でデレを見せてくれるほどよろくはなかった奏さんと、しばらく戦線に出られなかった奏さんの代役の俺を力不足と断じて俺のハートを折りに来てた（無自覚）翼さん。

ここまでパーソナルスペース近くなるまでにも色々あつたよネ……

「なーにボンヤリしてんだ、よっ」

「当たってます！」

「か、奏、流石にそれは……！」

「良いだろ、誰が見てるわけもなし、ほら翼も」

「……………」

「翼さ」

「風鳴翼、参るツツツ！」

「何故そこで便乗ツ!？」

何故そこでたやマさんツ!?

「首を出せ（迫真）」

今度の舞台は彼方の聖地！

膠着の続く戦場に殴り込め!!

「おっ待てイ（江戸っ子）そいつ俺達の獲物だゾ」

「助けませい！」

「クハハハハ！ クハ、ク……………クハハハハ！」

「この無駄にけたたましい笑い声は……………」

「この聖地は、多くの血と涙に覆われています」

「それを救えるのは我々だけなのだ！」

新たな敵は誉れの騎士達、ただし全員クレイジーだ！

「その残高を奪う！」

「何？民が不満を？死刑」

「私はスヤア……………」

「暴徒？男か、女か？……………美女か、よし無罪！」

「この穀潰し!」

「湖のRが死んだ!」

「この人でなし!」

「奴らと正面からとか、我々からすれば愚策なのです」

「我々はかしこいので」

始まる決戦に熱い展開が止まらない!

「やめるのだフェネック!地球が、地球そのものが!」

「さよならアライさん、どうか死なないで……」

「何でテメエがそこにいやがる城の窓ガラス壊して回った挙句オレ一人に罪擦り付けた

不忠義モンがあ!」

「悲しい……具体的に何がと訊かれると困りますが、悲しい」

「報いを受けよ。具体的には昔私の書齋に参考書(意味深)を仕込んだことについて」

ラスト5分、あなたは興奮と感動に包まれる

「貴様……その剣は……!」

「今こそ、あなたへの忠義を示します!」

シリーズ最新作

101回目のステラ

く狂った騎士と山のオジマンく

「爆発オチなんてサイテー!!!」

「……グスツ」

「デース……」

「……まさか六作目にして泣かせに来るとは思わなかった」

「うう……予告のネタっぷりからこれは落差も温度差も良い意味でひどすぎるよ」

「終盤にさしかかる所からの畳み掛けが熱かったね、切ちゃん」

「感動したデス。特に山門ぶち抜いたフェネック師匠が親指を立てながら溶鉱炉に沈んでいくシーンは涙無しにはいられなかったデス……」

「あーあー切歌ちゃん、鼻。ほらチーン」

「チーンッ」

S・O・N・G・が提供しているペントハウス。

かつて武装組織「フィーネ」として活動していた『四人』が住む部屋にお呼ばれされたので、新作映画のDVDを持ち込んで鑑賞会してたりする。

映画を見たメンバーは、デス口調の元氣アホつ子子、暁切歌、クールに見えてツンなんて無い優しい子、月読調。

そして……本来なら、この場にはいないはずだった、世界の歌姫の実の妹、セレナ・カデンツァヴナ・イヴ。

原作では12歳くらいの頃に他界した彼女も立派なマリアさん似の大人の女性だ（一部を除く）

「スンッ……姉さんも見たら良かったのに」

「お夕飯の準備があるって遠慮したのマリアだからね。いつも仕事で疲れてるんだから、それくらい私がやるのに」

「でも最近マリアの料理の腕が今までよりドンドン上手になってきてるデス！」

「……やっぱり、作ってあげて、食べて『美味しい』って言ってくれる人がいるって良い

ことなんだよ。ね、ヒロ？」

「何故そこで俺？」

「じー、じー」

「じー、デス」

「こつち見んな」

矢鱈と構ったり甘やかそうとしてくるけど、料理食べてほしいのは君ら三人がメインな気がするんですがそれは

そこで、控えめなノツクの後にガチャつと部屋の扉が開いて、そこから一人の女性、全米チャートトップ独走中の歌姫、マリア・カデンツァヴァ・イヴさんが入ってきた。

「あ、たまらなくやらしい身体のマリアデス」

「ヒロ、屋上」

「だから何故そこで俺ッ!？」

言い出しつぺは藤堯さんなのにチクシヨウ！



「(「ご馳走さまでした(デースー)」)」

「(ご馳走さまです)」

「はい、お粗末様でした」

五人分ともなればかなりの量はずだが、全員揃って完食。マリアさんときりしらが片付け中に、食後に出されたコーヒーを飲む。

「……ヒロ。手形くつきり」

「腰の入った良いビンタだったよ」

隣に座るセレナが、マリアさんに思いつき叩かれた痕の残る俺の頬を突つついてくる。普段は温厚で無闇に殴ったりなんなりはしないけど、切歌ちゃんや調ちゃんが絡むと聖母も修羅へと変貌する。

「……ごめんなさい、ヒロ。私が叩いておいて何だけれど、大丈夫?」

「ああ、いえ。藤堯さんがそもそもですけど、溢しちゃったんは俺ですし」

「……本当にごめんなさいね」

「お気になさらず。それより、すみません。毎度のことながら俺までご馳走になっちゃって」

「え? ああ、それこそ気にしないでもいいの。セレナや切歌や調、それにあなたも美味し
いって言ってくれるもの」

優しくて慈しみに満ち満ちた……どこことなく熱っぽくて艶っぽいのが混じっている気がしないでもない……視線を受ける。

「……洗い物くらいは手伝います」

「そんな、良いのよ。お客様なんだから」

「いえ、いつもご馳走になってるんで今日くらいはやらせてください」

「じゃあ切歌と調はお風呂入ってくれば？私も姉さん達と後片付けしちゃうから」

「わかった。行く、切ちゃん」

「了解デース！」

着替えやその他一式を手に仲良く風呂場に向かう二人を見送る。尊みがやばい

「……」

「……ヒロ、ヒロ」

「ん？ああ、悪い。どしたセレナ？」

「後で私も姉さんとお風呂入るから、その時に色々見せてあげよっか？」

「セレナ!!」

「男をみだりに誘うんじゃないよお前は!!」

水道から流れる水の音、食器同士が擦れる音、テレビから響いてくる音が満ちる台所で、俺とマリセレ姉妹の三人は洗い物。男手があるのに女性に水仕事をさせるわけにもいかないので、俺が洗い、マリアさんが拭き取り、セレナが棚に戻していくという役割分担。

「……N a z eそこで愛ッ」

「あつ、それ姉さんの歌？」

「ああ。CD買って聴いてるんだけど、どうにも耳に残ってます」

「だって、姉さん」

「あ、ありがとうヒロ……」

気付けば鼻歌も出るほど穏やかな時間と空間、マリアさんとセレナと他愛ない会話をしながら洗い物を進めていく。

「……りちゃん。また……おつき……」

『デエスッ!』

『わけ……わたしもほし……』

『あつあつ、しらべ、ストップデス!』

部屋の壁と周りの音を隔ててなお、俺の耳に届く風呂にいるきりしらボイス。年齢的

には成人手前な俺だがOTONAではない。

百合男子として当然の嗜みである。

「……」

「セレナ。ヒロの顔が……」

「あれお風呂にいる二人の声聞こえてるね」

「……マリアさん、これ最後です」

「えっ。ええ、ありがとう」

「お風呂上がったよー」

「ぼっかぼかデース！」

それからしばらく三人で雑談してる内に、切歌ちゃんと調ちゃんが満足そうな顔で出てきたが、何かに気付いたらしいマリアさんの眉間に皺が寄る。

「二人とも、髪がまだ濡れてるじゃない。……さては、またヒロに拭いてもらおうと思っ
たわね？」

「うっ」

「あー、マリアさん？俺は別に構いませんケド……」

欲を言えば二人が仲良く拭いたり乾かしあつてるのを見たいが、頼まれたところで断

る理由も無い。というか合法的に美少女の髪に触れられるとあれば、百合男子以前に男として普通にありがたかったりする。

「駄目よ。まったく、前から思ってたけれど、あなた少し二人のことを甘やかしすぎよ」

「私から見たら姉さんほどじゃないような気がするけど」

「それな」

切歌ちゃんも調ちゃんもあまりマリアさんにはワガママだとかは言わないけど、たまさか出た時は何だかんだ最後にはマリアさんが折れてたりする。

「ほーれタオル持ってこっちゃん来ーい」

「わーいっ」

「よろしくお願いするデス！」

「あつ、コラ！」

「調ちゃんは時間かかるから切歌ちゃんから先なー」

「まったく……」

「まあまあ姉さん。切歌と調にとつてはお兄ちゃんみたいなものなんだし、まだまだ二人とも甘えたい盛りなんだから」

「セレナ……」

「私や姉さんみたいな姉代わり、ママっていうお母さん代わりはいたけど、ヒロみたいな男の人っていないなかったでしょ？」

「……でも、それだけじゃないのよ」

「？」

「少し前まで、特に私に甘えてきた二人を盗られたような気持ちと甘えられがちなヒロを甘えさせてあげたい気持ちがどうにもせめぎあつて……セレナ、私はどうすればッ
!？」

「本人に伝えてあげれば良いと思うよ」



「ヒロさん」

「ん？どした、調ちゃん」

「いつ私と切ちゃんのお義兄さんになってくれるんですか？」

「ンゴッフ」

「あ、それあたしも訊こうと思ってたデス！」

唐突にすぎるあまりにもな質問にむせる。

「マリアの気持ち、気付いてますよね」

「いやまあ、あれだけ露骨なら流石にネ」

「フロンティア事変の時みたいに言っただけじゃないんですか？」

「『俺のために生きろ!』……なんて、わたしお話の中くらいにしか無いと思ってました」
「やめて黒歴史掘り起こさないで」

全世界に生中継された美女の全裸を間近で見るとテンション上がるなどか無理だからネ! その場の勢いで言ったことが後になってから響いてくるなんて思いもありません!

「あれに関してはマリアさんにも謝ったし言葉の綾だってちゃんとわかってもらえたはずなんだケド」

あの一件で生き残るのはわかってたけど当事者になると不安になっちゃってネ。

(まだまだ百合ってるの見たい) 俺のためにくとか、あつやばい死にたい

「でもその後にも色々マリアのこと助けたりとかしたから、とかもあつたデス」

「意識するきっかけはやっぱりあの一言だと思います」

「う、あー」

あーダメだ顔赤くなってきた……

「……はい終わり。戻りな」

「ヒロさん……」

「……わたしも切ちゃんも、マリアには……セレナにも、幸せになってほしいんです」
「セレナも？」

何故そこで……や、いいか。察しは付くし



「じゃ、そろそろお暇します。ご馳走さまでした」

「本当に良いの？泊まっていつでも構わないのよ？」

「いえ、流星にそこまでは」

「ベッド足りなくなるから切歌と調、それか私と姉さんが一緒に寝るっていう形に」

「俺が寝れなくなるんでNG」

「フフツ……」

「切ちゃん切ちゃん」

「デスデスツ」

「「セーのっ」」

「「キヤアツ!?!」」

「「うわつと……」」

「……あつ、ご、ごめんなさいヒロ。……危ないでしょう二人とも!」

「フフツ」

「デース!」

「つたく……おいセレナ。……セレナ?」

「えう、あつ、うう」

「セレナ、真つ赤デース」

「普段は恥ずかしがって言わないけど、ヒロさんはセレナの「王子様」みたいですから」

「……っ、切歌ツ、調!!」

「キヤーデース☆」

「わーわーっ」

「……騒がしいことで」

「そうね。……ねえ、ヒロ」

「はい?」

「また、呼んだら来てくれるかしら?」

「……ええ、もちろん。いつでも」



曰く、女の子はいつでも「王子様」に憧れるものらしく、それが幼さの抜けきらない年頃ならなおさらで

だから、夢も希望も簡単には抱けないような世界でも、まだ十代の女の子がある日突然現れた少年に命と家族を助けられて、その人がまた突然いなくなつて

名前も聞けず、顔もちゃんと見れず、覚えていたのは金色に輝く、神々しい鎖と剣のようなナニカだけ

そんな出来事を経験した少女が、助けしてくれた名も知らぬ異性に「そういう感情」を抱いてしまうのも

また必然なのかもしれない

……いや俺そんなつもり全然無かつただけどネ！

異聞：ノンケが気付いたら百合ハーレム出来てた件

「ヒナさんの髪、やっぱりキレイですよね」

「そう？切るの面倒だから伸ばしてるだけなんだケド」

「マリアやクリス先輩もツヤツヤしてるデスけど、ヒナさんのもとってもツヤツヤデース」

「バストも豊満」

「ちよつ、調ちゃん、急に胸触るのは…」

「大丈夫です、わたしヒナさんのことも愛してますから」

「何故そこで愛ッ!？」

「調エツ!？」

「あー!ズルいよ調ちゃん!ヒナさんヒナさん、私も、あの、ヒナさんのこと大好きですから!!」

「いや、あの、前から言ってるケドさあ……!」

「わたし、男性が好きなノンケだからツ!!」



前世で唐突に死んで、某A U Oのあれこれ持たされて飛ばされたシンフォギアの世界。

女ながら、いや、女だからだろうか、第三者の女の子同士がにやんにやんしてるのを見ているのがたまらなく好きで、そのためなら何だつてやろうと決めて色々やってた。

セレナ助けたり奏さん助けたりフィーネに狙われる前にクリスちゃんとかあれこれしたり、あとひびみくの友達のリディアン三人娘とも絡んだりもしてきた。

「はあ……」

「よっ、ヒナ！」

「ヒエツ……か、奏さん」

「なんだよ、そんなに怯えなくても良いだろ？」

「そ、そうですね……急に肩組まれなければもう少し普通だったかと……」

「……相原」

「あ、つ、翼さんまで」

肩組んでくる奏さんと、服の裾をきゅつと摘まんでくる翼さん。翼さんのいじらしさ

に思わず顔緩みそうになるけど、それよりも早く奏さんが動き出した。

「……あの、奏さん」

「ん？」

「何故に私の肩とお腹を撫で回してるんです？」

「嫌か？」

「嫌というかむず痒いんで出来ればやめていただけるとありがたいです」

「……………」

「ファツ!?翼さん、ノウ!脇腹は絶対にノウ!」

「……………焦れたい!行くぞ翼!」

「うっ、うん!わたし頑張るよ奏!」

「どこにイくの!?!ナニを頑張るの!?!」

「やめっ、引き摺らないでください!わたしにエロいことするつもりでしょう!?!薄い本みたいに!薄い本みたいにい!!」

※逃げ切れました



「エロ同人みたいな目に遭うとこだったヨ……」

何とかその後追手も振り切つて、今はふらふらとS. O. N. G. 潜水艦のわたしに宛がわれた部屋に向かつてる。皆のボディタッチが日増しにどんどんすごいことになってるよネ……

「休もう……ていうか寝よう。寝て忘れよう……」

部屋に入る

視界が真つ暗になって、顔がやーらかい何かに埋まる

ついでに後ろからもやーらかい何かに抱きつかれる

「……………マリアさん」

「なあに、ヒナ？」

「何でわたしマリセラ姉妹にサンドイッチされてるんです？」

「ヒナ、こういうの好きでしょ？」

「男だったら大歓喜してルパンダイブしたと思いますケド、わたし女なんで普通に戸惑ってるんだよネ……」

「ふふつ……まあ、今はそんなことはいいのよ、ヒナ。疲れてるでしょう？」

「私と姉さんで見てるから、このまま一緒に休んじやお？」

「……………」

ちやうねん……姉妹一緒に寝てるのを見るのが好きやねん……そこにわたしが入る必要は無いねん……

「おうちかえる!!」



何かがおかしい

わたしはあくまで百合を眺めていたかっただけなのに、何故にわたしがそこに放り込まれているのか

「わたしはノンケだあ……!」

「……ほらよ。あつたかいものどーぞ」

「うう……あつたかいものどーも」

響ちゃんやきりしらちゃん、ツヴァイウィングやマリセレ姉妹と違って、クリスちゃんだけは何の気無しに接してくれる。ああ、ここがわたしの聖域なんだネ……

「……クリスちゃん」

「どした?」

「わたしとどこか遠い場所に逃げて永住しない?」

「ブハツ!?ば、バカ言ってるんじゃないよ!」

「だよねえ……」

クリスちゃんは……うん、やっぱり司令といるのが様になってるからね。

「……ねえクリスちゃん」

「なんだよ……アホな提案なら聞く耳持たないからな」

「そうじゃなくてさ……普段のみんなのわたしに対する行動、どう思う?」

「どうって……あ、あたしに、んなこと聞くなよ!」

「お願い!わたしと同じ数少ないノンケ女子の味方が欲しいの!このままじゃ凌辱レズハーレムものの薄い本展開待った無しなの!」

「りようじよ……!?!」

顔真っ赤にしたクリスちゃんに思わず抱き締めたい衝動に駆られるケド耐えるよ!

わたしノンケだから!

「そ、その、なんつーかき、そういうのはもつとこう、なんだ……」

「うん」

「……」

「…クリスちゃん?」

「そんなことを声高に言うものじゃないぞ！」

「ううっ、確かにしれえに比べれば子供です！親子ほどの年齢差あります！けど、もうわたしにはしれえしか……弦十郎さんしかいないんですよう!!」

「むうっ……」

無理無茶無謀は百も承知！でもここでダメなら——

「——ヒナさん」

「ヒエツ……」

振り向く

いた

みんな揃って、そこにいた

わたしの司令への言葉をすっかり聞いていたのか、どことなく眼が妖しい色を宿している

「み、みんなが何て言おうと！」

「どれだけわたしを想っていようと！」

「わたしは、男性が好きなノンケだからッ！」

わたしは！

百合が見たいだけです！（切実）

「何て夢を見てんだ俺は……」

総受け愛されガールきねクリパイセン

あいつと知り合ったのは、たしかフィーネと出逢う直前辺り。

日本に帰って来て、何をどうすれば良いかわからないままぶらぶらとほつつき歩いてたところに、あいつが現れた。

『HEY Girl! お茶しナイツ!』

……後で聞くと、あれは『ナンパ』とかいうやつらしい(あいつ本人は否定したけど)『……………』

『あつすいませんごめんなさい嘘デス!ちよつとその目やめて!』

あの時なんで声かけたのか訊いたら「ティンと来た」なんて言いやがる

『ついて来んな』

『いやそんなんじゃないでさ、俺もこつちの道なのよネ、本当に』

その時はただのウザい奴くらいにしか思ってた。

けど――

『力が欲しいか?』

『えっ……………』

『この沢城、直接脳内に……!』

急に人氣が無くなったと思つた瞬間にフィーネが現れて、力あるものを消し去りたいか、なんて言われて

『パツキンボインな痴女いねーちゃん、ちよつとだけこの子借りるネ!』

『はあ!?!』

『なん……!?!』

何かを察したのか、それともその後のあたしがどうなるかを知っていたのか、あいつはあたしの手を引いて走り出した

けど結局、フィーネから逃げ切れずにあいつは死にそうなケガをさせられて、あたしはフィーネと付いていくことになった

ココロがボロ雑巾だったのもあったのかもしれない

ほんの少しだけの時間だったのに、あいつは自然とウザい奴からおかしな奴っていう印象に気付いたらなつてた

それからルナアタックまで、あたしとあいつ——ヒロが会うことは無かつた

『翼さん!』

『何だ相原!?!』

『この状況俺どつちに味方するべきなんです!?!』

『愚問だぞ其れは!』

おかしな奴はおかしなままで、ちよつとだけ安心してたあたしがいて

おつさんや未来や先輩や奏先輩、あのバカと出逢つて、二課に入つてからもあいつは
変わらなかつた

『そうそれそれ。いいよーその構図。……ちよつと顔硬いヨークリスちゃん』

『なんでこんなことしてんだあたしは……』

『未来さん、もそつと寄つたげて』

『えと……こうでいい……ごめんクリスマス。もう少し離れてもらえる?』

『寄つてきたのお前だろ!?!』

『ああくみくクリ良いつすねえ〜』

『未来とクリスちゃん……ヒロさん、私なんだか開けちやイケナイ扉開きそうなんです
すけど……』

『その感覚がその内ヤマミツキになるから……でも寝取られに目覚めるのだけはやめて
ネ』カシャカシャシャ

『ちよつ、何を撮つてやがる teme エ!』

女同士が、か、絡んでるのが好き、とか。あたしのことを「総受け」なんて呼んだり

するヘンタイめいたところがあつたり

それでもあのバカと同じ……良い奴だ、つてーのはよくわかつたんだ



「……熱いですネ司令」

「だろう？ 君ならそう言ってくれろと信じていた」

「くだんねーことで信頼してんなおっさん」

司令おすすめというアクシヨン映画を連チャンで見っていた俺と司令とクリスちゃんの三人。パツと見冷めてるようなクリスちゃんだが映画から溢れ出てたパツシヨンが溜まりに溜まっている様で。

ちなみに一番ノツて来そうな響ちゃんも夏休みの宿題にヒイヒイ言わされてるらしく、不在。

「どうします？ もう一本行きます？」

「そうしたいところだが、クリスくんはそろそろ帰らないとまずいだろう」

「あ？……あー、そうだな」

「少し早いし陽もまだ高いが用心に越したことはない。ヒロ君、すまないが送ってやつ

てくれるか？」

「ちよつ、ガキ扱いすんな！一人で帰れる！」

「俺は構いませんケド、司令の方が確実じゃありません？」

「いや、そうしたいのは山々なんだが、俺はこの後やることがあつてな」

「あ、そうなんですネ」

「聞けよお前らア!!」

抗議しつつ俺の尻に蹴り入れてくるクリスちゃん、我々の業界ではご褒美です！

「ありがとうございます！」

「なにを喜んでやがんだ気色悪い!!」

シャー！と眉つり上がって犬歯剥き出しにして吠えてくる。嘘みたいだろ、受け体質

なんだぜ、この娘。

「……」

「司令がとても深い慈愛に満ちた眼をしている」

「どうしたおっさん」

「いや、初めて会った頃に比べて、クリスくんもだいぶ柔らかくなつたと思つてなあ」

「物理的に？精神的に？」

「セクハラア!!」

「後者に決まってるいるだろう。……しかし、何だろうなあこの感覚は」

「……娘の成長を喜ぶ親の心境では？」

「それだツ!!」

「気安くあたしのパパ気取るんじゃねー!!」



ヒロにも未来にも、おっさんにも、感謝してる

特におっさんは、パパとママを亡くしてから知った、優しい大人で、こっそりともう一人のパパみたいに思ってるあたしがいて

ヒロもおっさんも、口の悪いあたしに嫌な顔一つしない

それはもちろん、あのバカを初めに、みんな一緒に



『ヒロさん。わざわざ私に頼みってなんでですか?』

『リディアン組、クリスちゃん、夏休み』

『おk把握』

そんな会話を響ちちゃんとした翌日。

藤堯さん改め暇人ネトゲーマー協力のもと、響ちちゃんに取り付けた（当人と未来さんの許可はなんとか取れた）特殊マイクから送られてくる音声——チーム・リディアンと共に街に繰り出すクリスちゃんのあれこれを聴かせてもらおうというわけだ。

……うん、普通に盗聴だネこれ！割と最低なことしてる俺！

でも女の子の集まりに付いていくわけにもいかないし、尾行できるほどの気配遮断ス
キルなんて持ってないし

あと視覚情報無いから声からどうなってるか妄想も捗るし

ここんところノンケ事案多かったから初心に立ち直るとい意味もあるし是非もな
いよネー！

『あつ、クリスちゃん！こつちこつちー！』

『おはよ、クリス』

『ああ』

『おはよーございます！デース！』

『おはようございます』

聞こえてくる五人分の声。響ちちゃんが立てたプランでは朝から晩までぶつ通しらし

い。

『じゃあ行こっか!』



CASE. 1

『で、なんでいきなり下着屋なんだよ!!』

『クリスちゃん言ってたじゃない。最近下着がキツイ、って』

『なっ、ばっ、誰かに言った覚えねーぞ!』

『ぼやいてるのたまたま聞いたって、マリアさんが』

『マリアア!!』

『だいじょーぶだいじょーぶへーきへっちらら!未来のセンス良いからっ。ね?』

『お前が選ぶんじゃないのかよ!』

『……………ごめん響。私、調ちゃんと見て回るから』

『へっ?あれ、未来、何でそんな虚ろな眼してるの?何で距離取るの?未来!?みくー!?』

『切ちゃん、クリス先輩に付いてっね』

『調ツ!?!』

「開幕からレベル高過ぎイ」

『ほらほらクリスマスちゃん！これなんてどう!?』

『透けてるじゃねーか!』

『クリスマス先輩、こっちはどうデス!?』

『だから透けてるじゃねーか!』

『『じゃあこれ(デース)！』』

『いい加減に……あ、いや、悪くない、か?』

『じゃあ買っちゃお！いやまずは試着だね！手伝っちゃうよクリスマスちゃんおつきいんだからー!』

『イエーイ！ナウい下着を試着室でゴーゴーデース!』

『はあ!?!いや、それくらい自分でやれるっつーか放せエツ!?!』

『……………』ペタッ

『……………調ちゃん』

『……………世の中って不公平ですよね』

みくしらちゃん強く生きて

『ホラホラ脱いでクリスちゃんホラホラホラホラアッ!』

『触んな、脱がすな、さらつと揉むなア!!』

『おおう、近くで見るとやっぱりとんでもないポリュームデース……』

やっべえぞ音声だけで何が起きてるかだいたいわかる!

『やめつ、ほんと、やめろオツ!!』



CASE. 2

『いたい……』

『デース……』

『つたく』

『大丈夫、切ちゃん?』

『響は調子に乗りすぎ。反省しなさい』

『だって、クリスちゃんの生着替えだよ!?我慢出来るわけないよ!』

『声デケーンだよこのバカ!!』

『いたあい!?!』

『クリスもほどほどにね』

『……あ、そういうええ。クリス先輩、確か髪留めも新しいの欲しいって前に』

『あ？あー、そういうやそうだったな』

『じゃあ今度はそれ買いに』

『お前そろそろ黙れ、いいな？』

『アツハイ』

『ゴーゴーデース！』

『これなんてどう、クリス？』

『これかあ？いや、あたしには似合わないだろ』

『そう？クリスの髪と合いそうだけど』

『いや、そう言われてもよお』

『クリス先輩、ならこっちはどうですか？』

『ん？おお、シンプルで良いな』

『少し違うけど、わたし達髪型ツインテールだから、おそろいのです』

『お、おう……』

『フフツ……可愛い後輩だね、クリス？』

『うつ、うるせえっ』

『私も選びたかったナー』

『ぐぬぬ……わたしも調とお揃いしたいデス……』

『……あれ。気にしてなかったけど、切歌ちゃんと調ちゃん、お小遣いとか平気なの？』

『へ？あ、はい。今日のこと話したら調と一緒に分、ヒロさんがくれたデス』

『ヒロさんが？』

『……マリアもセレナも、その辺キビシーデスから』

『あー……というかヒロさん、切歌ちゃんと調ちゃんに対しては近所のお兄さんというか親戚のおじさんみたいだよね』

おじさん言わないで！自分でもちよっと思っただから！

『……』

『クリスちゃん嬉しそう』

『そうだね』

『調ツ、調ツ。今度はわたし達でお揃いの何か買いに行くデスよっ』

『うん。約束ね、切ちゃん』

あー尊し……



CASE. 3

『ごはんアンドごはーん!』

『ここ、お前が調べたんだけか?』

『うん。人数多いから、こういうピユツフェ形式も良いかなって』

『ふおおお……調、すごいデスっ』

『うん、美味しそうな料理がたくさん……マリアとセレナに持って帰れるかな?』

『座ろ座ろ! 私もうお腹大宇宙だよー』

『意味わかんねえ』

……腹減ってきたな。昨日の残り物でいいかね

『はい、切ちゃん。あーん』

『あーん……んふー♪おいひいデース……調にもお返しデス。あーん』

『あーん……ん、おいしいね切ちゃん』

『デスデス♪』

『ほら、響。がつつかなくてもご飯は逃げないから』

『むぐっ……ん、ぐ。ありがとー未来』

『もう、本当に響は……』

『だからお前から人前でそういうことはだなあ……』

『あつ、クリスちゃんも食べて食べて。はいっ、あーん』

『はっ!?!いや、お前……!』

『あーん』

『だからおま』

『あーん』

『ちよ』

『あーん』

『………アーン』

『どおどお?おいしい?』

『……ゴクツ。ああ、うめえな』

『でしょー?よかったよかつ……あれ、クリスちゃん?何でそんなに大きな熱々のソーセージを私に向かって構えてるの?』

『んー?自分がしてもらったら相手にもオカエシしないと失礼なんだろう?』

『あ、あははは。やだなークリスちゃん。それも時と場合によりけりっていうか』

『誰かが言つてたろ?——やられたらやり返せ、倍返しだつてなあ』
『ヒエツ……』

『はい、あーん!』

『むぐあつふう!?!』

『——持つてけダブルだ!』

『アツウイ!』

『ちよつと二人とも、もう少し静かに……!』

いや、一人飯つて辛いネ!でもこの音声だけでご飯三杯いける!!

『切ちゃん、あーん』

『調も、あーんデス』



CASE. 4

『大丈夫、響?』

『お腹いっぱいだけどくちびるヒリヒリする……』

『自業自得だこのバカ』

『たくさんお持ち帰りに出来てよかったデース』

『マリアとセレナ、喜んでくれるかな?』

『……大丈夫だよ、きつと。さーてクリスちゃん、次はどこ行くー?』

『あ?……あたしは別にどこ行きたいとかはねーけど』

『あつ、だったらわたし、げーむせんたーに行きたいデース!』

『おー良いねー!』

『でも切ちゃん、午前中の買い物とお昼ご飯でわたし達のお小遣いもうあんまり……』

『あうつ……そういえばそうだったデース……』

あんまりあげられなくてごめんね!金の無いお兄ちゃんてほんとごめんね!!

でも君達には君達の将来のために自分達のお金は貯めといてほしいからさ!

『……別に、お前らの分くらいあたしが出すよ』

『えっ……』

『いいんデスか?』

『だーもう良いつつつてんだろ!行くなら早く行くぞ!』

『はいデス!』

『ありがとうございます……!』

『うんうん。良い先輩だねえクリスちゃんは』

『私と響も二人にとつては先輩でしょ?』

『あははは……そだねえ』

『……あ、でも』

『?どうしたの、切ちゃん』

『このお土産、どこかに置いてこないと危なくないデスカ?』

『あつ、そうだね。保冷剤貰ってるけど、夏だから溶けたら痛んじやうかも……』

『んー……あつ、そうだ。確かヒロさんのアパート、ここから近かったはずだよ!』

えっ

つてもう電話来てる!?しかも未来さんだし!

『なんだ、じゃああいつに言ってお前らの家に届けさせたらいんじやねえか?』

『で、でもお小遣いもらってるのにそこまでさせたら流石に悪いデス!』

『そうです。早めに帰るか、どこかで保冷剤足すかして……』

未来さん、俺は一向に構わんって伝えてください

『ヒロさん、OKだつて』

『『早いッ!?!』』



結局、届けに行ったらマリアさんもセレナもいなかったもので、メールだけ送っておい
て帰宅。

バイクも車も無いから自転車ママチャリで往復、その間だけで保冷剤がだいぶ危なくなつたので
俺の住む部屋の冷蔵庫&冷凍庫にしまっておく。

俺が行ったり来たりしてる間にみんなはゲーセンではしやぎにはしやいだらしく、家
に戻って確認した時には既に解散になっていた（響ちゃんもマイクの電源落としてた）

「……ま。今日一日色々いいの聴けたから良しとするかね」

「何が聴けたの？」

「ん？ああ、クリスちゃん中心にリディアン組の今日一日の行動。買い物したり飯食っ
たりさ」

「へえ。その大きな機械で聞き取ってたんだ」

「ああ。中々音質も悪く、な……い……い……」

「へーそうなんだ。……でもさあ」

「それって盗聴だよね？」

「……セレナさん、いつから？」

「ほんのちよつと前」

「……来るなら連絡」

「したよ？メールで」

「……来てましたね。気付かんかった」

「ヒロ」

「はい」

「正座」

「いや、ちやうねん。これはほら」

「正座」

「や、だからネ」

「正座」

「………はい」

セレナはマリアアさん以上に怒ることは少ない

だからこそ、下手したらS・O・N・G・で一番怒らせたらいけない奴だつてことを、何故に俺は忘れていたのか

結局かなり遅い時間になるまで説教され、足の感覚戻らないままきりしらから渡され

たお土産持つてセレナを家まで送ることになった

後日

「テメエこないだのあたしらの行動盗み聞きしてたとはどういうことだア!!」

「セレナア！ テメ言うなつつつたるオツ!!」

「いや私じゃないよ!？」

「ごめんなさいヒロさあん!」

「響ちゃあん!？」

「お縄に頂戴されやがれゴルアツ!!」

「ごめんなさい!!」

抜剣イチイバルに追いかけて回されることになった

盗撮盗聴、ダメ絶対



……こんな、どうしようもないヘンタイみたいなヤローだけど

口の悪いあたしが、色んな奴らと話せるようになったのも、あいつも一役買つてて

「ごめんなさい！本当にごめんなさい！もうしません本当に!!」

「謝つて済む問題じゃねえだろうがよオツ！」

こんなこととしても、お前は明日にはケロツと笑つて忘れてる

お前を——ヒロをどう思つてるか、なんて決まつてる

「絶対許さねえぞ——いくら」友達「でもなあツ!!」

感謝してもらえない……あたしの、たった一人の”男友達”

ザババは神じゃなくて天使だから（確信）

「切ちゃんのわからず屋！」

「何デスカ調の頑固者！」

「金髪バツテン！」

「あざといツインテール！」

「デス娘！」

「なんちやつてクール！」

「えつなにこれは」

「ああヒロ。良かった……」

「おう、セレナ。……いや、何これ」

セレナから「助けてほしい」みたいなメールを受けて自転車飛ばしてやってきた元ファイナーチームの家。鍵は開いてたから入ったところ、これ以上無いくらいの仲良しザババコンビこと切歌ちゃんと調ちゃんと珍しく怒鳴り合っていた。

「いや、それがね」

「あつ、ヒロさんデス！」

「……丁度いいね。ヒロさんにも聞いてもらおうよ切ちゃん」

「上等デス。後で謝つても遅いデスからね調」

「何か穏やかじゃない空気」

剣呑とした雰囲気で見つめあう二人。そこで、ふと気づく。

「……あれ。そういえば二人ともその格好は？」

いつもの服とは一味違う、要するに他所行きの格好だネ

「いつになくおめかししちやつて。なに、まさかデート？」

冗談めかして言ってみたり

「……はい」

「……デス」

「えっ」

頬を染めて若干俯きながら頷く二人。

……えっ、ちよつと待って

「ちよ、ちよちよ、どういうこと、どこのガキ!? いつの間に!」

思わず二人の肩に掴みかかる。お兄ちゃん許しませんよ!?

「デデデデース!?!」

「あ、あの、ヒロさん…!?!」

「チクシヨウ、とりあえず俺に、あとマリアさんがいる時に連れてきて！ 良い奴だろうと悪い奴だろうととりあえず全力で殴るから!!」

ドチクシヨウが俺とマリアさんとセレナあとナスターシャ教授に断りも無くきりしらに迫るとかクソがッ!

母さん直伝の相原流クリティカルコンボ決めても足りねえ所業だぞゴルアツ!!

「えつと、あの……違うんデス。男の人とかじゃなくて」

「はい。デートというか、わたしと切ちゃんでお出かけするから……」

「あ、そうなの。ごめん、早とちりして」

「いえ、大丈夫です」

「デスデス」

「……あれ、でもだったら何でお出かけ前に喧嘩なんて」

そこまで言つて、後ろのセレナから溜め息ひとつ。何やと思つて見ると、きりしらに向けて目配せしてた。

「……いきなりですけどヒロさん。切ちゃんの格好見てどう思いますか?」

「え? いや、もちろん可愛いよ」

「ありがとデス。じゃあ調はどうデスか?」

「そりや言うまでもなくメチャクチャ可愛いケド」

「ありがとうございます。じゃあ……」

『わたしと切ちゃんどっちの方が可愛いデスですか？』

「……………ツ!!」

その時俺に電流走る——!!

「どう見ても調の方が可愛いデス！ フリフリのお洋服なのにお人形さんみたいな雰囲気ゼロなんデスよ!？」

「それを言ったら切ちゃんだって！ 活発な印象の中に女の子らしさもしつかり！ これじゃ絶対街中で声かけられるよ!」

「調の方がもつと可愛いデス!」

「切ちゃんの方がずつと可愛い!」

「調ツ!!」

「切ちゃんツ!!」

「え、待ってこれ喧嘩なの？ ノロケてるようにしか見えないってかこういう理由の喧嘩なら俺止めたくないんだけど」

「ヒロ、そういうところ本当に狂ってるよね……」

「ヒロさんも切ちゃんが可愛いって言ってあげてください！」

「調が一番可愛いって教えてあげるデスよヒロさん！」

「……こういうことで言い合えるって、二人とも本当にお互いのこと大好きなんだネ」

『はい！ 大好きです!!』

「ありがとうございまいっただあツ!？」

「バカなこと言っていないで早く止めてよ！」

思わず頭下げた瞬間、セレナに思いつき叩かれた



「ヒロさん優柔不断すぎると思うんだよ」

「デスデス」

「……でも、ヒロさんの言うことにも一理あるから」

「今日のおでかけで、どっちの方が可愛いかわ黒ハッキリさせてやるデス！」

「まあわたしよりも切ちゃんの方が可愛いのはわかりきってるけどね」

「そう言ってもらえるのも今だけデス。調の可愛さに敵うモノは無いということを思い知るデス」

「むむむむむむ……!」

「尊い……きりしら尊いよお……」

「……まだ言うつもりなら姉さんに報告するからね」

「やめてくださいしんでしまいます」

夜までかかりそうだったきりしらの言い合いを何とか宥めて、今は街に出た二人をセレナと二人で影から見守り中。

監視であつて盗み見とかじゃないよ。二人も知ってるから合法だよ。

「それにしても、『言葉で決着つかないならお出かけの中で決めれば良いじゃん』なんて」
「だって甲乙付けがたくてさー。てかそもそも、選ばなかった方じゃなくて、選んだ方の好感度下がるとかどんなクソゲー?」

「私や姉さんからすれば二人とも同じくらい可愛いんだけどね」

「俺から見てもそうだよ」

「……あ。動くみたい」

「んじや追っかけますか」

「そうだね」

「……あの、腕を組む理由は?」

「……だめ？」

「いや、別に良いんだけど」



「この帽子はどう切ちゃん？」

「くっ……色と良い形と良い、あたしのためにあるかのような帽子のチョイス……やる
デスね調。ところが！」

「!?」

「そんな調にはこれデス！ ちよつとオサレな、けど小柄な調にもジャストフィットな
ハットをえんぷていーデース！」

「くう……!? なんて可愛い物を……流石だね切ちゃん。でもまだ勝負は終わりじゃない
よ」

「望むところデス！」

「これぞ調のための小さなコーディネート！ フリフリによく合うアクセを食らえデス
！」

「このチョイス……わたしのことを誰よりも見てくれてる切ちゃんだからこそ出来るも
！」

の。けどー！」

「デス!?!」

「あえていつそ大胆に！ 激しく、けれどクサクない装飾の自己主張!」

「デースツ!?!」

「カシャー」

「ちよつ、撮らないでよ切ちゃん……!」

「ふっふっふー。えすえぬえす? とかいうのに載せてやるデス。ゆるゆるになった調の顔をみんなに見せてやれば……!」

「わたし達の勝負に無関係な人達を巻き込むなんて!」

「これも全て調を思えばこそデス! 調の可愛さはフィーネも思わず裸足で逃げ……アツ!?! 違うデス違うデス、間違えてこっそり撮ったマリアのだからしない寝顔写真投稿してしまったデエエエスツ!?!」

「それを選ぶあたり、やっぱり調がナンバーワンデス!」

「ああ、可愛いよ切ちゃん。やっぱりわたしよりも切ちゃんの方が可愛い」

「まだまだ!」

「何の!」

「調ー!!」

「切ちゃん!!」

「あれ端から見たらただのケンカツプルじゃん最高かよ」

「それよりも姉さんの寝顔写真がとんでもない勢いで反響出てるんだけど」

「くっ……くふっ、っ……!!」

「……マリア」

「なに、翼? ……奏は何を笑っているのよ」

「いや、その……なんだ。とにかく見てくれ」

「? ……なっ、何なのよこれはッ!？」

「も、ダメ。……あははははははッ!!」

「貴女は笑いすぎよ奏!! ああもう、いったい誰がこんな……って、切歌じゃない!!」

「……今度フォロー入れとくか」

「そうだね……」



「はあ……はあ……いい、いい加減に認めてよ切ちゃん……」

「し、調こそ……!」

もう夕方。

二人の自分より相手の可愛さの競い合いはまだ決着ついてなかった。

「ヒロ。そろそろ止めた方が……」

「だなあ。あれはあれでウマいけど、それで二人の仲悪くなるのは望むところじゃないし」

「じゃあ……あつ!」

「?」

声を上げたセレナに釣られて切歌ちゃんと調ちゃんの方を見る

やはりというか何と言うか、見るからにガラの悪い連中に取り囲まれていた。

「……お決まりのパターンだよクソが。セレナ、ちよつと待つとけ」

「えっ。……まさか喧嘩するつもり?」

「手っ取り早いからな」

「だつ、ダメだよ! 昔それで警察に捕まったことあるつて響が……!」

「やりすぎないようにするし、お前らがきつちり証言してくれば一晩留置所泊まりで済む可能性ワンチャン」

「でも！」

「……行こ、切ちゃん」

「デス」

「まあ待ちなつてー。もう遅いし送るよー？」

「っ……離して」

「調に触るなデスこの！」

「はいはい良いから良いからー」

「うっ、く、離すデス！」

「切ちゃん！」

「あ、もう無理行くわ俺」

「ヒロツ！」

二人が無理矢理掴まれたのに堪忍袋の尾が切れる。そのままセレナの制止を振り切つて――

「っ……調ッ！」

「うん！」

その時、二人が一瞬にして拘束から脱出、そのまま俺に向かって手を繋ぎながら駆けてきた。

「ヒロさんには、もう一人で無茶なことなんてさせないデス！」

「自分のことは自分で守ります！」

「……オツケイ！ よくビビらなかつた！」

二人が俺の後ろに回ったのを見届けて、同時にセレナも後ろに立つ。

「大丈夫デスカ、調？」

「わたしは平気。切ちゃんは？」

「へーきへつちやらデス！」

「ハイへーイチンピラ共。うちの妹分に何か用事？」

「あ、あ？」

睨み利かせて凄んでくるけど、ぶつちやけ怒ってるセレナの方がよっぽど怖い。そのまま人数ついでに顔を見ていくと、一際目立つ、頭にデカイ傷痕付いてる奴に目が留まる。

「……………あゝ」

「お？ お前確か…………」

「ヒロ、知り合い？」

「知り合いってか…ねえ？」

「パイセン？ どうかしたんすかパイセン!？」

「俺はともかくお前さんは忘れるわけないよネー…………そのデツカい傷、俺が付けたんだもんネー！」

よくよく見て思い出したのは、響ちゃんを詰つてた奴らの一人、要するに俺が昔病院送りにしてやった奴だった。

「にしても、まだこんなことやってたのネ」

「ぐっ、ぐぎぎ…………」

「ん、なに。またやる？ 今度は病院送りじゃ済まないかもだけど」

「な、何をビビってんですか！ やっちまいましようよパイセン！」

「ああ、ちなみに前回の時はお前らの倍以上の人数いたからね。フカシじゃないよ」

「…………」

「ば、パイセン…………」

尻込みして足踏みしてるチンピラーズ。…………あと一押し

「……あの時は言う必要無かったから今言うけどさ、俺って実はお前らみたいなのが心底嫌いな。何でかわかる？」

「……」

「……にひっ」

ニヤリと笑って歯を見せる。目の前のこいつがビビりまくってるのはわかりきってるわけで。

だから

「——テメエらみてえなのに付き合ってた人寝取られたからだよとつと失せろ殺すぞっ!!!」

「ヒイヒイイツ!!」

「ああつ、パイセン!? パイセーン!!」

頭が逃げれば後は早い。情けない悲鳴を上げてトングラこいた奴に続いてチンピラーズも一目散に駆け出していった。

残ったのは、もう俺達だけ。

「……ヒロさんが怒ってるの」

「初めて見たデス……」

「……」

「……はい終わり。やー危なかつたネ！」

振り返ってみんなに。まあきりしらはちよつと怖がつてる風だつたケド

「あの……ありがとうございました、ヒロさん」

「正直、あいつらちよつと怖かつたデス……」

「一時はどうなるかと思つた……」

「はっはっはっ。……んで、切歌ちゃんに調ちゃん」

「は、はいっ」

「デスっ」

「どつちのが可愛いかは決まらなかつたみたいネ」

「……はい」

「デス……」

しゅんとして俯く二人。そんな二人の肩を叩いて続ける。

「まあ二人はお互いのこと大好きだし、相手を尊重したいのもわかるけどさ。……その辺まで氣い遣わなくても良いんじゃない？」

「え……？」

「セレナも言つてたけどさ。マリアさんやセレナや俺、S・O・N・G.のみんなからすれば二人は可愛い末っ子みたいなんだし。……ああ、今はエルフラインがいるか。とにかく、そんな感じなのよ」

「……」

「切歌ちゃんも可愛いし調ちゃんも当然可愛い。でも二人一緒なら更に可愛い。俺は勝手にそう思ってる。セレナは？」

「私も同じ。二人にとつて今日のこととは大事なことなんだろうけど、それでもギスギスするよりはもつと楽しんでもらうところ出してほしいよ」

「……ちなみに、楽しかった？ 二人とも」

俺の言葉に顔を見合わせる二人。少し間が空いて、次に二人が見せたのは——とびきりの笑顔

『——とつても楽しかったです！』

「ならよしー！」

「……じゃ、あとやることは一つだね」

「だな」

「？」

「デス？」

「（「）めんなさいは？」」

「あつ……」

「デス……」

「二人とも意地張って、酷くないとはいえ口喧嘩までしたんだから」

「出来るよネ、切歌ちゃん、調ちゃん？」

「二人を向き合わせて、それを待つ」

「……色々言っちゃった。ごめんなさい、切ちゃん」

「あたしもたくさん悪口言っちゃったデス。ごめんなさい、調」

「ペこり、と示し合わせたようなタイミングで頭を下げた二人。そんなとこまで仲良しな光景に顔緩む。

「……じゃ！ 仲直りも済んだところでお開きにしますか！」

「はいっ」

「うーん！ 安心したらお腹空いてきちゃったデス！」

「ふふっ……じゃあ早く帰ろう」

切歌ちゃんと調ちゃんを先頭に、俺とセレナが続いて夕暮れ道を歩き出す。

前を歩く二人は手を繋いで、明るい笑顔を浮かべながら言葉を交わす。こんな姿を見て百合だなんだと騒ぐほど道徳捨ててないから不俺。

「日本ではこういうこと何て言ったっけ？」

「えーと確か……雨降って地固まる」

「……固まってるね」

「ああ」

「……あ、そうだヒロ」

「ん？」

名前を呼ばれてセレナを見る。何か妙に目が据わってた

「さっきの人達に言ってたことなんだけど」

「……はい」

「付き合ってた人がいたって本当？」

「」

「ねえ」

「……さあダツシユで帰ろう！ 最速で最短でまっすぐに一直線に！ きりしらコンビ俺に続けイッ!!」

「はい！」

「デス！」

「ちよつ、ヒロ!!」

「ごめんセレナ俺にも永遠に秘密にしときたいことあるんだよね！」

やべえ勢いで前世でのこと口走っちゃまった！

死にたい!!

※おまけ【とあるグループトーク】

『ヒロ、昔彼女がいたらしいです』

『えつ』 『えつ』 『えつ』 『えつ』
『えつ』 『えつ』 『えつ』 『えつ』

始まりのセレナーデ

セレナ・カデンツァ・ヴナ・イヴ

デビュー後、僅か数ヶ月で全米チャートを席卷した世界の歌姫、マリア・カデンツァ・ヴナ・イヴの実妹

姉譲りの美貌と整ったスタイル、美しくも可憐な声を持ち、他人を思いやれる優しさと芯の通った強さも持ち合わせる才女

今は日本に移住し、家族や巡り逢った友人達と共にささやかながら幸福に満ち、充実した日々を過ごしている

そんな彼女は今――

「スヤア」

「寝てるし……」

朝もいづらか過ぎた時間、普通の安アパートの一室の住人を訪ねるも、当の家主は見事に寝落ちていた

「はあ……ヒロ、ヒロ。もう10時だよー」

住人——相原ヒロの住む部屋には度々足を運んでいるセレナ。ヒロの交友関係には女性が多いが、さらつとこの部屋の合鍵を持つてるのは、その中の女性陣ではセレナ一人だけだったりする。

このアパートの大家の女性を初め、他の部屋の住人達からこつそりと「通い妻」呼ばわりされていることを彼女が知らないのは果たして幸か不幸か。

当のヒロが聞いたら普通には否定することは間違いないが

「まったく、『日本じゃ20歳未満はお酒飲めないし』なんて言つてたクセに、一人の時は堂々と飲むんだから」

部屋のあちこちに無造作に置かれた空き缶の山を見て嘆息するセレナ。本人曰く「目に付くところじゃ飲まないだけで飲めないとは一言も言つてない。青少年特有のバステだね！」とのこと

だが、それでもここまでの数の酒を空けることなど滅多にない、というよりも自主的に飲むこと自体、ヒロはあまりしないのは知っている。

例外があるとすれば——自棄酒、くらいだ

「……」

未だに寝息を立てているヒロの顔を覗き込む

眉間にシワが寄り、どことなくうなされていようにも見えた

「…永遠に秘密にしておきたいこと、か」

付き合ってた人がいた。だが寝取られた、とも言っていた

他人のプライバシーを詮索するつもりは無いが、それでも気になってしまう。目の前で眠るこの人が好きになった女性が、どんな人だったのか

「ヒロ……」

——相原ヒロは、セレナ・カデンツァ・イヴの王子様

かつて抱いた感情は、今もセレナの胸の内を甘く焦がす

救ってくれた、守ってくれた、自分の在り方を受け入れてくれた、姉や妹分達にも優しくしてくれた

恋、愛、憧れ

この感情をどう表現するべきか、明確な答えをセレナは持たない

それでもただ一つ言えることは——どうしようもないほどに、彼女は彼に焦がれている、ということである

「……………」

その寝顔を眺める内、珍しいことにこんなに早い時間から睡魔が襲ってきた

それにあえて抗うことなく、身体を横にすれば、目の前にはヒロの顔

「……(うー)と(うー)とするから、奏に『あざとい』とか言われるんだろうなあ、私」

自分の浅ましさを自嘲しながら、眠気のままに瞳を閉じる

——そして、始まりの夢を見た



ネフィリムという完全聖遺物がある。

「聖遺物を喰らう」という特性を持つ、米国の組織、F・I・Sの切り札とされていた代物。

シンフォギア装者の力に依らず、完全聖遺物を人の手で扱おうと試みる者達の行動もあつた。

だが、資格無き者に与えられるほど、力も世界も甘くはなかつた結果、ネフィリムは暴走。

周囲を巻き込み、破壊し、灼き尽くしてなお、巨躯の怪物は止まらない。多くが逃げ惑い、絶望する中であつても、それでも、立ち上がる者がいた

「——姉さん。私、歌うよ」

セレナ・カデンツアヴナ・イヴ

戦神の銀腕を纏った姿、背後で倒れる姉と母代わりの女性に告げる

「セレナ……!」

」

歌う

その声が奏で、紡ぐのは装者の『絶唱』

「力のベクトルの操作」という、争いを好まないセレナの心そのものを現したかのような力は、瞬く間に白い異形を呑み込み、その形を変えていく

見上げるほどの体軀は、小さな白い蛹のような形へと姿を変えた

同時に、その力の高すぎる代償も、セレナの身体を呑み込んだ

「——ッ!!」

声も出せぬままに、絶唱の反動と、そのまだ年若い身体で受け止めるには大きすぎたネフィリムの力が、セレナの肉体を内側から蝕み、傷つけ、言葉に出来ない激痛となつてその心をも抉る

意識を保てず、膝から崩れ落ちるセレナ

後ろから見届けることしか出来ない少女の姉を嘲笑うかのように、倒れ伏したセレナに、消えぬ炎と、崩れた瓦礫が同時に襲いかかる

「——セレナアッ!!!」

マリアさんの慟哭が響く

目の前の光景に、時間が遅くなつたかのような錯覚を覚えるマリアさんは動くことも出来ず、ただ居もしない神に祈るしかなかつた

——お願い、セレナを奪わないで！

——こんなに優しい子を、私のたつた一人の肉親を！

——お願い、誰か、誰か！

——セレナを助けてツ！！

世界は残酷で、人の願いや祈りを容易く踏みにじる

たつた一人の妹を想う姉の懇願もまた、例外ではなかつた

勢いを増す炎

降り注ぐ無機物の残骸

その全てが、セレナへと襲いかかり、小さな身体をその中へと呑み込んだ

「——あ、ああああ!!！」

涙が溢れる。まともに前も見えない

こうして、嘆くことしか出来ないような自分が、憎くて哀れで情けなくてたまらない

なぜ、なぜ、なぜ

「セレナ……せれなあ……ッ!!」

「カデンツァヴナ姉妹愛を邪魔すんなやエヌマエリシユウウウウウ!!!」
真面目にやると言ったな、あれは嘘だツ!!

「えっ」

そんな結末カストディアンが許しても俺は許さない!!

「あ、あなた、は……」

「名乗るほどのものでもありませんコフツ！」

「吐血!? ちよ、顔色すごいことに」

「大丈夫です！ 気を抜けばすぐに死にそうですけど大丈夫です！ あと妹さんも無事です！」

セレナに瓦礫が落ちる直前に割り込みが間に合って、何とか鎖で防御完了、積もりに積もったものは一気にエヌマった。おかげで比喩とかじゃなく死にそう！ 乖離剣のバックファイアしゅごい！

原作におけるセレナの死因は絶唱の反動で動けなくなったところに火災の炎と瓦礫が行ったから

じゃあ少なくともそれを防ぎさえすれば生存確率は跳ね上がる、QED証明完了！
「あ、瓦礫ジャマですよネ！」

意識がある内に鎖を振るってマリアさんとナスターシャ教授の上の瓦礫もぶち壊す
教授に声をかけるマリアさんを横目に、意識の無いセレナを何とか背負って、落ちないようにまたまた鎖を使って身体に固定。

「そっちの人、背負って走れます？」

「……な、なんとか。それよりもあなた」

「じゃあ時間も無いんで行きましょ！ マジに俺の意識も朦朧としてるんで！」

目えぼやけてるし耳も遠いし頭クラクラしてるあはははは、やべえキャットみたい
な笑いしか出ないあはははははははははは!!

「Go Die Go!!」

「Dieはダメでしょ!?!」

この後辛くも脱出した後、マジで死ぬようにぶつ倒れました



薄ぼんやりとした意識の中で、声をかける人がいた

『おう、ここで死ぬとか認めねーぞ俺は』

顔は見えない、というよりも目があまり見えていない

『あんたには生きてもらわないとネ。まだまだ見たい光景とかあるんだよ、俺にも』

黄金に輝く鎖と、剣のような何かを持った、私と近い年くらいの男の子

『……100歩譲って、俺が許したとしよう』

ああ……なんて

『だが、こいつが許すかなッ!!』
まるで——物語の王子様みたい



「あーつたまいでえー……」

いかん、前世での最悪なこと思い出したからって流石に自棄酒するんじゃないかなかった
……頭ガンガンいつてる

「……まだ夢に見る辺り相当ひきずってるなあ俺」

あれから数えて20年以上は経ってるはずなのに、それでもまだ夢に出てきやがる。
早いとこ忘れてえのになあ

「はあーあ……んん？」

横を見る

見知った顔がいた

ていうかセレナだった

「……あー、そーいや合鍵持ってたっけ」

フロンティア事変終わって少しした辺り？ だった

責任者の司令とニンジャな緒川Ⅱサンに渡した時、予備の一つをどうするか、みたいな話になった

『欲しい人ー』

c.v. 赤羽根の無駄遣い
『藤 堯 オルアツ!!』

勢い良く上がった手が3つ

おずおずと上がった手が1つ

思い出したかのように上がった手が1つ

そこから司令の音頭で公平にじゃんけんになった

『最！初は!!』

『『グー!! ジャンツケンツツツ!!』』

結果

握った手を高々と掲げるセレナ

心底悔しそうに頭を抱える奏さん

膝から崩れ落ちたマリアさん

普通にしょんぼりしてる響ちゃん

(自称)カッコいいチョコキを突き出した姿勢のまま絶唱顔(流血無し差分)キメてた翼さん

実にカオスな空間を作り出して、セレナが俺の部屋の合鍵を勝ち取っていた

……てか、今更ながらこの五人から選べとか言われてもセレナしか選択肢無かったんです
ですがそれは

ツヴァイウィングとマリアさんは世間体的な問題あるし、響ちゃんも学生だから男の家に入り浸るのも風紀的にアウトだし。あと未来さんいるし

「……んにゅ」

そんなことを思い返す俺の目の前で、セレナの口から寝息が漏れる。……やっぱこいつも美人だよなあ改めて見ると

「……」

片手の指をセレナの半開きになった唇に押し当ててる。

うーわ、ぷるぷるしてる。弾力すごっ

「……この顔で絶唱顔キメてたらそりゃ衝撃走るわ」

言いながら唇に押し当てたままの指を押し込んだり擦ってみたり

「ん、にゃ……みゅ、う」

むず痒そうにしてはいるけど、起きる気配は無い。

……ふむ、トドメいってみるか

顎の下に手を添える。親指だけは唇から離さずに

「んう、う…………ふぁ…………ひ、ろお…………？」

タイミングが良いのか悪いのか、うつすらとセレナの瞼が持ち上がった。けど、ここでやめるつもりは無い

「ていつ」

「んきゅっ!？」

顎下に添えてた手を思いっきりカチ上げる。カツンツ、という歯と歯のぶつかる小気味の良い音を立てて、セレナの口が閉じられた

「クハハハハッ！　ざまぁ」

「いったぁ…………！」

恨めしげな視線を送ってくるけど無視。そもそも勝手に入ってきた挙句、隣で眠りこける方が悪い

「おはようさん」

「…………おはよう。今、何時？」

「そーネだいたいネ」

「そういうのいいから」

「アツハイ……うーわ、十時半。だいぶ寝たなあ俺」

「……私は30分くらい、か」

身体を起こしてぐしぐしと目を擦る。それだけで眠気が覚める辺り、流石だなとは思う。

「んで？」

「え？」

「わざわざ鍵開けてまで入ってきたってことは何か用あったんだろ？」

「ああ、うん。司令が、話があるから連絡したんだけど、携帯繋がらないから私に見てきてくれたって」

「司令が？ ……あー、この時間じゃ普通に寝落ちしてたなあ」

携帯の着信履歴に司令からの不在着信の文字。

やべえまですつた……

「……オツケ、わかった」

すぐに電話帳から司令の番号に。これお説教待ったなしやなあ……



「電話じゃ何も言われなかったのが逆に怖い」

いつもの場所に停泊してたS・O・N・G潜水艦にセレナと二人で乗る。司令の電
話では連絡ついたことの安堵の言葉と、すぐに来てくれ、とだけ言われて終わった。

「……お説教？」

「言つとくけどお前にも何かしらあるからな。呼びに来といて結局寝てたんだから」

「わかってるよ。……ねえ、ヒロ」

「んー？」

くつ、と手を軽く握られる感覚。隣を歩くセレナを見れば、何か言いたげな眼で俺を
見てた。

「……期待してるようなことは答えるつもりねえぞ」

「……うん、いいよ。話さないままで。ただ……ちよつと、改めて決めたことが出来ただ
けだから」

「さいで。……そろそろ離せよ。もうすぐ司令室」

「ん……」

名残惜しそうに離れた手。こつそりため息一つして、扉を開く

「お疲れ様でー」

「確保オツ!!」

「すういッ!」

入った瞬間手首を掴まれ、引つ張られて振り回される勢いそのままに、壁に叩き付けられる。

「いって(ダアンツ)ヒエッ!」

壁を背にしたと思っただけで髪入れずに俺の両サイドに人の腕が押し付けられた。

壁ドン!? 俺がされる側!?

「……か、奏さん、に、マリアさん……」

俺の右側に伸びる腕は奏さんの、左側の腕はマリアさんのもの

その二人の後ろにはやや曇りがちの顔した響ちゃんどことなくおろおろしてる翼さんの姿が

「あの一、皆さん? これはいったい……」

「いきなりこんなことして悪いな、ヒロ」

「けど、どうしても貴方から直接聞いておきたいことがあるの。こうでもしないと逃げられそうだし」

「……何のことか察しはつくんで、その前に一つ訊ねたいんですが、よろしいですか?」

「どうぞ」

「後ろの翼さんと響ちゃんも興味ある感じ？」

二人を見る。奏さんとマリアさんも肩越しに見る。

その隙に入口にいるセレナを見る。

(テメエ話しやがったな)

(私だけ知ってるんじゃないや不公平なもの。だから私は謝らない)

(この……！)

以上、アイコンタクト会話

「……すまない、相原」

「ごめんなさいヒロさん。で、でも、気になっちゃって……私……」

「ああ、真っ赤にならないで、そういう反応一番困る」

顔どころか首まで赤くしそうな勢いの二人だった

「……はぁーあ」

ただ、百合が見たかっただけのはずなのに

ほんとに、どうしてこうなった

色々と変わっちゃまった世界で

セレナを助けたことに始まり、俺という異物の介入で色々と変わったことも多かった
『返してもらおうぞ、フィーネ。あんたが奪った、櫻井了子の存在を』

『……俺が思うにさ、バラルの呪詛つてのは罰とかじゃなくて試練じゃないかと思うのよ。統一言語に頼るな、みたいなの。まあ仮にそうだったとしても、今でも人類は乗り越えられてないんだけどネ』

『つまりはだ、フィーネ。——あんたのやろうとしてることは見当違いな可能性もゼロじゃあない』

『何が言いたいかつて？ 簡単さ。そんな投げっぱなしな創造主様のことなんざ——俺が忘れさせてやる』

『無事ですなマスターシヤ教授!? よっしやラツキイ——ツ!!!』

『ドクターウエル。ある男が言つてたありがたい教訓を教えてやる』

『英雄つてのはさ——なろうとした瞬間に失格なのよ。おたく、出だしからアウトつてわけ』

『過去は無かったことにはならないし、変えるなんて以ての外！ それやるには、お前が殺すつった『奇跡』に頼る以外に無え!!』

『けどな……響ちゃんじゃねえが、俺もお前を、お前とエルフナインを!!』

『奇跡は起こるものじゃない——人が起こすもんだ！ だからキャロル、そしてエルフナイン!!』

『お前達の運命は——俺が変えるツ!!』

結果……まあ、色々、変わつちまった世界になった。



「ヒロ君と連絡が取れなくなった」

S. O. N. G 拠点。代表である風鳴弦十郎からの召集を受けて集まった装者達に告げられた言葉に、一同の間に衝撃が走る。

「ど、どういふことなんですか師匠!？」

「またいつもみたいに寝てるとかじゃねーのか?」

慌てる響と対照的に落ち着いた様子のクリス。その言葉を受けて、弦十郎の隣に立つ

ていたセレナが一つの携帯を手の前に出る。

「……私もそう思つて、部屋に行つてみたの。そうしたら、部屋の鍵が開けっ放しで、中には、これだけが」

「それ、連絡がつかないどころか浚われたかもしれないってことか!」

セレナの言葉に奏が食つて掛かる。緊張が色濃くなる中、翼とマリアが口を開いた。

「……やはり、相原の扱う聖遺物が?」

「その線が濃厚かもしれないわね。完全聖遺物の起動なら誰でも可能だけれど、あの二つに關してだけはヒロにしかまともに扱えないもの。……それにしても、いったい誰が」

「ヒロ君はS・O・N・G預りになつてはいるが、自分だけの完全聖遺物を、それも二つ持つということでは非常に危うい立場でもある。狙う輩は枚挙に遑が無い」

「これまでも、F・I・S・とキャロルに狙われてたデスし……」

「確か、フィーネにも目を付けられてたつて」

「ああ。……君の意見も聞いておきたい」

そこまで言つて、後ろに立つ女性に視線を向ける弦十郎。

「——了子君」

頭頂部に巻き上げた栗色の髪に眼鏡をかけた一人の女性、櫻井了子。

かつてファイネの器とされていた女性は、眼鏡を押し上げながらどこかジトつとした眼で弦十郎を見る。

「……ファイネの名前が出たこの流れで私に振るってどうなのかしら、弦十郎君？」

「むっ。……ああ、すまん。そんなつもりは無かったのだが……」

「フフツ、冗談よ。……そうね、ネフシユタンの鎧やネフィリムという風に、本来なら完全聖遺物は国が保管するべきレベルの重要物。個人が持っていていいものじゃあない、というのが聖遺物に関わる国家の共通認識だもの。彼自身、それに関しては理解してゐるはずよ」

「まあ、それはそうだな」

「それをわかつていながら、存在が明るみに出てなお手放す気の無い、装者でもない身体的には一般人。……まあ、欲しい人はそれこそ掃いて捨てるほどよ。私にファイネの記憶が残っていたなら何か心当たりがあつたかもだけど、正直思い当たらないわ」

「そうか……ありがとう、了子君」

「それよりも」

「？」

顎に手を当て、どこか深刻な面持ちになる了子に視線が集まる。

「……この話、今この場にいる顔触れだけに留めるのよね？」

「どういうことだ？」

「いやほら、S・O・N・Gにいるじゃない一人。彼に関わると途端に情緒不安定になる子が。ヒロくんが浚われた、ってなるとあの子……」

『『……あつ』』

全員が何かに思い至った瞬間、背後からバサバサツ、と紙の束が落ちる音がした。

「……ひ、ヒロさん、が……？」

「え、エルフナインちゃん……」

小柄な体軀、くすんだ金髪の白衣に身を包んだ人物——エルフナインが瞳に涙を浮かべて立ち尽くしていた。

「ヒロさん……ひろさんがさらわれたって……!?!」

「落ちていてエルフナイン！ 大丈夫よ、まだそうと決まったわけじゃないから！」

「でも、でもお……!」

「ヒロさんがそう簡単に捕まるわけないって、エルフナインもわかってるはずデス！ 大丈夫デス！」

カタカタと身体を震わせるエルフナインをマリアを初めとした全員が何とか宥めようとする。それを見ていた弦十郎と了子は二人して頭を抱えていた。

「……なるほど、ここのところか」

「もう少し気を配る必要があるわね」

「ああ……善処しよう」

「……チツ。奴らめ、面倒なことを」

その様子を陰から見ていたエルフナインに瓜二つの少女——錬金術師、キャロル・マールス・デインハイムは憎々しげに誰かに向けて呟いた。



カラカラカラ…

『ん何だお前?! (困惑) チツ! (謎の舌打ち)』

『しばらくホツとしたワケダ!! (指摘)』

『コラドケコラ!』

『三人に勝てるわけないでしょ!?!』

『馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前!! (天下無双)』

夜遅い時間、急に部屋に乗り込んできた三人組にされるがままに誘拐された。

ちなみに今のはあくまでイメージであり、俺自身の貞操は清いままである。やったぜ。

「……………なんだかなあ」

暑さ厳しい日差しの下、口にくわえた少し溶けてきてるアイスから水滴が落ちて地面に黒い染みを作る。

右を見れば炎天下でもスーツのままのキリツとした印象の女性、サンジェルマンさんが曖昧な表情のまま沈黙してる。

左を見れば水着着た褐色肌^だの爆乳美女^男、カリオストロが同じく水着姿^だの眼鏡^男ロリ^だ、プレラーティに絡んでいる。

正面を見れば、どことなく機械的な身体の女の子、ティキとはしやぐ全裸のおっさん、アダムという児^男が案件。

早い話が、パヴァリアア光明結社に拉致られていた。

「……………サンジェルマンさん」

「……………」

「まさかこれ見せるためだけに人の寝込み襲ったんです？」

「そんなわけが無いでしょう……………」

ああもうどうしてこうなった……!? と頭を抱えるサンジェルマンさん。うーん前世で原作見てる時から思ってたけど、この人やっぱり苦労人気質のイジられキャラだな。でもって受け担当と見た。

「あーら、ちよつとサンジェルマン？ いつまでもそんな暑苦しい格好してないで。ほらほら、ちゃんと水着用意してあるから」

「私には不要よ。それよりも、何のために監視を掻い潜ってこの男の身柄を抑えたと……！」

「真面目なのは良いところだが息抜きも必要なワケダ」

「やつ、やめなさい！ 脱がすな！」

「剥くわよプレラーティ！」

「既に始めてるワケダ」

「せめて俺の目に付かないところでやれありがとうございます!!」

脱がす美女&美少女と堅苦しいスーツを脱がされて顔を赤くする美女という構図にメチャクチャ高まりました。



思い至ったのは、現在の時間軸。

本来ティキの覚醒とアダムのサンジェルマンさん達との合流は、9月の頭辺り、なのに今はまだ8月末。

これに関しては、恐らく俺がちよつとしたことをしてしまっただからだろう。

いやだつてほら、バルベルデだよ？

『バルベルデ政府？　じゃあちよつとツテ……まあ母さん経由なんですケド、どうにかなりそうなんで任せてもらえます？』

そう言つて、母さんと知り合いの米軍関係者に取り次いでもらつて、色々してもらつた。

以下、司令とその関係者の会話の一部

『……では、手筈通りに我々が先行し現地軍の可能な限りの無力化を行う。そちらは機を見て、そちらのお姫様達を送り出してくれ』

『どうしてそれがわかる？』

『島がドンパチ、賑やかになつたらだ』

どう見てもコ○ンドーです、本当にありがとうございます

そんなこんなで、原作よりも早い段階でバルベルデの騒動は鎮圧、事後処理も滞りなく進んだ結果、パヴァリア組はこれといった苦勞も無くティキ像を回収して、今に至る

ワケだ

……でもこれクリスちゃんの強化&トラウマ克服フラグ折れちゃった気がするんだよネ……



「ヒロさん……」

ぐしゅぐしゅと鼻を吸いながらも作業に没頭するエルフナイン。S・O・N・Gメンバー達と同じか、それ以上の恩人が何者かに誘拐された可能性があるとして、かなり不安になっていた。

「……いつまでもオレの顔でメソメソするな、鬱陶しい」

「キャラル……」

部屋の入口を開けて入ってきた自分の創造主に顔を向ける。いつも通りの顔のままエルフナインを睨み付けていた。

「あのしぶといという言葉がそのままヒトの形になったかのような男が只で転ぶか。考えるだけ無駄にしかならん、頭を働かせるなら目の前に割け」

「……心配してくれてるんですね」

「……バカを言え」

「それに、ヒロさんのことも信じてるんだね」

「バカを言えエツ!!」



「単刀直入に言おう、相原ヒロ君。我々パヴァリア光明結社は、君が欲しい」

「お前ホモかよ」

考えても見て欲しい。全裸のおっさんと二人きりにされたと思っただらそいつに「欲しい」と言われた時の気持ち。冗談のつもりだったけどその視線に思わず尻に力入る。

「ハツハツ、この状況でそのようなことを言える辺り、生身でフィーネを初めとした脅威を乗り越えてきただけはあるね」

「どーも。ていうか服着ろ」

「……君が保有する二つの完全聖遺物。神代すら容易く拘束する黄金の鎖、世界を引き裂く黄金の剣。僕としては、看過できないものだ」

「無視かよ」

「つーか神代すらじゃなくてまともに拘束出来るのが神性特効乗る対象だけなんだけ

どネ。司令相手だと縛った瞬間振りほどかれるし。マジ全部あの一人一人でいいんじゃないかな。

あとエアは正確には剣じゃないし。

「酒もらうぞー」

「ああ、構わないよ」

適当にワインセラーを開けて中を物色。うーわ、素人目に見ても上物ってわかるものばっかだ。……一番高そうなの開けたろ

「おたくは？」

「おや。君一人で飲むものと思っていただけ……貰おうかな」

適当なグラス一つに注いでアダムに渡す。俺？ そらラッパよ

「……驚いた。中々に強い酒なのだ」

「酒に関しちや基本ザルなもんで」

言いながらボトルの中を飲み下していく。流石に少しキツイけどこれならまだどうにでもなる。

「……ぶはっ。つか、あんたさ」

「何かな？」

「俺が受けるわけないってわかってて聞いただろ？」

「……ハハハハハッ！ 流石だねえ、そこまでわかっていたか」
「わからないでか」

そもそもマジな話にしてはこいつ終始半笑いだし。

「まあ改めて言わせてもらおうけど……答えはN oだ」

「……そうか、残念だ」

アダムの雰囲気が少し変わる。是が非でも俺を引き込みたいんだろう。

「……外にいる他の三人呼んで叩き伏せてでも、なんて考えてるならナンセンスだぜ。そもそもあれは俺以外には扱えない」

「何事も挑戦から始まるものだよ？」

「だったらその前にここ諸共あんたの大事なティキちゃん潰す。一瞬でもありや充分だ」

「……………」

「そもそも、だ。俺と俺の使うもん無くとも、あんたらならどうにでも出来ることだろうに」

ワインセラーからもう一本取り出して扉まで歩く。止める様子も無い辺り、やっぱりティキを無くすわけにはいかないらしい。

「……なるほど。君の答えはわかった。これ以上はやめておくとしよう、ティキを失っ

てしまうと、我々としても痛手になる」

「ご理解感謝。まあ、高い酒貰ったし、とりあえず脱走だけはやめとくよ」

「そうかい。……ああ、最後に一つ」

「あ？」

変わらない怪しい笑みを浮かべるアダム。聞き返そうと振り向いて

「君が最初に開けたものだがね。あれはここにあるもので一番の——安物だよ」

「」

クツソドや顔しちまったすげえ恥ずい!!



「……局長」

「どうかしたかい、サンジェルマン？」

「ご指示さえ頂ければ、我々三人で彼を縛り続けることも可能だったはず。……何故思
い留められたのです？」

「聞いていただろう？ 彼はやろうと思えば僕達の内、誰か一人は確実に始末出来た。

その中でも、ティキを失うわけにはいかない」

「ですが……」

「それに、だ。彼自身が言っていた通り、本当なら彼の持つ聖遺物など無くとも僕達の理想は完遂出来る。なら、焦る必要はどこにもない」

「……では、何故彼を？」

「……感じたんだよ。彼からは」

「感じた？」

「『この世ならざるもの』、とでも言えばいいのかな？ とにかく彼から感じたものはあまりに異質だ。『相原ヒロ』という存在そのものが、異物と思えるくらいにね」

「それは、どういう……」

「そこまでは僕でもわからないさ。……彼は自覚しているのかな？ 自分という存在がどれほど狂っているのか……」



夜である。とっぷりしてる

「……タダ飯食えたと考えればやつすいもんだけど、寝れるかなあこんな豪勢なところで」

昼に続いて夕飯でも出された酒の回った頭のまま、何故か用意されていた部屋に向かう。思ってた以上のもてなしに何かあるやろなあ、という気持ちが抑えられない。

「……つと、ここだな」

ドアを開ける

「あらっ、おかえりなさいい」

何かいた

そっ閉じする

「……バスローブの褐色美女なんていなかった。よし」

ドアを開ける

腕を掴まれる。部屋に引きずり込まれた。

「ファッ!？」

「つつかまーえた♪」

腕を掴まれたまま引つ張り回され、ついにはベッドに放り投げられる。ドアを見ればいつからいたのかプレラーティがしっかりと鍵をかけていた。ガツデム!

「なんだ!?! 生憎だが俺は童貞だぞ!」

「いや、誰も聞いてないんだけど」

「そもそもお前が童貞かどうかなんて見ればわかるワケダ」

「チクシヨウ事実だけに何も言えない」

仰向けに倒れた俺を見下ろすカリオストロとプレラーティ。一貫してクールなプレラーティと対照的に、玩具でも見つけたようなカリオストロに舐め回すように全身見られた。

「……ねーえ、ヒロくん」

「ハニトラ狙いなら間に合ってるぞ」

「違うわよお。……なんで、アダムの誘いを蹴ったの？」

「は？」

「あの状況、どう考えてもお前に利は無かった。むしろ死なない程度に殺される可能性もあつたワケダ」

「あの場で退かなかつたのは素直に素敵だケド……ねえ、どうして？」

「……あー。」

そうか、この二人の意図としてはパヴァリアに協力しなかつた、つてよりも何でアダム相手に折れなかつたのか、つて意味合いか

「……んー、まあ俺もうS・O・N・Gだし。そもそも全裸のおっさんに協力したいと思わんし」

「それにしても強気がすぎたワケダ」

「それなのよねえ。……貴方、何か知ってるんじゃないやなくて？」

「何かって何よ」

「それがわからないから聞いてるんじゃない」

聞かれてもなあ……まさか前世で色々見えました、なんて言えるわけもないし

「んー……直感？ Eランクくらいなの」

「……………」

「つべー選択肢ミスったつぽい」

「なるほど。答えるつもりは無いワケダ」

「しよーがない。じゃ、カラダに聞くしかないわね」

「チクシヨウ見た目通りの色ボケかオツさんのクセに！」

「は？（威圧）」

「ヒエツ」

「またミスった！ 今日の俺どうした!？」

「クソア離しやがれ！ 俺にひどいことするつもりだろうエロ同人みたいに！ エロ同

人みたいに!!」

「何を言ってるのかわからないケド、とりあえずは結社やアダムじゃなく、サンジエルマンにだけでも協力してもらおうよ！」

「是非もないワケだ」

「やめろオ！ 絡むならサンジェルマンさんとだけ絡んで！ 俺はまだ清いままではないんだ！」

迫ってくる二人に全力で抵抗してみせる

元男の錬金術師になんかに、絶対負けない！！

……つてフラグだこれ！ タスケテ！！



夜が明けた。

あの後？ サンジェルマンさんの華麗なインターセプトで事なきを得たよ

「……良い朝」

見送りは誰もいない。代わりに手配されたらしいママチャリ一台。まあ下手に目立つものを用意したら足つくからってのはわかるけど何故そこでママチャリ

俺の記憶が正常な辺り、隠蔽工作とか特にしてない、つてことはここからはもう撤収した、つまりは俺からS・O・N・Gにパヴァリア組の居場所が伝わることは無い。こ

の辺も流石だネ

「……はあ、帰った後が怖い」

とりあえずママチャリ漕いで帰路に着く

……あ、電動アシスト付いてんじゃんこれ

「ただいまー」

「ひるろざん ツツツ!!!」

「よっしゃ来いエルフナイン!!」

みんなが驚く中、即座に駆け込んだきた金髪ロリを抱き上げる。子供つてのは守つてやらなきゃってゴールデンも言つてた!

「よがっだ……無事でよがっだですう」

「あーあー泣くな泣くな」

「ヒロ君! 無事で何よりだ!」

「どーも、司令。ご迷惑おかけしました」

ぐずるエルフナインを下ろすと、みんな一斉に駆け寄ってきた。みんな一様に俺を心

配してくれてたらしく、その顔はどれも安堵に満ちていた。

「あー、ごめん。心配かけた」

「ほんとだよ、まったく……」

「何事も無いようですよかったですわ……」

「でも、いったい丸1日もどこに……ん？」

みんな思い思いに安心した様子の中、ふとセレナが何かに気付いたみたいに関首をかしげる

「? セレナ？」

「」

「真顔!？」

「……キスマーク、どこの女が」

ボソツと呟かれた言葉、周りのみんなには聞こえてないみたいだけど俺の鼓膜はバツチリ聞いていた

同時に、聞き覚えのある着信音、ていうか俺の携帯のじゃね？

「……ああ、無いと思ったら部屋に置きっぱだったのネ。すみません、司令」

「む? ああ」

司令から携帯を受け取って、通知を見る。

見たことのないIDアドレスからだった。画像ファイルだつた

「……なんだ？」

正直俺の中のEランクの直感スキルがガンガンと警鐘を鳴らしてる。

『おい、そこから先は地獄だぞ』と言わんばかりに

とりあえず開く

「———プハッブ」

「ひ、ヒロさんが唐突に鼻血を!?!」

「しかも吐血まで併発してんぞコイツ!?!」

膝から崩れ落ち、そのまま意識が霞み始めるほどの圧倒的な衝撃。やべえ今ならマジ

の絶唱顔できそう

「あつ、むり、これむざり」

送られてきた画像ファイル

開いた先には、半裸でギヤルピースしてるカリオストロと布団から顔上半分だけ出したプレラーティに挟とまれる形こで眠顔りに悪つくサンジェルマンさんの写真。しかも見える範囲に服着てる様子はない。

続けて来たメッセージの一文

『この先見たいなら、協力ヨ・ロ・シ・ク♡』

あの一瞬で俺の性癖見抜くとか流石だぜカリオツさん……

奏×翼×マリアⅡ？

S・O・N・G潜水艦内における訓練場。立体映像を使って造り出された町並の中に、似通った装いの二人の女性が対峙している。

片方は特機部二世代からの最古参の奏さん。

対するは元ファイネチームから参加のマリアさん。

互いにガングニールを纏つての戦闘だけど、どうにも空気が悪いというか剣呑というか、訓練というにはあまりにも厳かすぎる。

外から見守る俺達、隣にいる翼さんの顔がやけに赤い。

「……教えてくれ相原。どうしてこんなことに」

「まあ奏さんはマリアさんの言い分認めませんし、マリアさんも頭ではわかっちゃいるけど、あれ完全に意地になってますからネ」

「い、今からでも止められないのか？」

「無理です。二人ともヒートアップしてるあの状態で殴り込みかけようものならこっちがケガする可能性がありますし」

「……………」

顔どころか耳まで真っ赤になる翼さん。いやー俺的にはこの状況はね……

『……いい加減に認めろよ、マリア』

『息が上がってる状態で強気ね。あなたこそ、そろそろ音を上げてもいいのよ?』

『誰が!』

アームドギアを構えて肉薄する二人。

『何度も言ってるだろ!』

『認めるつもりは無い!』

『翼は可愛いんだよツ!!』

『どこも可愛くないツ!!』

「お願いだからもうやめてえツ!!」

翼さん、とうとう顔を覆ってしやがみこんでしまった



緒川さんから聞いた経緯ではこうらしい。

何でも歌手としてのミーティング中に翼さんとマリアさんの間でちよつとした意見の相違が起こったらしく

『この剣、ホントに可愛くない……!』

これに奏さんが反論

『……翼が可愛くないだあ? 寝言は寝てる時に言うから許されるんだぞマリア?』

『……何よ。本当のことじゃない』

『か、奏、マリアも。私は特に気にしては……』

『お二人とも、一先ずは落ち着いて……』

『いいや、翼と緒川さんの言うことでもこればかりは譲れないね』

『奇遇ね。私としてもこれに関しては退くつもりは無いわ』

そこからもうヒートアップしてたらしい

『……前から思ってたけど、あたしら意外と似てるよな』

『そうね。どちらも纏うギアは GANG ニール』

『LINKER 無しじゃ戦えない劣等生』

『加えて装者としてだけではなく、歌女としても活動している』

『……白黒ハッキリ』

『着けるべきかしら』

『』——表に出ろッ!!』

『落ち着いて二人とも! この表は海中だぞ!』

『翼さんも落ち着いてくださいッ!』



で。

『まだまだ翼のこと全然わかってないよなあお前!』

『少なくとも通じあつてはいる!』

『なら翼が可愛いこともわかつてるはずだろ!』

『いいえ、それに関しては否定させてもらうわ!』

『マリアア!!』

『奏え!!』

『お願い相原、もう二人を止めて!』

『お、おいヒロ、先輩が防人口調やめるくらいになつてんぞ!』

『でももつと二人のやり取り聞き聞きたいからやだ!!』

「この人でなし!!」

滅多にないこんな状況、楽しまなきや百合男子名乗れないってもんでしょ!

「まあ本気でやばいと思っただら飛び込んでくから」

「悪どい顔しやがつて……!」

「ふっ、ふふ……いつそ殺して……」

「先輩イ!」

絶唱顔もかくやという具合なレイプ目披露してる翼さん。

こんな俺達を余所に、奏さんとマリアさんの決闘は益々熱を帯びていく。

『教えてやるよマリア! 翼がどれだけ可愛いか!』

『何を!』

『まず、人見知りだけど一度心を許した相手に見せる笑顔! お前も見たことあるだろ

!』

『そんなことで!』

『あたしの後ろをちよこちよこ着いて来る姿! 昔は緒川さん、今ではヒロもその対象

だ!』

『それが、何よ!?!』

『極めつけはなあ……ヒロに対してだけ、服の裾つまみながらついてってるんだ! ど

うだ可愛いだろう!？」

『何それかわ……っ!』

「いやあああああツツ!!」

「ああっ、翼さんが発狂した!？」

「てかそんなことしてたのかよ先輩……」

「ちが、違うの、あれは、その!」

「あれくらいならいつでもウエルカムですケド」

「テメーは黙ってるバカ!!」

『……っいけない! その程度、セレナだつてやっている!』

「こつちに飛び火してきた!？」

『あたしにちよくちよく訊いてくるんだぞ! 『ね、ねえ、奏。相原と上手く連携取るとき、

どうすれば良いかな?』……だぞ!?! 可愛いだろこんなの!』

『会話内容の可愛らしさが無さすぎる! ボツ!!』

「……………」

「もはや悲鳴すら上げなくなつたな先輩……」

「ひたすら無心になろうとしてみたいだけ……あ、ちよつと涙目だ」

『『防人たるこの身に女らしさなど不要』とか言つてた奴がコツソリとヒロの好み知ろう

と色々やってて、しかも本人無自覚なんだぞ!」

『ぐっ……!? こ、のオ!!』

「それは秘密にしてって言ったのに!!」

『『可愛い!』』

「言うなア!!」

『そこまで言うならお前が言ってみろ! 翼のどこが可愛くないって!』

『ならば確と聞きなさい! まずは口調! 女らしさの欠片も無い!!』

『あれは翼の覚悟の証! それが続いてるだけだろ!』

『加えて言い回し! 意味くらい察しろみたいいな眼をして言ってくるから訪ね辛いつた

らー!』

『お家柄だ受け入れろ!』

『女子力の低さア!!』

『S・O・N・G女性陣の殆ど全員そうだろうが!!』

『『うっ』』

「すげえ巻き込み事故」

ていうか自覚あったんですネ奏さん……

『特に何なのあの部屋は! 緒川さんに申し訳ないと思ってるなら改善する努力の一

つも見せれば良いでしょうに、甘えっぱなしで！」

『欠点の一つもあつた方が可愛げあるだろ！　そもそも進んで部屋の片付けしてるような奴が言えることか！』

「姉さん……」

「マリアさんマジたやマ」

『……埒が開かないわね』

『まったくだ。このまま続けても平行線は避けられねえ』

『ならばシンプルに行きましょう。それがベストよ』

『ああ……』

『勝つた方が、この場合は正しいッ!!』

「冷静に考えたら可愛い可愛くないなんて個人個人の視点だからこれあんまり意味なくて？」

「ここまで煽っておいて身も蓋も無いこと言わないの！」

「かなでえ……まりああ……もう、やめて……」

奏さんの可愛い攻めとマリアさんのえげつない事実攻めに既に半泣きの翼さん。

さらつと俺の服掴みながらだからもうセレナからの謂れのない視線が辛い。

「……女つたらし」

「おいバカやめろ」

そんな中で訓練場の二人を見れば、大きく構えを取っていた。明らかに決めに行くための構えだ。

「……おい、あれ流石にやばくねえか？」

「ひ、ヒロさん！ 止めに行くはずじゃ……！」

「いや今飛び込んでもたぶん間に合わない」

「そんな!？」

いやあ普通に見入ったし聞き入ってたわ！ 正直司令に張り倒されても文句言えないって自覚はある!!

「奏ツ、マリア!!」

『ううおおおおおおおおおおツツツ!!!』

『はあああああああああツツツ!!!』



「……で、訓練場の一部と、奏とマリア君のギアの一部損壊。二人が軽傷で済んだのは不

幸中の幸いと思っておこう」

「は、」

「理由の方は緒川から聞いている。無論、止めきれなかった緒川や翼にも責が無いとは言えんが……シンフォギア相手に一番拘束力に優れながら、止めようとしてもしないどころか、むしろ煽ろうとさえした君の責任は重いぞ、ヒロ君」

「はい、すみませんでした……」

「ふむ……将来を考えて、君をS・O・N・Gに縛り続けるつもりはないが……働き口に困った時のための事務仕事等も覚えておいて損は無いと思うのだが」

「えっ」

「藤堯と友里を手伝ってやるといい。なあに、慣れないことでも数を重ねれば身に付くものだ」

「……………」

「——返事イッ!!!」

「サーイエツサー!!!」



「奏さん、マリアさんも大したケガじゃなくて良かったですよー」

「ははッ、思った以上に熱入っちゃまってさあ」

「はあ……流石にガラじゃなかったわね……」

「マリアがあんなに熱くなってるの初めて見たデス」

「……もうあんな理由で訓練場とギアを破壊するのはやめてくれ、二人とも」

「あたしとしては譲れないんだけどなあ……まあでも、色々言っちゃったしな。翼、マリア、悪かったよ」

「……譲れないのは同じだけど、今は違うわね。先に言われてしまったし。翼、奏、こちらこそごめんなさい」

「いや、私は気にしていないから……」

「……なあ、マリア？」

「なに？」

「これでも、まだ翼は可愛くないか？」

「ちよっ、奏。蒸し返さないで！」

「……フフッ」

「可愛くない剣だけれど——可愛い女の子ではあるわね」

S・O・N・G 青春白書

「はあッ、はッ……」

あまりにも逃げ場の数に欠ける潜水艦内を走り回る。

追手が近付く度に通路の角で撒き、時には適当な室内に入ってやりすごす。

「なんで、こんなことに……!」

相手はS・O・N・Gが誇る精鋭8人。俺自身、身体能力に自信はあれど、中には素で体力から何から何まで俺に大きく迫るメンバーもいる。

最悪、ジリ貧になる可能性の方がずっと高い。

「ギア使つてないのが……いやまあ当たり前だけど、それだけが救いだな」

『いたか翼?!』

『いいえ、こつちにはいなかった。……ねえ奏。やっぱり無理に訊こうとするのは良くないんじゃない?』

そうだ! 俺にも秘密にしておきたいことだつてあるんだからネ!

『……翼の言い分もわかる。けど考えてみる』

『?』

『翼は、S. O. N. Gがまだ特機部二の頃から、それこそ響達よりずっと長くあいつと同じ場所で戦ってきた。あたしが戦えない時でも、ヒロに助けられたことだって何度もあった。付き合いの長さじゃあたしらが一番だ。そうだろ?』

『それは、そうだけど……』

『……なのに、少なくともあたしは、ヒロについて知ってることが少なすぎる』

『あつ……』

『いつまでも、知らないままでいたくないんだよ、あたしは』

『奏……』

『……往くぞ、翼!』

『……ええ!』

「……気持ち、嬉しいですけどネ」

走り回る。俺の昔のことなんて、みんなの今と未来には関係無い。

——無い方が良い



「そういえば」

珍しくS・O・N・G前線メンバーが全員揃っていたある日のこと、調ちゃんがりアさんやセレナ達との会話の中で何となく切り出した一言が全ての始まりだった。

「ヒロさん、昔彼女さんがいたっていうのは聞いたけど……それから詳しいこと、マリア達は聞いたの？」

「——」

無言になるマリセレ姉妹。

奏さんや翼さんもその場にいたため、もろに聞こえていた。

「そうだ、忘れてた。ヒロ！……あれ」

「……エルフナイン。今そこでキャロルの髪を弄り回してたヒロはどこに行つたの？」

「へっ!? は、はい。ちいさな声で『急用が出来た』と仰つて出ていかれましたけど……」

「逃げられた……!」

「まだ間に合うぞ、引っ捕らえろ!!」

チクシヨウも来た!!

「……そんなことよりも、明らかに毛量を越えた盛り方をされたオレの髪をどうにかしろ」

「い、今元に戻します!」

キャロルは素直にごめんネ!



始まりとしてはそんな感じ。

『つーか、何であたしまで付き合わされてんだよ』

『ご、ごめんねクリスちゃん。人数多い方が良いかと思って、つい』

今度は別の声。クリスちゃんと……響ちゃんか。

『……まあ、あたしは別にあいつの昔のこととか気にしてねーけどさ。お前はどんなだよ』

『へ?』

『先輩やマリア達みてーに……その、なんだ。あいつにホの字ってわけでもねえんだろ?』

『ホの字って今日び聞かないよクリスちゃん……』

『う、うるせえな! いいから答えろよ!』

『……私自身、あんまりわかってないんだ』

『はあ?』

『ヒロさんのことは、好きか嫌いかで言えばもちろん好きだし、憧れてる。けど……奏さ

ん達みたいな『好き』なのか、あんまりわからなくて』

『……お前、それ』

『あはは、ごめんね変なこと言つて。早くヒロさん見つけよう!』

……それ、先に俺のこと追っかけてきた人達に真っ先に着いてった時点で答え出てる
ようなもんだと思うけど。

まあ、いつか。別にどうでも

「はあ……つたく面倒くせえ」

誰も近くにいないのを良いことに毒吐く。

無論、美女美少女に好かれるなり懐かれるなりされるのは男としては素直に嬉しい。
切歌ちゃんや調ちゃんみたいに甘えてくるのはバッチコイだ。

けど、それ以上は、俺には無理だ。

『ヒロさー……! お縄につくデーンズ!!』

『あなたは包囲されていまーす』

あの二人に至つては遊んでるだけじゃね? いや、当人達あれでマジだな

『……』

『セレナ……』

『っ、なに、姉さん?』

『大丈夫？ さつきから顔が暗いけれど』

『うん……追いかけて始めた時は、聞き出さなきやつて思ってたんだけど……ここまで逃げるって、やっぱりヒロにしてみれば、ホントに言いたくないことなんじゃないかなって……』

『……そうね』

『ヒロのこと、まだまだ知らないことたくさんある。けど、だからってヒロを追い詰めていいわけもない、よね……』

『……私も同じ気持ちよ、セレナ。早く見つけて、無理に聞き取りされないように、他のみんなを説得しましょう』

『姉さん……』

『彼が話すつもりが無い、話したくないようなことなら、それを無理矢理問い質して良い権利なんて、私達には無い……まあ、前に強引に聞き出しておいて、どの口が、とは思うけれどね』

『あはは……』

「……………」

そういう気遣い、ありがたいけどいらんですよ。
だったら端っから追いかけてこないでください。

……俺の昔なんて、気にしないでくれ

「……つたくよお……」

「ヒロさん」

「えっ」

かけられた声に思わず振り向く。明らかに想定外な死角からの刺客だった。

「……どうも未来さん」

「……」

無言怖い

「……カプツ」

「？」

何か口に唾える未来さん。

「——待つ」

ピイイイイイイツ!!!

甲高く響く笛の音。これ音の高さやペーやつだ!?

『——ウウウ』

「ヒエツ」

『——ミクウウウウウウウウウウ!!!』

「響! ヒロさんこつちにいたよ!」ピーーツ!!

「クソア! 何だつてそんなアイテム持つてるのさ!」

「ヒロさんが、いつだつて響に逢いたくなつた時のために持つておけて私にくれたんじゃないですか!」ピーーツ!!

「そうだったネ! 響ちゃんにその笛の音だけはどこにいても聞き取れるように仕込んだのも俺だつたハツハツ墓穴じゃねえか!!」

ちくしよう百合推ししすぎた挙げ句がこれだなんて!!

「見つけましたよヒロさん!!」

「悪いな響ちゃん、すぐに逃げさせて」

「逃 が さ ね え よ ! ! ! ! !」

「すまない相原、ここまでだ!!」

前門のかなつば、後門のひびみく

「あ、いたよ切ちゃん!」

「NEN—Good(?)の納め時デース!」

「ヒロっ、やつと見つけた!」

「くっ、もう全員いるじゃない!!」

十字路、右を見ればきりしらがいて、左を見れば姉妹がいる

「……………詰んだ、俺のメンタル」



場所を移して休憩スペース。

その中央に置かれた一脚の椅子に座らされた俺。周りを取り囲むのは装者ズの面々。

「……………何が始まるんです?」

「当然、お前の女経験の洗いざらい」

「……………セレナ。お前どこまで話した?」

「……………」

「……………セレナ、どうかしたの?」

「……………ううん、何でもない。昔、付き合ってた人がいたってだけ。そこはみんな知ってることだけ……………」

じゃ、一番肝心なところは話してないわけね。ならいくらでも誤魔化しようはある、か。

……でもまあ、この様子だと無理やろなあ。

「……奏さん」

「なんだ、セレナ？」

「さつき姉さんとも話したことなんですけど、やっぱり、逃げ出すほどにヒロが嫌がること、無理矢理話させるのは……」

「ならお前達はいいぞ。あたしは意地でも聞き出してやる」

「そんな！」

「翼。あなたからも……」

「……マリア、セレナ。すまないが、私も奏に賛成だ」

「なっ……!？」

「無論、奏がそう決めたから、などという安易な考えで出した結論ではない。……相原とは、私と奏が一番長い。だが……」

「あたしも翼も、何も知らない。ヒロのことを、何もだ」

「だからとて、それでもしもヒロの思い出したくもない過去を掘り起こしでもしたらどうする気!？」

「……何がそこまでさせるのかねえ」

ヒートアップしかけた周囲を見兼ねてぽつりと呟く。俺の言葉に訝しげな顔をした

みんなに、もうどうしようもないと諦める。

「……わかりました。話します、話しますよ全部」

「ヒロ!?!」

「いいよセレナ。どうせ今日うまく逃げられてもまた同じことが起こるんだから。ただ……」

そこまで言って、輪から外れた場所にいる四人を見やる。

「特に興味無いような未来さんとクリスちゃん、それにまず耐えられそうにない切歌ちゃんと調ちゃん席外した方が良い。俺の主観だけど耐性無い子が聞いていい話じゃないからね。言っとくけどマジで」

いつになく真剣に告げる。マリアさんに眼で促されたきりしらはそそくさと立ち去り、未来さんもクリスちゃんと響ちゃんを連れて去ろうとする。

「……ごめん未来。私聞いてく」

「響……?」

「……確かめたいこと、あるからさ」

「……わかった。クリス」

「ああ」

未来さんとクリスちゃんもいなくなったのを見計らって、大きく深呼吸。

「……………俺に昔彼女がいたって話ですよね？ ええ、知つての通りいましたよ」

あくまで前世でのことだけど、それは特に関係無いから実際に事実として俺の身に起こったことだけを伝える。

ああやだやだ、ホントに

「——まあ、寝取られて終わつたんですが」

——思い出しただけで吐きそうだ



初めて彼女が出来たのは、確か前世で高校生だった頃。一年の頃から好きでした、なんて言ってきた同級生とだった。

顔も名前も知つてはいたけど特に話したことはなくて、だから答えもすぐには出すつもりは無かつたのに、何をテンパつたのかOK出しちまつた俺がいた。

でも、結果的にはオーライだった。

見た目は文句無し、スタイルも悪くなくて母親と二人暮らしつてことで家庭的なところもあつて。

二人で話したり昼を一緒にしたりデートしたり、そうしていく内に俺もどんどん惹か

れていって。

その内、俺の方から改めて好きだと言って、正式に彼氏彼女の関係になった。

楽しかったし、一緒にいることが嬉しかった。たぶん向こうも『その時期は』同じだっただろう。それは何となくわかる。

……確か、高3の半ばより少し前くらい。

いつもは休み時間になれば俺のところに来ていた彼女が、何故かある日を境に頻度が減るようになった。

昼飯も、電話やメールのやり取りも、デートどころか下校も一緒にしなくなった。

極めつけは——俺に向けてくれていた可愛い笑顔を、一切見せてくれなくなったこと。

流石に何かあったのだろうか、と。聞き出そうとしたある日のこと、向こうから話があると呼び出されて、彼女の家に向かった。

——やめておくべきだったと、後で死にたくなるほど後悔した。



「……想像できますか？」

自分にだけ向けてた最っ高に綺麗な笑顔を見せてくれなくなっ

た理由が、街中探せばそこら辺にいる女コマすしか能の無いチンピラに抱かれてたから、なんて」

思つた通り、残つた五人はひとりの例外も無く青ざめていた。好奇心猫を殺す、つてこういうことだネ。



何が起きたのかわからなくて、どうしてこんなことになつたのかもわからなくてただ一つわかつていたことは——初めて恋焦がれた彼女は、もう自分を見てはくれないということだつた。

気付けば、その記憶を思い出さないようにしたまま、しばらくの時間が過ぎていて。俺の隣には、別の女性がいた。

今度はサバサバしたタイプの人で、俺が引つ張られる形で日々を過ごしていた。……今にして思えば、最初の件を忘れるべきじゃなかったんだなつて。

結局その人も奪われて、その拍子に一度目を思い出して何もかもが嫌になつて。気付けば、二回目をやってくれた男に殴りかかつて——



「……とりあえずは潰しましたよ。十二を、とは言いませんケド。……笑うしかねえよ。本気になった人、知らないままに盗られてたんだぜ？」

俺が転生者であることをみんなが知らない以上、事実をそのまま伝えることは出来ない。だから、「俺に彼女がいたけど寝取られた」という確定してる事実を、いくらか二つの件を混ぜながら話すことにした。

「……友達だとか仲間だとか、同僚とかそういう関係に収まるなら誰だろうと構わない。けど、そこから先に進むのだけは何があってもごめんだね」

そう、何があってもごめんだ。口では耳当たりの良い言葉を並べて、好意を示してきたクセに、結局見知らぬ誰かだろうと、抱かれた程度であっさり男を乗り換える。

信じたくなかったけれど、俺の中ではそういう思いが、そういう女性への不信感が確かにある。

「……奏さん、翼さん、マリアさん……それに、セレナ。みんなに想ってもらえるのは素直に嬉しい。けど……俺は、最終的ところで、俺はそれを信じられない」

みんなが息を呑む。俺の考えとか、誰にも予想もつかなかったんだろう。

「それが答えだ。俺は単純で百合さえ見れば何もかもに満足するでしょうもない

男。……だから、はっきり言わせてもらおう」

「この先何があつても——俺は、みんなの好意を受け入れるつもりは無い」

そう。それでいい。これが俺の結論。

誰かに奪われるくらいなら、他の男に走られる……裏切られるくらいなら、そんな関係は俺はいらない。

自分を想ってくれる誰かを傷付けてでも——俺は、俺が傷付きたくない。

だから、答える。Noと

傷付いてほしくないから答えを曖昧なままに、なんて反吐が出るようなことをするつもりは無い。そもそもそんなことを言えるほど出来た人間でもない。

「……みんなして、他の男を知らないだけだ。たまたま歳が近い奴がいて、たまたまそいつが悪くなかつただけの話だ」

反論を受ける前に席を立つ。

「……俺より良い男なんて、それこそ掃いて捨てるほどいる。もちつと外に目え向けるべきだよ、みんな」

みんなが顔を伏せている。マリアさんに至っては、肩の震え方からして泣いてるのだからか。

「……最後に、改めて言う。答えは——Noだ」

それだけ言って、逃げるように足早に去る。

後ろから切歌ちゃん達の声が聞こえるけど、腹の奥から込み上げてくる異物感にもう耐えられそうにない。

「……たぶん、これが一番良い結果だから……!」



『……………』

残された五人は一言も発さなかった。

何も興味本位なだけではない、あそこまで頑なに自分達を拒み続ける理由を知りたかった。

その結果、あまりにも残酷な事実にも、全員が打ちのめされていた。

「……………よしっ」

パンツ、という乾いた音に、四人が視線を向ける。

自分の両の頬を張ったらしい奏が立ち上がっていた。

「奏……………」

「行くか、翼」

「行くって……………」

「ん？ ヒロのとこだよ。また追っかけなきゃな」

「えっ……………」

あっけらかんと口にする奏に、マリアが怪訝な視線を向ける。

「……………奏、あなた」

「ヒロの昔のことはよくわかった。あたし達に振り向かないのも納得した」

「だったら……………！」

「なら昔の女のことなんて忘れさせてやれば良いだけだろ？」

ヒロが言っていたことに、確かにショックは受けていた。

けど、それを感じさせないほどに、その立ち姿は凜としていて。

「……………ああ、確かにショックだったさ。一番歳の近い男なんて、ヒロぐらいしかいない。

S. O. N. G. 以外の男を、あたしは知らない。けど……だからって、そんなにあつさり諦められるかよ」

「奏……」

「自分の命を、大切な存在を、何度も何度も助けてもらつてきた。自己満足、大いに結構。あたしは……ヒロ以外、誰も見る気は無い」

力強く宣言されたその言葉に、賛同するように席を立つ音が一つ。

「セレナ……？」

「……いつまでも、王子様扱いじゃダメなんだよね。ヒロだって、普通の男性なんだから」

潤んだ目を拭い、奏の隣にセレナが並ぶ。

「……姉さん」

「……そうね。彼に助けられてきた以上、悪夢に苛まれているというなら、私達が動かない道理は通らない」

セレナの隣にマリアが立ち、残った二人へと声をかける。

「……あなた達はどうするの？」

残った二人、翼と響もしばらく顔を伏せたままだったが、やがて意を決したように勢いよく立ち上がる。

「……無論、行くさ」

「……」

「……立花？」

「——私、ヒロさんが大好きですッ!!」

大きく叫び、彼女のモットーを体現するように駆け出した響。

「あつ、抜け駆け!!」

「答えを得た故に迷い無し！ それでこそ立花!!」

「はははっ、流石だなああいつ！」

「いや言ってる暇があるなら私達も往くわよ!!」

「応ッ!!!」

遅れて駆け出す四人。

話の場から外れていたメンバーが呆然としているところを通り抜け、何処かへ向かった男を探し始める。

この後どうなったかは、本人達にしかわからず

ただ一つ言えることは、これまでと変わらぬ……否

これまでよりもほんの少しだけ、日常の風景が変わり始めた、ということになるだろ

「何でもない日常が幸せなんだと思う」

・リアルに起きたらまずドツキリを疑え

「……うあー」

「あ、おはようヒロ」

「……ああ、おはようセレナ」

「もう、昨夜も遅くまで起きてたんでしよう。早く顔洗ってきて。もうすぐ朝ごはん用意出来るから」

「ん……家にいるのは合鍵持つてるから良いけどさ」

「ん？」

「……ちゃんと口に入れて大丈夫なやつだよな？」

「あはは、怒るよ?」

・マッドはいつでもロクなことしない

「ヒロくん」

「勘弁してください」

「何も聞かずに逃げようとするなんてあんまりじゃない?」

「だってこういう時の櫻井女史まともなことしないじゃないですか」

「まあまあとにかく聞くだけでも。ね?」

「……………聞くだけですからね」

「ちよろいわね」

「おい聞こえてんぞコラ」

・子の心、親知らず。知らなくていいこともある

『……………そうですか。マリア達は迷惑をかけているわけではないようですね』

「ええ。むしろ俺の方がお世話になりっぱなしで」

『……………貴方に、そして二課……………今はS. O. N. G. でしたか。とにかく、感謝の念が絶えません』

「そう思うんだったら、是非とも一度マリアさんやセレナ達に顔見せに来てくださいよ。みんなも会いたがってますし」

『……………あの子達には苦難を強いてきました。今は穏やかな時を過ごしているのはわかります。……………そんな場所に、私が……………』

「みんなは気にしませんよ。言ったでしよう? 会いたがってるって」

『……では、いずれ』

「ええ、お待ちしてますよ。——ナスターシャ教授」

『相原ヒロオ!!』

「うわっ」

『なぜ君が自由自在に完全聖遺物を振るえるのか……なぜ身体に何の異常も来さないのか! なぜ何度も死の淵を彷徨いながら死に至らないのくわア!! その答えはただ一つ……!』

「じゃーな英雄次会う時は眼鏡煮込んでやる」

『あっちよ、待て、せめて最後ま（ブツツ

・ジエラ○ット

「……あ」

「どうしたデス調?」

「見て切ちゃん」

「う? ……あ、ヒロさんデス」

「女の人と話してるね」

「道でも聞かれてるんデスカねえ」

「……あ、別れた」

「ヒロさん、女性不信だつて言うけど、ああいう形なら誰が相手でも大丈夫なんだね」

「優しいし力持ちだしで結構モテるみたいデスね。ヒロさんにその気が無いだけらしいデスし」

「——なんてことがあつたデスよ」

「顔のことでセレナはよくからかつてることあるけど、ヒロさんって基本的に誰にでも優しいから女の人のウケは良いみた、い……」

「——へえ」

「ヒエツ」

「せ、セレナ？ マリアも、眼がこわい……」

「い、いつもは奏さんや翼さんのアレコレ見てもこんな顔してないデス……」

「自分達以外は許せないとか、そういうのなのかな……」

・ 回って回って空回り

「……あ。お疲れ様です、奏さん」

「……お、おお、ヒロか。お疲れさん」

「ん？」

「な、なんだ？」

「いえ、何かいつもと様子が違うというか……遠くないです？」

「そうか？ そんなこと無いと思うけど……」

「……いつもは会うなり肩組んであててんのよしてくるのに」

「い、良いだろ別に！ あたしにもそういうことしない日もある！」

「はあ」

「じゃ、あたしもう往くわ！」

「アツハイ」

「……あたしにしおらしくとか無理だって。何かクリスみたいになってたし……」

「だ、大丈夫だよ奏、その内慣れるから！ 奏なら出来る！」

「……じゃあお前もやってみるか翼あ？」

「えっ」

・お約束と書いてテンプレ

「さて、と。今日は艦内待機らしいし、適当に暇でも潰して」
「くっ殺せ!!」

「謀られるとは、防人たる私なんたる不覚……だが、この風鳴翼、剣である我が身と魂は、如何な手段で来られようとも折れること能わず! さあ来るならば」

「ちよつと奏さん呼んでくるんで大人しくしててください」

「え?」

「翼さん恥ずかしさのあまり涙目なんで説教の時間です」

(やつべえやりすぎた)

・ゴールデンも言ってた

「——というわけで、錬金術と医学は実は密接な関係にあるんです。どちらも人体に関わることでですので、以前ヒロさんが遭遇したパヴァリア光明結社の面々も、錬金術により不老の身体を手に入れていることになりました」

「……うん。まあなんとなくはわかった。それでさあ、エルフナイン」

「はい、なんででしょうか?」

「この講義、俺の膝の上でやる必要ある？」

「え……ご迷惑、でしたか？」

「いやそうじゃなくてさ。キャロルがすげえ眼でこっち見てんのよ」

「えつと……キャロルも座りますか？」

「壊すぞ」

「俺は一向に構わんどキャロル」

「コロスゾ」

「カタコト!？」

・心が踊る (PRD)

「……未来ってさ」

「? 何ですか奏さん？」

「良い嫁さんになりそうだよな」

「ええっ!? お、お嫁さんって、そんな……!」

「——ねえ未来さん」

「ひ、ヒロさん!？」

「誰想像した? ねえ誰のこと想像した!?! いや予想は付くけど誰を想像した!?! ねえ

ねえねえねえ!!」

「い、嫌です!」

「良いじゃないのさ本人この場にいないんだから!　ホラホラホラホラハリーハリー

!!!」

「う、うううう!」

「そこまでにしとけこの百合バカ」

「残念ながらそれは褒め言葉ですし聞くまでやめませんよホラホラホラホラ未来さア

!!」

「うう……カプツ」

「あ、響笛」

ピイイイイイッ

・振り切れた母性からは逃げられない

「……ふふっ」ナデナデ

「……教えてくれセレナ。何で俺はマリアさんの膝枕を受けながら撫でられている。俺はあと何時間これを受ければ良い。俺はあと何回、目の前の光景を凝視すればいいんだ……ゼロは俺に何も言ってはくれない……」

「姉さんの願望というか欲求振り切れちゃってるから」

「あっさりしてんなあ！ 呼ばれて来た矢先にきりしらに取り押さえられてあれよと言
う間にこの状況にされた俺の戸惑いわかるか!」

「こーら、騒がないのヒロ。……でも、そういうところも可愛いわね……フフツツ」

「姉さん人目につく所じゃ絶対にその顔しないでね……」

(俺の視点からじゃ目の前の立派なお山のせいで見えないんだよなあ)

「……………さわる?」

「……………結構です」

「今の間はなにヒロ」

「……………」

「ねえ」

・ゆきねこ

「クリスちやーん!」

「殺気!」

「おぶう!?!」

「響!?!」

「うう……なんで避けるのさア！」

「逆に考えてみる。いきなり後ろから飛びかかれたらどうするよ。とんだ玉突き事故にならあ」

「くっ……だつたら正面から行かせてもらおう！ そろそろヒロさんの言う愛されガールの本領を発揮する頃合いだと思ふよクリスマスちゃん！」

「だれが愛されガールだア!!」

「雪音、息災か？」

「よっ、クリスマス」

「ああ先輩達。あのバカのめんどくせー絡みさえ無けりや平穩そのものだ」

「ハッハッ、ホントは嬉しいクセによく言うぜ」

「はあ!？」

「そうだな。雪音の性根が善良なのは誰もがわかってる。面倒と口では言いながら、本気の否定も拒絶もしていることは滅多に無い」

「ち、ちがつ」

「よしっ、じゃああたし達も響にならうか！」

「ふふっ、そうね」

「あう、うう……はーなーせー!!」

「あ、あの、クリスマス先輩……」

「……さん？　なんだ？」

「お疲れのところごめんなさいデス……あの」

「なんだあ？　今のあたしなら逃げる気力ないから楽だぞー？」

「あの、その……！」

「？」

「抱かせてくださいデスツツツ!!!」

「」

「……あの、違いますクリスマス先輩」

「」

「切ちゃん、日本で暮らすようになってから枕変わると眠れなくなっちゃったみたいで」

「」

「せ、先輩ー？」

「……き、気絶してる……立ったまま」

「……あーうー」

「クリスマスちゃんがいつになくグロッキーだ」

「大丈夫？」

「なんなんだよお揃いも揃って……あたし何かしたかあ……？」

「俺としては普通にメシウマだったけどネ」

「ヒロ」

「ウィツス」

「はいクリス。あつたかいものどうぞ」

「……あつたかいものどーも……」

「だいぶ重傷ね……帰れそう？」

「ここに来るまでもだいぶフラついてたから、危ないんじゃないですかね一人は」

「クリス、どうせなら泊まっていけば？」

「いい……あのバッテンに何されるかわかんねえし……」

「何かってナニ!? 切歌ちゃんとなニをするのかちよつと詳しく」

「セレナ」

「うん」スパアンツ!!

「オウフ」

・男なら

「司令」

「どうした、ヒロくん？」

「みんなが良い女すぎて辛いです」

「ほう」

「あんなの聞けば普通は避けますよね？　なのに何で未だに好かれてるんです俺？」

「ハツハツ。贅沢な悩みだな」

「いや笑い事じゃなく」

「……そう言つてやるな。こんな命駆けの場所だ。未来への希望の一つも、何より心の拠り所も傍におかねばやつてられん」

「俺である必要は無いと思うんですが」

「それこそ彼女達に直接伝えろ。だが、君がいることで皆の未来への意志と戦う力に繋がっているということをし、そろそろ自覚するべきだな」

「……ちえっ」

P i p p i p p i

「む？」

「あ、すいません俺です」

F r o m : 母さん

件名：色を知る年齢トシか

〈本文〉

強くなりたくば喰らえツツ

「勇次郎!?!」

・一方そのころ

「♪」

「何をニヤついてるワケダ、カリオストロ」

「あらプレラーティ」

「……これは」

「そ。こないだの彼の写真。可愛い顔してるわよねえ」

「だが例の件で返事は来ないワケダ」

「そうなのよねえ。フラれちやったみたい」

「……行くなら手を貸してやつても構わないワケダ」

「ホント? ……と言いたいところだけど、あーし一人で行くわ。プレラーティはサンジェルマンの傍にいてあげて」

「シンフォギアとかち合ったらどうするワケダ。ラピス・フィロソフィカスの錬成にはまだ時間がかかるとサンジェルマンも……」

「別に戦いに行くわけじゃないもの。最悪、彼だけ浚って帰ってくるわよ」

「……アダムへのカウンターとしての価値ならわかるが、お前の奴への態度はそれだけとは思えないワケダ」

「そうねえ……まあ、個人的にも好みだし？」

「あーし——どっちもイケる口だしネ♡」

今も昔も男は弱いよ

「……プレラーティ」

「? どうしたワケダ、サンジェルマン」

「カリオストロの姿が見えないけれど、どこへ行ったかわかる?」

「いや、私も何も聞いては……ああ」

「心当たりが?」

「恐らくだが、例の男……相原ヒロに会いに行つたかもしれないワケダ」

「なっ……また勝手に一人で……行くなら行くとせめて一言……!」

「……まあネコみたいに気ままなあいつなワケダ」

「シンフォギアと遭遇して、もしも万が一があつたら……」

「そこまで心配することもないワケダ」

「え……?」

「——奴は、お前を置いてくたばるタマでもない」



パヴァリアア光明結社

遙か昔から歴史の闇に潜み、世界を股に駆ける一人の男が立ち上げた影の軍勢。

錬金術を用いて完璧な肉体を手にした者達で構成されるその組織は、決して一枚岩ではなく、あくまで旗頭がいるというだけで、思惑はそれぞれ別に持ち合わせていたりする。

統制局長、アダム・ヴァイスハウプトに従う女性、サンジェルマンの同士であるカリオストロとプレラーティイも、アダムや結社ではなくサンジェルマン個人に忠誠を誓っていることからしても、それは明らか。

まあ何でこんなこと言っているかというと

「もー、ダーリン遅ーい」

「」

街中でカリオストロに遭遇しちやっただからなんだよネ……

「……誰がダーリンだコラ」

「えー?」

いつもの如く街行くチンピラ共が街行く女性に絡んでる場面に遭遇、特に急ぎの用と

かも無いけどどうしようかと悩んでいた時、隙間からなるべく見たくない顔が見えて、次の瞬間にはダーリン呼ばわりされていた。

「ちえつ、あいつのツレかよ」

「え、あの野郎有名なの？」

「昔大勢相手に大立ち回りましたらしいぜ。知り合いから聞いた話だけど、声かける女みんなあいつのだって」

「うげつ、顔普通なくせしてとんだタラシだな」

「誤解したまま行こうとしないで！俺フリーだし、こいつに関してはむしろ平時は出来る限り関わりたくないんだよ！」

俺の叫びも空しくそそくさと去っていった野郎数人。こんな時だけ諦めはえーなコンチクシヨウ

「助かったわあ。あいつら贄にしちやっても良かったケド、こんな所でやってシンフォギアに見つかっても面倒だし」

「助けてねえし、俺からみんなに伝わる可能性もゼロじゃねえだろ。って、おい何さらつと人のチャリのケツに座ってんだよ！」

「良いじゃない、こういうの経験無いからちよつと乗せて？」

「お断りださつさと降りろ！」

「もう、強情なんだから……ねえ」

「ヒエツ」

ぬるりと蛇が這うかのように身体に腕を回される。すごい、鳥肌がすごい！

胸の感触とか吹き飛ばすレベルで鳥肌!!

「何も戦うとか取って食べちゃうなんてしないから……ちよつとだけタンデム、どう？」

「やめろやめろ手を這わすな下半身に手え回すなア！」

「最後に良い夢見させて……ア・ゲ・ル・か・ら」

「い・ら・ねー!!」



「俺は無力だ……」

「んー♪ 良い風」

人目につく街中を避けてママチャリを漕ぐ。

S・O・N・G・に通報しようとしたら携帯取り上げられてツーショット強制的に

撮られて、その携帯は今カリオストロの胸の中。

この野郎、童貞の心理を理解しやがって……

「……おい。もう気い済んだだろうが、いい加減降りて帰れ。そもそも重い」
 「ちよつと、レディに重いか失礼でしょ?」

「中身はゴリゴリのクセしてよく言うぜ。お前がレディならS・O・N・G.の末っ子は今ごろ社交界の華だよ」

「取——り——消——し——な——さ——い——よ——!!」

「バカバカバカ暴れんな! ハイドラックダンス 不運と踊つちまうだろうが!!」

俺の肩を掴んで揺さぶつてくるカリオスト口。崩れそうになる車体を何とか留めつつ大人しくなるのを待つ。

「もう……」

「ため息吐きたいのはこつちだつての……なんで?」

「なに?」

「今日は何であんな堂々と街にいたんだよ? まさか俺を探してたなんて言わねえかな」

「あら、正解」

「……なんでさ」

続けて出る俺のため息に、カリオスト口がクスクスと笑う。そのまま俺にしなだれかけながら、顎に手を這わせてきた。

……クツソ、手から何まで柔らけえ

「……おい、やめろつて何回言わせんだよ」

「……例の件、考えてくれた？」

例の件、前に拉致られた時に言われた、サンジェルマンさんに協力しろ、ということだろう。

「前にも言ったろうが。答えはN oだ」

「ここだけの話、あーしとプレラーティはアダムに裏があると思ってる」

「おい、なに勝手に語りだしてんだよ」

「いいから聞いて。サンジェルマンだつて、きつと心の底ではアダムを疑ってる。でも、あーしとプレラーティが協力しても、きつとアダムの奴には届かない」

初めて聞く、真面目な雰囲気のカリオストロに思わず口が閉じる。原作の知識があるとはいえ、気付けば次の言葉を待っていた。

カリオストロやプレラーティがアダムに疑念を抱くことは、この時点ではいささか早い。

「……あーし達は、サンジェルマンのためなら命だつて惜しくない。あーし達を導いて、生まれ変わらせてくれた恩人。……アダムや結社の思惑が何であれ、サンジェルマンを害するつもりなら、あーしもプレラーティも全力でサンジェルマンを守る」

「……」

「けど……悔しいことに、あーし達だけじゃ不安も残るのよ」

「……だから、俺ってか」

「そ。神を縛る鎖と、世界ごと抉る剣。アダムがどんなカラクリで来ようと、あなたの聖遺物があれば……サンジェルマンを守る」

「……」

「サンジェルマンの理想、サンジェルマンの夢。あーしとプレラーティは、そのために全てを捧げる。でもサンジェルマンが死んじやえば、それも全て無駄になる。だから……もしあーし達がいなくなった後、あなたにサンジェルマンを助けてほしい。それだけでなく……」

「……俺に、アダムを殺れってか」

カリオストロが一つ頷く。

サンジェルマンさん一人のために、存在全てで仕えるカリオストロとプレラーティ。

……ああ、やつぱり。この三人は一緒にいるべきだ

「……サンジェルマンさんの目的に協力しろ、って話と変わってねえか？」

「それに関しては諦めたわ。少なくともあーしは、サンジェルマンがアダムに利用されるだけになるのを防ぎたい」

「……ふーん」

「……お願い。サンジェルマンを守って」

やや強めの風の中でも、俺の耳にハッキリと届いたカリオストロの声。

この後にどう転ぶかは、正直わからない。だから

「……それ、俺じゃなくてもいいだろ別に」

「えっ……」

俺が思う、俺の考えだけを言わせてもらおう

「サンジェルマンさんを守りたいなら、お前らで守れよ」

「……あーしの話聞いてた？」

「お前らが死んだら、俺がサンジェルマンさんを守るかアダムを殺るってことだろ？」

「だったらお前とプレラーティが死ななきやいだけの話じゃねえか」

「……」

「ああ、確かに乖離剣ならあんな全裸、一瞬で塵に出来らあ。けど仮に失敗した場合、塵にされるのはこつちだ。そんな大博打、俺はごめんだね」

セレナや奏さんを助けた時、ネフィリムやノイズと違って、相手は意思も知性も動きも持ち合わせた非人間、それも超一流の錬金術師。

俺は英雄王とは違う。そんな大きな存在じゃあ断じてない。博打を踏むつもりなん

か無い、決められると確実な確信が持てない限りは、そんな相手に使えやしない。

……一度死んだ身、何ももう一度死ぬことに恐怖なんて無いけど、それはそれだ。だからって無駄死にはしたくない。

「それにまだ見てないものだって山ほどあるしな」

「見てないもの？」

「ああ」

そう。これこそが一番大事なこと。俺という人間の根っこにある……一番デカイ『欲求』だ

「まだまだ見たいんだよ——女性同士の間で咲く百合の花つてやつを、さ」

俺、百合男子なもんで

「——」

後ろでカリオストロが息を呑む。まさか真面目な頼みにこんなことを返されるとは思っただけでなかったんだらう。

「……プツ」

「ん？」

「あはっ、ははははは！ な、なあにそれえ!？」

「なんだよ、欲求大事だろ？」

「け、結局自分の好きなもの!? それに女性同士って……あはははははー!」

「おーい流石に笑いすぎー!」

絶えることのないカリオストロの大笑い。そこまでツボに入ったのだろうか。

「……っはあー、笑ったわあ」

「さいで」

「……でも、そうね。一理あるわ。サンジェルマンに生きててほしいなら、あーし達がま
ず生きないと」

「そゆこと。まあそもそも面倒だしネー!」

「ちよつと本音え」

また笑いだすカリオストロ。俺としては、サンジェルマンさん、カリオストロ、プレ
ラーティの三人でそういう風に笑ってほしいもんなんだけどネ。

……さーて、そろそろツッコませてもらいますか

「ところでよお、カリオストロ」

「なあに?」

「お前いつまで俺の股間まさぐってる気？」

「こいつ、真面目な話してる最中ずつと俺の股間とその周りまさぐってやがった。興奮するどころか背筋寒すぎて逆に萎えてるわ。」

「……………」

「うおおい無言で続けんな！」

「え、だってこんな美人に大事なところ触られてるのよ？」

「やかましいわ自分で言うな！」

「……………」

「バカおいズボンの中に手え突っ込むなやめろオ！」

「本音は？」

「ナイスウ、なんて言うわけねえだろうがやらせんな!!」

「もうっ、ホントに強情ね！ あの夜のこと思い出さない？」

「寒気しか出ねえわ！」

ひたすら局部に触ろうとしてくるカリオスト口をどうにか防ごうとするも、こっちは

ママチャリを漕いでる最中。いい加減に停めてでもカリオストロを振り払おうとする。

「あ、ねえねえ」

「今度はなんだよ……」

「さつきからあーし達の後ろに着いて来てる、黒塗りの高級車。気付いてる?」

「やめろその疲れから追突しそうな言い方」

カリオストロの肩越しに、その車を見てみる。

「――」

「キヤアツ!? ちょっと、スピード出すならそうと……どうかした?」

(やばい……やばいやばいやばいやばい!!!)

その車は見覚えのあるどころか――見覚えしかなない黒塗りの高級車だった

そう。世界に名高い三人の歌姫が乗る車。

今日は仕事のハズの三人。

翼さん。奏さん。マリアさん。

フロントガラスからちらりと見えた三人の眼と、運転する緒川〓サンの、あまりにも対照的すぎる――据わりきった眼と同情的な眼が、あまりにも

ていうか緒川〓サン、同情する暇があるならその三人どうにかして御してください。

(申し訳ありません)

(このニンジャ直接脳内に……!!?)

「あら。よく見たらシンフォギア装者じゃない。それも三人」

「なんでだ……こうならないために人目につく所は全部避けてたはずなのに!」

「あつ」

「なんだ!?!」

「そういえばさっきのツーショット……あなたの携帯からグループトークに『デートなう』のメッセージと一緒に送信してたんだった」

「お前なんてことしてくれてんのオ!!?」

怖い! ひたすらに怖い!

そしてこのパターン知ってる、これ俺一人だけ悪いって言われるパターン! ハッ、俺詳しいんだこういうの!

「そんなわけで巻き添えで死にたくないなら降りろ!」

「えっ、なに? 狙われるのあーしじゃなくてあなた?」

「俺こういうの詳しいから知ってるんだ! だいたい男が悪くされるパターン!」

「……あなたも大変なのね。大丈夫? あの夜みたいにおっぱい揉む?」

「揉んだ覚えなんて無いしらんわ! どこで覚えんだよそういうの!」

そういう言ってる間に背後で動きがあった気配。

見れば車の屋根が開いてオープンカーみたいになった。

あれ、その車ってそういうタイプだっけ？

「「————」」

響き渡る三人分の聖詠。一瞬で変身バンクを経由してギアを纏った姿になる。

三人それぞれ窓枠に足をかけて、変わらぬ眼付きと真顔でこつちを凝視していた。

「————相原ア!!」

「はいイ!!」

「トーク読んだぞ！　なんだその女は!!」

「いや、あのですね!」

「待って二人とも。よく見たら、前にヒロの携帯に届いた写真の女よ」

「てことは……」

「パヴァリア光明結社か!!」

カリオストロの素性に行き着いたらしく、臨戦態勢に入るお三方。

「こないだに続いて、またヒロを狙うとはな!」

「かつてママやドクターに近づき、今度はヒロを……何が目的だ、パヴァリア光明結社

!」

「相原、何故振りほどかない!？」

「もう、せっかくのタンデムだったのに」

「自業自得じゃねえか不貞腐れんなや!!」

「緒川さん!」

「了解しました!」

やべえ本格的に追っかけるスタイル!!

「この、ホントそろそろ……あれ」

そこでふと違和感に気付く。

カリオストロの手は俺の両肩。なのに……

なんで俺の背中にもまで引つ張られるような感覚するの?

それとなんで俺の足はペダルから離れる気配がないの?

「……おいカリオストロ」

「なに?」

「お前俺になんかした?」

「……………いいえ?」

「疑問系な上に変な間があつたなあ今! 答えろテメエ!!」

「別に変なこととはしてないわよお」

ケラケラと笑いながら、俺の耳元で一言。

「——あーし達の服とあなたの足を、錬金術でチヨチヨイ♪」
「」

……ああ。一つだけ、ハッキリとわかったことがある

「お前みたいなたいプ大っ嫌いッ!!!」

こうなつたらもう、行けるとこまで行くしかない。

「問題無い……俺の騎乗スキルはA+（自己暗示）、ママチャリであろうと乗りこなしてみせる!!」

「がんばれ♡がんばれ♡」

「テメエマジで今日の恨み忘れねえからな!!」

仲間相手に全力決死のカーチェイスと洒落こんだらあ!!



以下、ハイライト

『ヒロから離れろお前!』

『なあに、まさかあなた達みんなこの子の女?』

『そうなれたらどれほど良いか!!』

『くっ……奏どころかマリアに迫るであろうあの……!』

『嫉妬なんて醜いわよ? 男の火遊びくらいドンと構えて笑って流すくらいの度量じゃなきやー!』

『うるさい!』

『『相原』ヒロの後ろなんてまだ乗ったこと無いのに!!』』

『『嫉妬する所そこお!?』』

『残念だけど、この子とあーし達ってばあなた達より先に進んでるから!』

『なっ……!?!』

『ヒロ、あなたまさか……!』

『いや童貞です! 清いままで! 最後の一線は全力で死守しましたからって言わせんな恥ずかしい!!』

『結構可愛い顔と声で哭くのよこの子!』

『やめっ、股間まさぐんなっつってんだろ!!』

『——よくも』

『ま、マリア？』

『よくもヒロの貞節を穢してくれたなこの「検閲削除」!!!』

『ガリイちゃんが聞いたらバカ笑いしそうなこと言わないで歌姫様!!』

『ヒロに手を出しといてただで帰れると思うなよ!』

『その女のどこが佳いのだ相原!』

『見た目以外はワースト一位でもごめんなさい! 童貞の心と身体は素直なんです!!』

『大丈夫よヒロ! あなたに非は無いのは見ていればわかるから、だから止まって!』

『悪いなんて言わない、この子はあーしが貰い受ける!』

『『させるかあ!!!』』

『つーかそろそろ脚が限界なんですけどオ!!』



「たっだいまー♪」

「カリオストロ!!」

「うえ、サンジェルマン……」

「シンフォギア共の懐に飛び込むのなら、何故私達に何も……」

「ゴメンゴメン。彼浚うだけならあーし一人だけでもって思っただけど」

「……収穫は無かったようね」

「……そうね。ごめんなさい」

「はあ……無事だったなら何よりだ」

「……サンジェルマン」

「ん？」

「chu♡」

「なっ……!?!」

「改めて誓うわ、サンジェルマン。あーしは何かあっても、サンジェルマンに着いてい

く」

「……カリオストロ」

「ね？」

「……はあ。何を今さら」

「ふむ……カリオストロめ、何やら一皮向けたワケダ。……相原ヒロ、か」

「……」

「……」ギュー

「……あの、司令」

「どうした調くん？」

「マリアや奏さん達、何でさつきから代わる代わるヒロさんの背中に抱きついてるんですか？」

「ああ、何でもマリアくんが言うには『穢された以上、私達で清める他に無い』とのことだが……」

「……あのトーク……何か関係あるのかな？」

「……マリア、時間」

「ええ」

「あの……いつになったら終わるんです？」

「無論、私達が納得するまでだ。では、参るっ」

「まだ私と響が残ってるからね、ヒロ」

「……はあ」

LILY LOVERS XX

『へえー。ギャラルホルン』

『うむ。近頃、どうにも不安定だな。了子君やエルフナイン君にも、詳しい原因はわからんらしい』

『平行世界を繋ぐ完全聖遺物、なんですよね？』

『ああ。反応するのは装者にのみというのが通説だが、君に限っては、完全聖遺物同士の感応が起こるやもしれん。間違ってもこの場では……』

『……』ヒュンヒュン

『……おい。何故ここで鎖を振り回している』

『いやほら、男たるもの冒険心の一つも、ネ？』

『今はそれはいら……ヒロ君!!』

『うおつまぶしっ』



「実験成功っ」

ギヤラルホルンが光ったと思ったら、俺の身体は見覚えある公園にあった。

前世でXDプレイしてた頃から気になってたこと、ズバリ『ギヤラルホルンが反応するもの』

一般的にシンフォギアを纏う者を装者と呼んでいる。けど、大昔に生まれた完全聖遺物が、何故造られて数年のシンフォギアと装者にのみ反応するのか。

シンフォギアの大元は神話に語られるアイテムである聖遺物、それを加工したのがFG式回天特機装束、つまりシンフォギア。

つまり、ギヤラルホルンが反応するのはシンフォギアとかその装者ではなくそのルートである聖遺物なんじゃね？ みたいな解釈を俺はしてる。

まあ俺に限らず考察してる人はそういう結論を出すのも大勢いたけどネ。

そこで、完全聖遺物扱いされてる鎖と乖離剣持つ俺にもワンチャンあるんじゃないやね？ というアホみたいな考えでやってみたら大成功したってわけ。

失敗したりアクシデントで、最悪死ぬ可能性も考えなかったわけじゃないけど

まあ一度死んでる手前、死ぬ時はサパツと死ぬわけだし、いや出来れば死にたくないけどホントその時はあっさり死ぬんだから、そうならそうならそれで、まあ良いかなって

「さーて、ここはどの世界線かなー。原作？ 片翼？ それとも閃光かもしくは未発見かな？」

辺りを見回しながらうろつく。見覚えしかない景色だし月も欠けてるしで、たぶん原作に近い世界なんだろうと思う。

ふと、後ろから何かの気配

「？」

俺が振り向くのに合わせたかのように、ひよっこりと茂みの陰から現れたもの

「……」

「……」

「……」

「……」

「アルカノイズさんチーッス!!!」

しばしの間の後、俺に向かって突っ込んできた小型のアルカノイズを横っ跳びで避ける。

姿勢を正してパッと前を見た瞬間

「oh…」

見事に団体様をご到着なさってた。

「さつきまで影も形も無かったはずなんだけどナー」

こつちを値踏みするかのようになうごうごととしてるアルカノイズ軍団。息を一つ吐いて、いつものように鎖を取り出して、構える。

「——来いや雑音ツ!!」

その声に反応したのかどうかは知らんが、一斉に躍りかかってきた軍団。

ギャラルホルンで繋がる世界である以上、こつちにも装者はいるはず。この鎖じゃノイズを倒せないのは知ってるケド

——時間稼ぎは俺の得意分野だったりするんだよネ!



「アルカノイズ反応、確認!」

「こんな堂々と仕掛けてくるとはな……。パヴァリア光明結社、形振り構う気は無いということか。……装者達への連絡、及び現在位置は!？」

「通達は既に完了しています！ 各員、現場へ急行中……ッ、アルカノイズ反応の中心に、民間人！」

「なんだとオツ!?!」

「で、ですが……!?!」

「どうした!?!」

「同じ位置に、聖遺物の反応も検出！ これは……完全聖遺物です！」

「……ええい、どういうことだ……まあいい、優先すべきは民間人の保護ッ！ 一番近い

装者は!?!」

「このペースだと……装者より、彼女が真つ先に現着します！」



「うおっ危ねッ!?!」

時間計るのも億劫なんで、迫ってくる奴から順に弾いたり叩き落したり。

無機物まで溶かすアルカノイズでも、この鎖までは対象にならないらしい。

「なんせ英雄王の無二の友の名前持つてる鎖なんでねえ……つて、サラッと街行こうとすんなオルアッ!!」

乱戦の中でも、余計な被害避けるために市街地に行こうとする奴を拘束して届く範囲に叩き落とす。

おかげでしんどい！

「ちよつと速く来てくれないとマジでやばいですけ、どオ!!」

懐に飛び込んでくる奴は、鎖を脚や拳に巻いて殴る蹴る。

直接触れられなければノイズの炭化も無効になるのは、これまでで実証済みなんでネ！

「ぶはっ……あの、いい加減……来てくれって……!」

息を吸う度に肺が軋むように痛い。吐く度に口の中が乾く。乳酸溜まりきった全身が重い。

いつそ楽になりたいほどの疲労に、目の前が眩み始めた、その時

「——うるっ、せ!!」

キイイイインツと、聞き覚えのあるような無いような、そんな奇音に思わず両手で耳を塞いでしまった

「あっ」

それを好機と捉えたか、さつきまでとは比べ物にならない数が、俺に殺到する

「——ハハッ」

流石にこれは間に合わない、とどこか他人事のように思考する
鎖を放とうと、腕に巻き付けて弾こうと

それよりも速く、ノイズが俺に突き刺さる

——調子に乗りすぎたかなあ、これ

「えっ」

けど、それよりも更に速く

天から降り注いだ黄金の雨が、目の前と言わず辺り一帯のアルカノイズを悉く塵にした。

「なんっ……!?!」

地面に突き刺さり、金色の粒子を纏ったそれを見て愕然とした

剣、槍、斧、矢

ありとあらゆる武器こそが、雨の正体

そして俺は——その使い道を知っている

「——王の財宝」

俺に与えられなかった、かの英雄王が誇る宝具

転生して、装者のみんなと共に戦う内に、求めるようになっていたその力

「誰だ………いつたい………!」

そんな俺の後ろを、滑るようにすり抜けた影が一つ

その影は地面に刺さっていた剣と槍を抜いて両手に構えると、一撃で残っていたアルカノイズを斬り払った

「――」

言葉を失う

長い髪に整ったスタイルの女性

こちらに振り向いたその顔立ちは、またしてもどこことなく見覚えがあつて

――俺と同じ色の、髪と瞳だった

「………その鎖」

ぼつりと呟いて、俺へと歩み寄ってくる

疑問が尽きない。訊きたいことが次から次へと湧いてくる

だから、どうしても訊きたいことだけを訊くことにした

「………まず、訊いていいか?」

「どうして?」

「百合の花は？」

「無垢な純愛」

「その花園は？」

「禁断の聖地」

「侵す奴には？」

「鉄槌」

「立花響」

「総攻め」

「雪音クリス」

「総受け」

「ひびみくは？」

「王道」

「奏さんとセレナとは」

「無限の可能性」

「我ら百合想う」

「故に我ら有り」

「俺がお前で!？」

「わたしが君で!」

「ワイーアーツ!!」

ダブルエーツクス!! と叫びながらハイタッチを交わす俺と女性。

うん、やっぱりこの人あれだ

——こっちの世界での俺だ。理屈じゃなく、直感でそう感じた



平行世界の俺が女性だとは思ってもよらなかった。

アルカノイズの第2波と錬金術師達の姿が見える気配も無いとのことで、とりあえずはその女性、相原ヒナと、合流してきたこれまた俺の世界と全く同じメンバーの装者達に連れられてやってきたのはいつもの潜水艦。

今は司令への面通しのために前後からこっちのS・O・N・Gに挟まれて通路を

歩いているのだが。

有り体に言おう、死にそう

「むー。なんで奏さんとマリアさんがヒナさんの両腕陣取ってるんですかあ」

「悪いな響。先着だ」

「まったく、ヒナ？ あなた防御はからつきしんだから、先走らないようにいつも言っ

てるでしょう？」

「ははっ、ごめんなさい……あの、あと出来れば人目があるんで腕組むの勘弁してもらえ

ません？」

平行世界の俺はS・O・N・G。おっぱい三銃士のうち二人に挟まれていた。

どうしよう、俺百合なら女の自分でも対象になるのか！ 知りたくなかったそんな事

実！

「やだっ、ここっつてまさか俺にとつて天国……!?!」

「他人事と思つてこの野郎……!」

肩越しに睨み付けてくるヒナ。ふむ、見た感じヒナ本人はそのケは無い、と。

「平行世界の俺だけどき、応援するよ装者のみんなー!」

「ゴルアツ！ わたしはノンケだあツ!!」

「こっつちじゃ『相原ヒロ』に対して恋愛云々無い以上自由にやれるとか、そうかこれが

愉快か！ ちい覺えた！

その後は司令や緒川Ⅱサンを初めとしたいつも通りのS・O・N・G・メンバーと邂逅（櫻井女史やキャロルもいた）。

シンフォギア装者でもない俺がギャラルホルンから繋がってきたってことにみんな驚いてたみたいだけど、『完全聖遺物ならしやーない』という結論に落ち着いた。ゆるいな。

ほいで今はヒナと二人。持つてる宝具が近い以上、やっぱり境遇も同じなんだろう。

お互い性癖も百合好きだしネ！

ただ、二人で話したいとヒナが言った瞬間の装者みんなの真顔はちよつとメンタルにキタ。

「お前も転生してここに来たんだよな？」

「うん。ある日ポツクリと。それで、こつちの意見もガン無視で戯だけ与えられてポイー、つて感じ」

「俺もそんな感じだわ。まあこつちは鎖と乖離剣だけだよ」

やっぱりと言うかなんと言うか、辿った経緯、家族構成、今日に至るまでの道筋まで

俺と全く同じと言っていいほどに似通っていて。

聞くところによると、ヒナは蔵を与えられたは良いものの、蔵そのものと鍵だけで中はスツカラカンだったらしい。まあAUOが財宝ぶっぱ出来るのって生前にお宝集めまくったつていう逸話があつてこそそのあの戦法と蔵だから、そこは何となく理解できる。たぶん俺に蔵が与えられててもそうだっただろうし。

が、そこで生きてきたのが、蔵の本質。

蔵に納められているのは、ザックリとした言い方をすれば遠い過去から遙か未来に至るまでの『人の手で生み出されるもの』その原点。

つまり、それにこの世界での技術や生まれるものを当て嵌めた結果、ノイズを倒せる唯一の武装である『シンフォギアシステムの原点』が、完全聖遺物という形でそのままヒナに与えられた蔵に置かれることになった、ということらしい。

まあ実際あの宝具そのままゲットしてたらそれこそただのチーターだから是非もないネ！

ちなみに俺が戦闘中に聞いた怪音は、位相差障壁無効にするシンフォギアの調律と同じ周波数の音だったらしい。んなもん使えるとか普通に羨ましいわ。

ここまでの話でだいたいの違いと共通点はわかった。けど、それ以外に決定的な違いが一つ

「……百合ハーレムですか」

「その顔やめて。第一、わたしノンケだから」

俺の方じゃあくまで友人なクリスちゃんや妹分のきりしらまでヒナに惚れてるこの世界。それどころかエルフナインやキャロルにまで意識されてる辺りやっぱ俺得すぎるよこの世界線！

「いやー、短時間とはいえ凄く良い上に濃いの見せてもらったわ」

「ホントにやめて……そ、そっちだつてハーレムみたいなもんでしよう!？」

「違わい！ 誰に手え出すつもりも無いし、童貞にはハードル高すぎてむしろ困ってるわ！」

「こつちだつて百合でハーレムにする気なんて微塵も無いし！」

「俺は！」

「わたしは！」

「百合が見たいだけです!! (切実)」

考えや悩みも一緒な辺り、やっぱり性別違うだけの同一人物なんだなと改めて思った。

「……改めて見ると、ホントにどことなくヒナさんと似てますね」

「髪とか眼の色もそうだし……お、つむじの位置同じだ」

「待ってください奏さん。なんでわたしのつむじの位置知ってるんです?」

場所を移して休憩スペース。興味深そうに俺を囲んでヒナと見比べてくる装者のみ
んな。

俺の素性は話し終えているため、自分の好意を寄せる相手が別世界では男だった、と
いうのも物珍しいようで。

「そこでキャロルとエルフナインを膝に乗せてるヒナちゃん。百合ハーレムな感想どう
ぞ」

「ぶん殴るよ?」

「あの……ヒロさん、で良いんですよね? あまりヒナさんをからかうのは……」

「大丈夫だよエルフナイン。あとでシバくから」

「んん……」

「……オレの顔でその反応はやめろ」

「ツンデレ乙」

「誰がツンツ……やめ……」

「薄々わかってたけど荒いなお前」

俺におずおずと注意をするも、ヒナに撫でられて大人しくなるエルフナイン。それに

目付き悪くしたキャロルだったけど撫でられてあっさりコロリ。……それで百合ハレムごめんは無理があるよこっちの俺。

「……んー」

「ヒロ？ どうかした？」

「いや、なんでも」

こっちのセレナが声をかけてくるも、どことなく距離感を感じる。

……まあ、こっちのみんなにしてみれば俺はポツと出の余所者だし。

それでも、平行世界の別人とはいえ一応は見知った相手から他人行儀ってのは……まあ、多少クるものがあるのは否定出来ない。

当たり前こそが一番の幸福ってよく言うけど、ホントにそうなんだなとこういう状況になって、よく思い知ったよ

そうして、一応は静かに続いていた時間も、終わりは来るもので

その後どれだけ待ってもアルカノイズの後続の反応や錬金術師達が来る気配は無く、そのまま解散と相成った。



俺の処遇はヒナに一任すると言われた。本来なら艦内に留まるかさつきとゲートから帰るべきだったが

『……ヒロ。君が通ってきたゲートってどの辺り?』

『え? いやこの辺だけ?』

『……見当たらないんだけど』

『うそん』

帰ろうと思ったら閉じてた。

やばくね? と誰もが思ったけど、俺の住む世界のギャラルホルンが不安定なように、こっちのギャラルホルンも他世界との繋がりが安定してたり不安定だったりしているらしい。だから、安定した時を見計らえば帰れる可能性はなきにしもあらず、このことで。

今日のところは未だ動きを見せない錬金術師達との遭遇の可能性を考えて、一人暮らししてヒナの家にお互いの護衛も兼ねて厄介になることになった。

だったら二人して艦内待機が理想だろとも思ったけど、ヒナはアパートの自分の部屋じゃないと安眠出来なくなってしまうらしい。こっちのみんな何してんのよ。

「ごめん。だいぶ歩かせちゃって」

「気にしなくていいって。距離的にも俺の世界と変わらないし」

百合についてだったりこっちのみんなについてだったり百合だったり百合だったり色々話しながらヒナに着いていく。

「……ねえヒロ」

「ん？」

「君……寂しいとか、思ってる？」

「……そりや、まあ。まだ半日くらいしか経ってないけどさ……向こうのみんなとの繋がりがりつて、俺の中でだいぶ大きくなってたんだなー、って思ってる」

「そつか……まあ、来れたんだったら帰れるよ」

「だな」

「うん。……さつ、ここがわたしの住んでるアパート」

「おお、俺の住んでるとこと同じだ」

「そこまで同じなんだ。まあ、女一人のやもめ暮らしだけど、良ければ上がって」

「んじや遠慮なく」

鍵を開けて部屋に入るヒナに続く。

「遅かったじゃないか……」

バアンツツツ
!!!!

勢い良く閉められるドア。軽く壁軋んだ音したけど。

「……………」

「……なあ今」

「キノセイ」

「えっ」

「キノセイ。ナニモイナイ」

「いやでも」

「キノセイ。ナニモ、イナイ。ナニモ、イナカッタ。イイネ？」

「アツハイ」

いるわけないいるわけない戸締り完璧なわたしの部屋にあの男がいるわけない……
とぶつぶつ呟きながら、ヒナがもう一度ドアを開ける。

「頑なだねエ相変わらず。だがそれでこそ僕の」

「ガツデエムツツツ!!!」

スパアンツツツ!!!

今度は小気味の良い音と共に。これこそ近所迷惑じゃね？

「……わたしの唯一の安息の地がア……！」

ドアにもたれかかって絶望するヒナ。

……いやー

「見覚えのある——全裸だったネ」

「言わないでよおッ!!」

見間違えるはずもない、あのインパクトはこっちでも健在らしい。

つか何やってんだあいつ

「もうやだ、ホントにやだあ！ 何でわたしのたつた一つの心安らぐ場所まで侵されなきゃなんないのよオ!!」

「……」

顔を覆って泣き崩れるヒナに、同情的な視線しか送れない。何かもう、哀れとか可哀想とかそういう次元じゃなかった。

「……い、いや、流石に三度目は無いんじゃない!? ほら、いくらあの全裸でも二回も邪険にされれば考えるって！」

「……」

気休めにもならない慰めだけど、それをどう感じたのか立ち上がってドアノブに手をかけるヒナ。

「……まだいたらあの粗末なモノぶらさげてる股間全力で蹴り上げてやる」

「怖えこと言いなさんな……ていうか、そんなこと出来る身体じゃないはずなのに思いつきりエレクトしてたなあいつ」

「考えないようにしてたのにッ!!」

「こうなりや自棄じゃい!! と叫びながら思いきつてドアを開け放つヒナ。
ぶつちやけこの後の展開は読めてる。

「ヒナ! 今日こそ君に僕の」

「死にさせオラアッ! ! !」

「うんッ」

有言実行

一歩大きく踏み込んだ後に振り上げられたその右足は、全裸で不法侵入の変態錬金術師——アダムの股座を的確に蹴り抜いていた。

「……やっぱ荒いよお前」

正直、見てるだけの俺の息子も怯えてました。



その後は何の問題も無く夜が明けた。

いや、アダムが深刻なダメージを受けたことに気付いたサンジェルマンさんが来たりはしたんだけど。

『サンジェルマアアアアアッ!!』

『あ、相原ヒナ!』

『なんで! なんでこの変態錬金術師がわたしの部屋にいるわけ!? 戸締り完璧なわたしの部屋に!』

『そ、そんなこと私が』

『シヤラップ、このポンコツ中間管理職! こいつはあれからいつもいつもいつもいつも! このドグサレさつさと持って帰って燃えないゴミにでもぶちこんで! そして二度とわたしの前に顔出させるな!!』

『……………ごめんなさい』

あなたが謝る必要無いんですがそれは

そんなこんなで、荒れ狂ったヒナを何とか宥めてその日は就寝。

翌朝、つまり今しがたヒナへと司令から連絡が入って、俺が通ってきたゲートが開いたとのことらしかった。

なんで、今はその公園にいる。

「……見苦しいものしか見せられなかったネ」

「気にすんな。お前に非は一切無い」

「そう言ってもらえると気が楽になるよ……」

あはは……、とヒナが力無く笑う。

「……もし疲れたら、さ」

「うん？」

「こつちの世界、避難所にしてくれても良いと思うぜ」

俺の言葉に少しだけ息を呑むヒナ。

だけどすぐに首を横に振って、今度は明るく笑った。

「……それは無理」

「なんでさ？」

「確かに疲れるし、色々としんどいよ。けどさ……今の状況は、わたしの行動したことの

結果だから。特にS・O・N・G.のみんなには、わかってくれるまで言葉を尽くすよ。わたしは百合が見ただけでソツチのケは無いつて」

「……」

こちらに駆け寄ってくる装者達を見ながら告げられたその言葉に、今度は俺が言葉を無くす番だった。

望まない状況になっても、疲弊するだけだったとしても、ヒナは逃げる道を選ばない。蔵といいこの意志といい——平行世界の同一人物であっても、やっぱり俺とは別人なんだと、改めて痛感させられた。

「……強いな、お前」

「そう?」

「ああ……俺とは、違う」

「……ヒロ」

それと共に差し出された右手。それが何を意味しているかは、わかった。

「縁があつたら、またいつか」

「……ああ。また、いつか。……百合のケ無いなら耐えるよ?」

「……がんばる」

言葉と一緒に握手を交わす。

俺とは違う俺、俺よりも色んな意味で強い俺
相原ヒナ——やっぱり、羨ましい

「……ねえ、いつまで握ってるの?」

「いや、こうしてれば蔵の財宝いくらか俺に回ってくるかなって」

「……だったら鎖だけでも頂戴よ」

「やだ」

「あははっ、面白い冗談だねー」

「——っだテメ、やんのかアツ!?!」



「ただいまー」

「ヒーロー!!」

「エーンッ!?」

「バカ! バカバカバカア!! 心配したんだからねホントにい!」

「いって……わ、悪かったよセレナ……」

「私だけじゃなくて、みんなにも謝って!」

「えー、あー……すみませんでした……」

「……まあ、お前がバカやらかすのはいつものことだけども、流石に今回ののはシャレにならないところだったぞ」

「はい……仰る通りです、奏さん」

「司令から聞いたが、冒険心、などと宣っていたそうだな」

「反省してます……」

「無事で何よりだけれど、もうこんなことはしないこと。良いわね?」

「はい……」

「ヒロさん……」

「待って響ちゃん、そういう顔されるのが一番効く」

「……けどよお」

「どした、クリスちゃん?」

「先輩達以上にぶっちキレてるのが一人いんだけど」

「……………」ゴゴゴゴ

「ヒエツ」

「…………ヒロ君」

「ハイツ」

「言いたいことは山程あるが、とりあえずは無事に帰ってきたことを喜ぶとしよう」

「はい」

「だが皆に心配と迷惑をかけたことへの償いはキツチリ取ってもらう」

「はい、心得ております」

「では、まず一つだけ言っておこう」

「……………なんでしょう？」

「——金輪際、君はギャラルホルンへ接触禁止だ」

「そんなツ!? あの百合に溢れる最高の世界に行けないなんて!？」

「反論を受け付けてもらえらと思つたかア!!」

「二度と触りません!!」

ざつぐ薔薇ん

「朝よ、サンジェルマン。起きて」

「……ああ。すまない、カリオストロ」

「謝る前に、おはようでシヨ？」

「……おはよう」

「よろしい。プレラーティも起きてるはずだから、早く身支度しちやつて」

「ええ……」

「……待たせたわね、カリオストロ」

「……」

「……カリオストロ？」

「ヘイツナンデエ」

「どうしたのカリオストロ!? 言葉使いが変だぞ!」

「なっ、なんでもないわヨ、なんでもない」

「……カリオストロ」

「な、なに？」

「プレラーティの姿が見えないけれど、どこへ？」

「ぶ、プレラーティ？ あの子ならシャワー浴びてるハズじゃ」

「いえ、浴室に姿は無かった」

「そ、そうなのー……」

「……後ろに何を隠している」

「いいっ!? な、なんにも無い、つて、ああ!!」

『出てくる。土産を楽しみにしていると良いワケダ』

「……………は？」

「ヒエツ」

「……………」

「さ、サンジェルマーン？」

「……………ふっ」

「えっ」

「ふはっ、ははははははは!!」グシャアツ

「た、高笑いしながら紙を……」

「まったく……カリオストロといいプレラーティといい統制局長といい……何故、揃いも揃って足並みを乱すようなことを……」

(何にも言えないわねこれ……)

「はははははは……はぐうツ!!」

「サンジェルマン!? どうしたの!?!」

「……………」

「が?」

「胃が……ツ!!」キリキリ

「ごめんねサンジェルマン! プレラーティにも言つて、あーし達だけでも自重するか
らア!!」



本日のふらわーは、いつになく盛況だった。

どれくらいかと言うと、響ちやんが思わず入るのを躊躇うレベルで。気にしなくて良
いって言つたけど『流石にこの状況で無理は言えないです』と言つて帰つてつた。ホン
トに良いのに。

まあでも日が暮れる頃には落ち着いていて、今は嵐が過ぎ去つた後のような店内を片
付けつつ、のんびりと疲れた身体を解している。

「いやー、今日はすごかったですネ」

「ホントねえ。こんなに繁盛したのなんて、もしかしたら初めてかもねえ」

「何か足りないものとかありそうならちよつくら買い出し行つてきますケド」

「あら、いいの？　じゃあキャベツと豚肉お願いできる？」

「了解です。じゃあちよつと行つてきます、もしまた混んで来たりしたら連絡お願いします」

店長の了承を得て、ママチャリ走らせて最寄りのスーパーまで。バルベルデの一件からこつち、カリオストロに絡まれたこと以外に物騒な事件も起きることなく、おかげでバイトにも精が出る。

「〜♪」

鼻歌混じりにスーパーで品物を物色。ふらわーで働き始めてからというもの、売られている物の相場や品質なんかにも目敏くなっているような気がしないでもない。

まあただの買い物に特に何かが起こるわけでもなく、言われたものついでに自費で足りなくなりそうな食材も追加で購入、良い気分のままにふらわーへ戻る。

そして、出来る限り会いたくないのに会った。

「おかえりなさい。知り合いがいらしてゐるわよ」

「ずいぶんと待たせてくれたワケダ」

「アイエエエエ!!」

「プレラーティ!? プレラーティナンド!?」

「何やつとんじやお前エ!!」

「何をしてるも何も、食事に來ただけのワケダ」

「まったく……女の子と仲良くするのもほどほどになさいね」

「誤解なんです! そいつはホントに違うんです!」

「すまないが、彼と二人で話をさせてほしいワケダ」

「ふふつ、かしこまりました。ご注文がお決まりになったら、彼にお伝えください。じゃあ後は若い二人でゆっくりね」

「待ってくださいイ!!」

「おぼちゃん言うだけ言つて引つ込んでった。ホントに勘弁してください……」

「……………注文は?」

「心底嫌そうな顔なワケダ」

「嫌そう、じゃねえ嫌なんだよ。カリオストロにエライ目に遭わされてから日も経つてないしな」

「ふむ……ついでにあの夜の一件をまだ引き摺っているワケダ」

「思い出させんじゃねえ薔薇野郎!!」

「思い出させんじゃねえ薔薇野郎!!」

「生憎、今の私は女だから『野郎』ではないワケダ。ミルク」

「流れるように注文しやがって……」

だが向こうは一応はお客でこっちは店員。オーダーを受けた以上は速やかに。

「……ほれ」

「ん」

目の前に置かれたコップに口を付けてミルクを飲んでいくプレラティ。

何口か飲み下してコップを置いたタイミングで、メニューを差し出す。

「何食うよ?」

「こういう食事は経験が無い、お前に任せるワケダ」

「……りよーかい」

そう言われたからには、とりあえずスタンダードにふらわーの看板メニューを出す
しよう。

とつとと食ってもらって帰ってもらうしかない……!

「……ああ、あとサンジェルマンとカリオスト口用にくらか包め。金ならある」

「ヨロコンデー」

無表情ながらドヤ顔とわかる顔をしながら黒いカードを見せびらかしてきやがった。

具材を混ぜ合わせて鉄板の上で焼くこと数分。切り分けて大皿へ、ソース等を盛り付けて差し出す。オーソドックスなお好み焼きだ。

「おあがりよ」

「ありがたく」

イタダキマス、とご丁寧に日本の作法に倣ってやがる。

箸は流石に使えそうになかったのでフォークを差し出しておいた。それを使って一口。

「……………ふむ」キラキラ

「うわめっちゃ喜んでる」

「……………」モツキュモツキュ

その後も無言の無表情（ただしキラ付）で食べ進めるプレラーティを横目に見つつ、お土産用のお好み焼きを追加で焼いていく。

その後、一枚丸々食っておいておかわりもしてきた。



『悪くなかったワケだ。また来る』

『出来れば二度と来ないでくれ』

『サンジェルマンとカリオスト口も誘っておくワケダ』

『絶対やめろ。特に後者』

散々食って満足したのか、どことなくルンルン気分な雰囲気を書き換えたプレイヤーは人目に付かない所でいつもの転移錬金術で姿を消した。

バイトの方も、その後はぱらぱらとしか客足が無かったものの、せつかくだからと閉店まで仕事した。

今はアパートに戻ってテレビを観てるんだケド

「……………なあ」

「……………なんだ」

画面に映る圧倒的な肌色面積、耳に響く女性複数人分の艶声となんか水っぽい音。隣に座るのは数時間前にも見たメガネのロリ。

「何だつて俺はお前と二人して外国物のレズ乱パAV観てんだ？」

「私が一人で観てたところにお前が割り込んで来たただけなワケダ」

「いや……俺の部屋」

いざ部屋の扉開けようとしたら、中から聴こえる何か覚えのある音。

その答えに行き着いたと同時にドア開け放った瞬間、こいつ我が物顔で人の部屋荒

らしてAV見てやがった。あの転移、帰ったと思わせといてここに移動してやがったこいつ、土足だし。せめて靴は脱げよ

「……カリオストロからも聞いていたが、お前趣味悪すぎなワケダ」

「ほっとけ」

百合とレズは俺の中で別物だけど、百合好きだからって何もレズが嫌いだなんて言つた覚えは一度も無い。

ていうか男だからね、R18は普通に好きだよ悪いか

「その気になれば女には困らんのに、こんな紙や映像の記録媒体で満足するとは……悲しい、いや、悲しく寂しい童貞なワケダ」

「うるせえわざわざ言い直すんじゃないやねえよクソホモ薔薇野郎！ フランスきつてのド変態が！」

「ジルドレの奴に比べれば対象年齢が近い分まだマシなワケダ。まったく、引き込んだのは私だが、何故あいつはあんな倒錯者になったワケダ」

「すげえ棒読み……」

プレラーティは眉一つ動かさないまま交互にテレビ画面と手元の雑誌を見てる。ちなみに百合系の薄い本からノンケもののDVDまで割と幅広いヨ俺の趣味は。

装者のみんなは知ってるかって？ ないです

「……………ん？」

「今度は何の用なワケダ？」

「すつとぼけんな。まさか飯食って人の部屋に上がり込むためだけに来たわけでもねえだろ」

「……………ふむ」

本を閉じて、いつものカエルのぬいぐるみを抱き直しながら、プレラーティが俺に向き直る。

そのままジーっと俺の顔を見てくる。

「……………」

「……………なんだよ」

「……………別に、特別良い男というわけでもないワケダ」

「お、なんだ急に。喧嘩売ってんのか？ 買うぞ？」

「違う。…………お前と会った日以来、どうにもカリオストロが変わったワケダ」

「はあ？」

俺と会った日……………やだ、背筋寒い。鳥肌すごい。

「今まで以上にサンジェルマンに手を貸しているし、どうにも考え事が目に見えて増えている。…………お前、何をした？」

「何をつて言われてもなあ」

それこそ特別なことをした覚えは無い。つーか中身除いて見た目だけなら普通に百合だし、それが俺得なだけで適当ぶっこいただけだし。

「加えてお前はカリオストロのお気に入りになつてるワケダ」

「やだ何それこわい」

「……まあそれはさておくとして、だ。カリオストロの奴からも言われているだろうが……相原ヒコ。黙つてサンジェルマンに手を貸すワケダ」

「それは断る」

言つた瞬間、俺の目の前に魔法陣めいた輝きが逆る。対して、プレラーティの首には鎖を巻き付けておいた。

「……やめようぜ、共倒れなんて」

「……形振り構うつもりは無い。お前とその聖遺物はアダムの奴への二つと無いカウンターなワケダ」

緊迫した空気の中で流れるテレビからの不釣り合いな音。それすら気にならなくなる程度には、俺もプレラーティも緊張していた。

「それだけでも十分脅威、加えてカリオストロを変えたお前の言葉。……サンジェルマンのためにも、私は退くつもりはない」

「知るか。そもそもカリオストロから聞いてるなら俺があいつに何て言ったかも知ってるだろうに」

「お前の言葉には一理あるのは理解している。だが……それとこれとは関係無いワケダ」

お互いに微動だにしないまま、時間だけが過ぎていく。

「……お前は、何を思っただけで戦っているワケダ？」

「あ？」

「私とカリオストロは、サンジェルマンのために。だがお前は……何のためにシンフォギアに肩入れしている」

「——ハッ」

投げ掛けられた疑問。向こうからすれば——否、誰が相手でも到底理解されないだろう、俺の動機。

そんなもん決まってる。

「百合」

「は？」

「女の子同士のキャツキャウフフ、つまり百合。それが見ただけ、つまるところ——俺は、自分のためにしか動いてない」

「誰かを助けて来たのも、俺の行動で誰かが救われたのも——あくまで、結果的にそうなったただけだ。俺は、自分が見たいもののためだけに動いてきたにすぎないんだよ」

もちろん、響ちゃんの時みたいない例外だつてあるケド……俺は、百合が見たいだけだ

「——巫山戯るなアツ!!!」

そんな俺の言葉に激昂、プレラーティは錬金術を解除してそのまま俺に飛びかかってきた

「そんなくだらない理由で断ると!? それだけのことで、サンジェルマンではなくシンフォギアに肩入れするだど!」

「くだらないとか言うなよ。俺にとつては大事なことだぜ?」

「黙れツ! ……そんなことに、命を賭けると言うか貴様はア!」

「ああ。俺の命よか——みんな笑つてる光景の方が重いんでね」

「この……良いだろう。ならサンジェルマンの脅威にしかならんお前に、もう用は無いわケダ!!」

「遅えよ」

「はっ、ぐっ!!」

俺の首に手をかけようとしたプレラーティだったけど、それより早く鎖で拘束する。完璧な肉体で錬金術に長けたプレラーティと言っても、意表を突かれて全身縛り上げられれば、そう簡単には抜け出せない。

「くっ、う……相原ヒロオ……!!」

「……はあ」

メガネの奥から、親の仇と言わんばかりに睨み付けてくるプレラーティ。

ため息一つこぼして、続ける。

「……ちなみにさ。笑ってる光景つてのには、サンジェルマンさんも入ってるのよ」

「…………は？」

「お前とカリオストロがサンジェルマンさんのためだけに命張ってるのはよくわかってる。俺の言う百合はお前らも対象だったりするんだよネ」

「……何が言いたいワケダ」

「鈍いなあ。……いざって時は、お前らとサンジェルマンさんを守るくらいはしてやれるつつつてんだよ」

「————待て」

「ん？」

「待て。話が刷り変わってるワケダ」

「どの辺？」

「サンジェルマンに協力するつもりは」

「無い」

「そんなお前を私は殺そうと思ってるワケダ」

「うん」

「……なのに守るだとか、お前は心底バカなワケダ？」

「否定したいケド出来ないナーそれ」

「ついさっきまでの殺気はどこへやら、プレラーティはポカンとした顔で俺を見ていた。無表情崩れた、やったぜ」

「サンジェルマンさんはもちろん、見た目は女なお前とカリオストロが仲良く絡んでりや、それはもう百合も同然。言ったろ？俺は百合のためなら何でもするし命だつて惜しくない」

「……………」

「それに、カリオストロの奴にも言ったけどさ……サンジェルマンさんなら、お前から守れよ。どうしても無理なら、そこで俺の出番だ」

「……私達を嫌って、シンフォギアと連んでるお前が、何故」

「マジに苦手ではあるけど別に嫌いじゃないし、お前らが百合百合してればオールオツケーだし」

いや、ホントに。こいつら二人は流石に無理かなーなんて思ってたけど、拉致られた時のあの写真でもうオツケーになっちゃった。自分の性癖に戦慄したね。

「……………はあ」

「ん？」

「……………もういい。帰るワケダ。これを解け」

「あいよ」

言われた通りに鎖を解除。衣服を正して、プレラーティが俺に向き直る。

「お前の言い分はわかったワケダ。とりあえず、サンジェルマンを害する気は無いと」

「おう」

「……………こんな奴に目くじら立てて警戒していたとは……………私もまだまだ青いワケダ」

「悪いようにはしないし、今日のこと黙つといてやるよ、特別何かされたわけでもないしな」

それにふらわー気に入ってくれたお客様なわけだし

いやまあバレたら普通に怒られるだろうけどネ！ バレなきや合法！

「……そういやだいたい騒いだけど、お隣さんとかから特に何も無いな」

「薄壁しかない部屋で誰が聞いているかもわからん話をするわけがないだろう。私達の周りの防音くらいしてあつたワケダ」

「便利すぎるだろ錬金術」

「……ではな」

「ああ。サンジエルマンさんやカリオストロと仲良くやれよ」

「言われるまでもないワケダ」

それだけ言い残して、プレラーティは今度こそ転移で姿を消した。

「……さて、と。片付けますか」

荒らされて18歳未満厳禁なモノとか散らかつてゐる部屋を



「戻つたワケダ」

「おかえりなさいプレラーティ。収穫は？」

「とりあえず、お前が入れ込む理由はわかつたワケダ。それとこれを」

「？ なぁにこれ」

「オコノミヤキ、とかいうものだ。あの男が焼いたものだが、悪くはなかったワケダ」
「あら、楽しみ♪」

「……………プレラーティ」

「ああ、サンジェルマ、ン!?」

「……………次からは、直接、私に一言伝えてから出てくれ」

「あ、ああ……………わかったワケダ」

「……………無事だなにより……………私はもう少し眠る……………」

「……………だいが弱っているが、どうしたワケダ?」

「プレラーティ……………あーし達、今まで以上にサンジェルマンに優しくして、もう少しだけ言うこと聞いてあげるようにしましよ」

「?」

「ヒロー朝だよー」

「ん? ……ああ、セレナ」

「また夜更かししてたの?」

「いや、ちよつと部屋の片付けしてたら遅くなっちゃって。昨日はバイトも最後までやってたし」

「そうなんだ。でもいつもはそんなに散らかってる様子無いけど」
「たまたまだよ」

「ふうん……朝ごはん、もうすぐ出来るから顔とか洗、つて……」
「? どしたよ」

【テレビに映る肌色面積】

「やべえ消したただけだったの忘れてた」

「……ま、まあ、ヒロも男の人だものね。うん、大丈夫……わたし気にしない……」
「おい声震えてんぞ」

「あは、は……は……」

「今度はどうしたよ」

「……ねえヒロ」

「え、待って何で声にドス利いてんの」

「片付けしてたら遅くなっただよね?」

「ああ」

「なんで?」

「なんでつて……散らかってたから、としか」

「そうなんだ、じゃあさ……」

「えっ」

「なんで女性モノの下着がテーブルの上に鎮座してるの？」

「」

「……」

「……あの、薔薇野郎……！」

「……」グスツ

「えっ」

「ひどい……ひどいよ……」

「いや、あの、待って。説明させて」

「こんな、こんな知らない女の人と……私達には、何もしてくれないのに……」

「ちがつ、だからね？」

「姉さん達に報告するんだからあつ!!!」

「やめてそれやられたらホントに死ぬ、誤解したまま逃げないでください!!!」

「……あつ、プレラーティ？」

「なんだカリオストロ」

「下着、はいてないじゃない。どうしたの？」

「ん？ ああ、あれか」

「悲しく寂しい童貞にくれてやったワケダ」

筆頭、独走

秋の日差しが世界を照らし、涼風が吹き抜ける今日この頃。

街から少し外れた公園で佇む男が一人いた。

いやまあ俺なんだけどネ

「あー……」

これから起こることに若干の不安を覚える。それもこれも、全部あの薔薇野郎のせいだ……

『何でもするって言ったよね？』

『いや、あの』

『じゃあ今日この後——デートしよ』

『えっ』

そんな感じでトントン拍子、あれよと言う間に日時が決まり、これよと言う間に場所が決まり、それよと言う間にその時が来たというか来てしまったというか

「ヒロ、ごめんなさい！」

「おう」

「……あの、待たせちゃった、よね……?」

「いんや。待ち合わせの時間より普通に早いし」

「そ、そつか……えつと、その……じゃあ、行こ?」

「……おう」

きゅつ、と俺の手を握って隣に立つセレナ。バレないように息を一つ吐いて、二人並んで歩き出した。

……どうせならマリアさん誘ってセレナと仲良し姉妹してるの見たかったけどナ

「……なあ」

「なに、奏?」

「あいつ、あんな風に待ち合わせしてデート、なんてしたことあったか?」

「私の記憶には無いわね。翼、貴女達はどうかなの?」

「……私の記憶にも、無い……」

「私と未来のお出かけに荷物持ちみたいな感じで来てくれることは何度か……でもあんな感じは一度も……」

「今朝帰ってきた時、妙にウキウキしてたのはこういうことだったのね、セレナ……」

「……顔赤くしてチラチラヒロのことで見てる。やっぱあざといな、流石お前の妹あざとい」

「うるさいわよ奏。誘い受け気質のクセして私の妹をデイスらないで」

「誰が誘い受けだア！」

「あ、移動した。行きましよう翼さん！」

「あ、ああ……だがもう少し声を……」



「いらつしやいませー！ ただいまカップルのお客様限定でスペシャルメニューを提供させて頂いております!!」

「カップル違います」

「今はまだ」

「そんな予定はないです」

「フフツ、照れなくてよろしいんですよ彼氏さん。カップル一組様、ご案内しまーす!!」
「俺の話聞いて!？」

朝食は食ったとはいえ、今は昼前。二人して小腹も空いたので早めの昼食にと選んだ適当な喫茶店でのこのザマである。

なんでこういう時の女性店員ってテンション高いんだろうネ

「……むう」

「なんだよ」

「私とカップル扱いされるの、そんなに嫌？」

「嫌とは言ってねえ。事実でもねえのにそんな扱いされたくないだけだ」

「……そっか。嫌じゃ、ないんだ……」

「?」

あれーなんか好感度上がった音したゾ今

＼ヨンメイサマゴライテンデース／

「……じ、じゃあせつかくだし……頼も、限定メニュー」

「はいはい、好きになさいな」

店員のねーさんに注文をするセレナを横目に見ながら、顔は窓の外に向ける。休日ということもあってか、道行く人達はどうにもカップルが多いようにも見えた。

「……ヒロ」

「ん？」

「お似合いだつて、私達」

「社交辞令に決まつてんだろ、んなもん」

「……」

「痛つて!? お前スネ蹴んなや!」

「ヒロが悪いんでしょ!? ホントに女心がわかつてない!」

「テンプレ鈍感系よりはわかつてますうー! その上での対応ですうー!」

「……」

「奏、仮にも歌女がしてはいけない顔になつてゐるわよ」

「仲良いのはわかつてたけどさあ……こうまで見せられると、なんだ……」

「……まあ気持ちはわからないでもないけど」

「ていうかマリアは落ち着きすぎだろ」

「あら、セレナは私の妹よ? あの二人が結ばれるのなら、私としてはむしろ望むところだけだ。その結果になつたとて、悔やみを感じこそすれど、邪魔立てなんてするわけがない」

「優しいねえ……んで、翼と響はなにをうんうん唸ってたんだ？」

「いやその……お高くなって。値段もそうですけど、カロリー的な意味で」

「……普段ドカ食いしてる子が何を言うのよ」

「いや、その……流石に太すぎるのは、ヒロさんも嫌かなー、なんて」

「口にした分は鍛練で消費……問題ない、無いのだが……」

「わからないでもないけど、そこまで悩むところなの……?」

「マリアは良いよなあ。食った分の色々が全部ソコに行くんだから」

「食器で人の胸をつつかない！」

「!」ガタッ

「ヒロ?」

「……いや、なーんか俺好きな百合的な展開が店内で繰り広げられてる気配したんだケド」

「……せっかく二人きりなのに、他の人に気を取られないでよ」

「?」



「………ねえ」

「ん？」

「こうして、その……二人きりってあんまり………というか、初めて、だよな？」

「言われてみりやそうだなあ。俺も特にデートしたいとかそういうのは無いし。出かけるにしても荷物持ちがほとんどだし」

転生してからこつち、ネフィリムの一件から始まり例のライブ、響ちゃん騒動から飛んでルナアタック。今日に至るまで何かとみんなと絡んでるけど、何だかんだでセレナと一緒に、っていうのが割かし多いようにも思える。

まあ他の人が学生かアイドルやってるってのも多いからなんだけどもネ

「言つとくケド、少なくとも悪い気はしてねえから」

「え？」

繋がれたままのセレナの手を軽く握り返しながら言う。視線は逸らす、恥ずかしいジャン

こつちはともかく、セレナは純粋にデートしたかった以上、少なくともその意を汲んでやらねば男が廃る。

本音を言えば百合デート見る方が好きだけど……まあ男だからネ！ 美少女と出か

けるなんてレアなイベントだからネ!

「まあ、なんだ……楽しまなきや損だし。お前の気が済むまで付き合うよ」

「……ズルいよ。そういうこと言うの」

頬を染めたセレナ、繋がれたその指が少し動いて、俺の指に絡んできた。

……まあ、拒否する理由もあるまいて

「次、どこ行く?」

「んー……歩こ。もう少し、こうしていたいから」

「……りよーかい」

その仕草に妙に照れ臭く感じながら、繋がれた手はそのままに歩き出す。

こういうこと受け入れちゃうからカップル扱いされんのかナ

「入り込みたい……」

「おい、さつきまで言ってたことと真逆だぞ」

「だ、だって、あんなに仲睦まじく歩いているのよ……もつと近くで見たいと思うじゃない」

「そんなだからただのやさしいマリアなんて呼ばれるんだよ……」

「つ、翼さん、男の人と手を繋ぐって、どういう感じなんでしょうか?」

「私に訊いてくれるな……経験など無い……」

「……」

あの四人はあれで隠れられてると思ってるのか……？

「ヒロ？」

「いや、なんでもない」

「……もうちよつと」

「？」

「もう少しだけ、近くに行つて……いい？」

「……好きにどうぞ」

俺の言葉に表情を緩めながら、セレナが腕に抱きついてくる。

……ああ、なるほど。なんでこういう時のセレナを相手にしているとここまでざわつくのか、何となくわかった

この態度が……最初のあの女を、思い出させるからだ



まあ、だからといって邪険にする理由は無い。あの女とセレナは別人なんだから。先のことはどうなるかわからないけど、少なくとも、今だけは、セレナのしたいようにさせたいと思う。

結果がどうなろうと、誰かを好きになるだけなら、自由なんだから。

「ヒロ、あーん」

「つたく……こんな人目に付く所でやるか、普通？ ……あむ」

「そんなこと言いつつ食べてくれるんだから」

「照れ臭いけど拒むほどでもないしネ」

……恋人ごっこ、なんだろう。少なくとも、セレナは笑ってはくれてる。その胸の内はどうあれ、楽しんではいらんだ。無論、俺も。

「……はいJK百合の気配キマシタワア!!」

「学生相手にそんな感情抱かないの!」

「だって! 今のリディアン組以外の女子高生の百合なんてめったに見れないし!」

「通報されるよ!?!」

仲良さげな女性同士の何かしらがあれば、俺がそれに反応してセレナがツツコミを入れてきて。

「……良いな、この新曲」

「姉さん達、三人での曲って意外と珍しいよね」

「やっぱ三人並んで歌ってんのかネ」

「……余計なこと考えない」

「アツハイ」

立ち寄ったCDショップで奏さん、翼さん、マリアさんの曲を探して、聴いて。

そんな時間、優しい時間、暖かい時間。

こんな時間を過ごしている間は、嫌なことも思い出す必要も無くて。

いつか、セレナやみんなも、誰かとこんな時間をずっと過ごすようになるんだと、心のどこかで思っていて。

そうなってくれればいい、百合でなくともいい。幸せに生きてくれればいい。

——俺とじゃなくても、いい

「……あの、奏さん」

「なんだ、響？」

「ヒロさんの、あの表情」

「何も言うな……そう簡単には割りきれないんだろ、あいつも」

「でも……」

「相原の過去、相当に根が深いのは、わかっている。だが……」

「彼を想う私達、ヒロが選ぶのが誰であれ、祝福するつもりはある。けど、まずは」
「ああ。……帰ろうぜ、あたしらは」

「……もう夜だな。送るよ」

「うん……」

時間は過ぎて、秋になったこの時期は日が落ちるのも早く、もう夜。

繋がれた手は、いつの間にか離れていて。セレナの手は俺の手に近付いては離れてを繰り返している。

「……ヒロ」

「ん？」

「なんだか無理矢理に誘った形になっちゃったけど……楽しかった？」

「……ああ」

「ホントに？」

「楽しかったよ。昨日ロクでもない目に遭ったしな」

「……そう」

会話が途切れる。楽しかったのは本当だ。

無言のままに二人で歩を進めて、その内、セレナがみんなと住む場所へと到着する。

「……じゃ、()で」

「……」

「セレナ？」

「……ヒロっ」

そのまま踵を返そうとした俺に、セレナが飛び込んできた。

「つと……なんだよ？」

「……信じられないのは、なんとなくだけどわかってる」

「え？」

「だから、信じて、なんて簡単には言わない。けど、これだけはわかってほしいから……」
赤く染まった頬、潤んだ瞳。その奥に見える感情。

何が言いたいかは、わかってる。信じてほしい、と言外に語ってるのもわかってる。

セレナ自身も、俺が何て言うかもわかってるんだろう。

だから

「……セレナ」

「……ヒロ」

「また、明日な」

「……うん。また、明日」

だから、お互い何も言わず、また明日、とだけ伝える。

セレナから離れて、足早に帰路につく。

途中で振り返れば、そこには小さく手を振る、セレナの姿があった。



・後日

「ヒロさん」

「どした調ちゃんに切歌ちゃん？」

「マリアがちよつとしたお仕事のお相手探してるデス」

「え、なに。怖いんだけど」

「えーつと……どれデス調？」

「これです。アイドル以外にも色々とお仕事あるらしくて……」

「うん、やだ」

「即答デス!？」

「なんでラブコメ定番のブライダル雑誌の撮影パートナーに俺を選んだよ! 緒川||
サんで良いジャン!」

「セレナとデートしたんだからマリアにも良い思いさせてあげてもいいと思います!」

「それでいらん噂立ったら迷惑かかるのマリアさんだけどなあ!」

「ううっ……それを言われると痛いデス……」

「わかつたら他当たりなよ。俺には荷が重すぎる」

「……なあヒロ」

「次は奏さんですか……どうしました?」

「今度のオフにあたしと翼、響と未来でWデートするんだけど、お前こっそり見に来るか?」

「是非行きます!!!」

「ヒロの趣味に的確につけこんだ巧妙な手口……!」

「大丈夫だよ、姉さん」

「けど、セレナっ」

「たぶん、今すぐどうこうってことにはならないから」

そう口にしたセレナの表情は、どことなく翳っていたと、後にマリアはそう語る――

「赤青」「黄緑」「人形過激団」『with F』

「……せんぱい。卒業、おめでとうございます」

「ああ、ありがとう」

「……」

「どうした？ 元気なことが取り柄の君にしては珍しい」

「……卒業、してほしくない……です」

「……君は」

「アタシ……せんぱいのこと、ずっとずっと想ってました。入学式、アタシの手を取ってくれた時からずっと」

「……」

「サヨナラなんてしたくないっ、ずっと、ずっとアタシと一緒に……！」

「……ああ。私も、悲しい」

「せんぱい……！」

「君は、私に何を望む？」

「……アタシ」

「うん」

「アタシ、せんぱいと……!」

「解剖したいゾ!!!」

「よろしい、ならば派手にPartyだツ!!」

「カッツカッツカアーーーーツト!!」

ジャキツ、とどこからともなく取り出した鋭利な爪アームを構えた赤ドリルとコインを取り出した黄色ディーラーの足下にメガホンを投げつける。

二人してキョトンとした顔でこっちを見してきた。

「ゾ?」

「ゾ? じゃねえよ! なんで急にサツバツとしてんだ!」

「私に地味は似合わない。即ちアドリブこそ最適解であると認識した」

「やかましいわこの蛍光色!!」

「けっ……!?!」

蛍光色……と項垂れるディーラー。いや、蛍光色つて割と目立つ色だからディスプレイつたつもりは無いんだケド。

その一連を見ていた青河童が半笑いで声をかけてくる。

「ぶぷっ……く、くだらなすぎる……!」

「おい何笑つてんだ一番のアドリブ戦犯」

「えー? アドリブとかガリイちゃんよくわかんなあーい」

「お前のベッドシーン触手機械モノに変更な」

「やめろやあ!!」

殴りかかつてきたのをさらりと避けて、伸ばされた腕を掴んで極める。まあアーム

ロックだネ

「がああああああ!」

「待て! 地味にそれ以上いけない!」

「今は人並の腕力しか出せないお前が俺に勝てるわけねーだろうがこの青河童……!」

関節技を解いて、拾ったメガホンを三人に突きつけて一喝。

「お前らが手軽に想い出補給したいとか言うから脚本用意したんだろうが! ファラ

ちゃん見てみる、あの待機中の優雅すぎるティータイム!」

俺の指摘にそちらを向く三人。

そこには普通のテーブルと椅子ながら見る者を魅了しそうな姿で優雅に紅茶を口に運ぶ緑ママさんの姿が。

「……まあ、私ですし？」

「キツイゾ」

「前から思ってたけどケバい」

「悪いが、地味に同意だ」

「ちよつと貴女達そこに一列に並びなさいな」

額に青筋浮かべてどこからともなく取り出した剣を構えてゆらりと立ち上がる緑ママさん。

それに臆することなく、むしろ喧嘩腰になるその他だった。

「あ？ なに、やる気？」

「せんばいより先に解剖する奴決まったゾ」

「では、派手に活殺だ」

殺気立つ四人に嘆息。懐からちっさいリモコンを取り出して、四つあるレバーを一斉に大に押し上げた。

「落ち着けバカ共」

「「ギヤアアアアアッ!」」

可哀想なものを見る目をしてる赤黄と何か顔が赤い緑。痺れ続ける青を見ながら
 言っておく。

「……母さんにケガさせたのまだ許してねえからな」



こいつら、オートスコアラも例によって生存。ただし魔法少女事変の時点で大幅に
 弱体化させられて、だけど。

理由と原因はこいつらの想い出集めの対象に、俺の母さんが含まれていたこと。

そしてもう一つ

『さあ——良い声を聞かせておくれどこを切り落とそうか?』

うちの親父がOTONAだったことだ。

ボッコボコにされて逃げた青河童曰く

『あれダメ。シンフォギアなんかよりよっぽどヤバイ。何がってもう、全部ヤバイ。ヤ
 バいしか言えなくなるほどにヤバイ。ホントにヤバイ。人間じゃない、ホントにヤバ
 い』

いやホントに、オートスコアラ生身でフルボッコって何者なんですかね、うちの親

父は……

そんな感じで、うちの両親はもう良い歳なのに付き合い立てのバカツプルと言って良いくらいには仲が良く、ケガさせられた母さんとそれにキレた親父が全会一致で

「死ぬ以上の屈辱」を味合わせたい、という結論に至った結果。オートスコアラ―四体全員をイグナイトモジュール抜剣から鎖で亀甲縛りの不殺コンボで生きたまま捕獲。

後に聞いた、エルフナインの別躯体を用意してくれたのと同じ人の手で、人間から想い出を吸い上げる機能を無くして（オートスコアラ―同士なら可）、暴走阻止のために電撃発生装置取り付けた上で人間に限りなく近付けた、なんてメチャクチャなグレードダウンを施されたらしい。キャロルは泣いて良いと思う。

余談になるけど、その人は「錬金術師Pエンハイム」とか名乗っているそう。

……良かれと思って余計な機能付けてないか今でも心配。

「キッツウ……まだ痺れてる感じするしい。……調子に乗りやがって、クソが」

「もつかい行くか？ ん？」

「やだあ、こわーい☆」

「……」【大】

「アッー!？」

「派手にアホすぎる」

「そんなことより、ファアラの顔真っ赤になってるゾ」

「あら、そう？ うふふ……」

「おう盛りのついた顔でこっち見んな」

人間に近付いたせいなのか、どうにも気性はそのままにやや大人しくなったのが見て取れる。想い出を必要としていることには変わらないケド、どんな魔改造を施せばそうなるのか普通の人間の飲食物を摂っても問題無い状態らしい。マジ何者なんだよこの世界の錬金術師……

「フツ……錬金術師による自動人形が錬金術師の手で大いに劣化とは……だが、これも貴様の背負いし宿業の過程、その一つなのか相原ヒロ？」

「テメエは服着ろつつつてんだろうが相原殺法プラスチックケツバットオっ!!!」

「ぐうおああああああああっっ!!!」

まったく嬉しくない全裸で躍り出てきた金髪ポインをプラスチックバットのフルスイングでケツをしぼく。

尻を押さえてのたうち回る元祖全裸——超先史文明の巫女も形無しだった。

「き、貴様……それはやめろと幾度も……」

「あ？ こっちだつてテメエに何度も全裸で歩き回るなつて言つてるよなあ？」

バットを突き付ける。悔しそうに歯噛みしながら、床に落ちてた白衣をいそいそと羽

織った。

「……フンツ」

「ドヤ顔すんな、コンティニューさせんぞコラ」

「やめろ。こんな形で命を磨り減らしてたまるか」

超先史文明の巫女、フィーネ。一期のラスボスにして、シンフォギアにおけるだいたいの事件はこいつのせいだったりする。今はただのホムンクルスボディに収まっただけの無害だけど。

こつちもまた例のPエンハイム某のお手製。

『レセプターチルドレンある限り殺しても別の器で甦るのですしたら、一つの器で何度も死ねる形にするのは如何でしょう？』

との外道すぎる発想の結果、櫻井女史の血液を元に異端技術と錬金術という誰が聞いてもやべーやつでコンティニュー可能なホムンクルスになったこの女である。

「ヒロ。ヒロー」

「んお？ なんだ、ミカ」

「お腹空いたゾ」

「ちようど青河童が想い出持て余してゐるらしいからもらつとけ」

「はっ。」

「えー。ガリイとちゅーするのはスキだけど今はヒロとしたいゾ」

「お前さん想い出吸えないでしょうに。色々食い物持つてきてあるから、それで間に合わせなさい」

「わかったゾ」

パタパタと菓子やら置いてある場所まで駆けてくミカ。

爪アームを外付にしたおかげか、普段は普通の人間と同じ手になってるため、雑に袋を開けてお菓子を食べていく。

「……ミカはいつからお前に懐いた？」

「知らね」

「……あの」

「何よフアラちゃん」

「出来れば……さっきの、もう一度」

「……」【大】

「んんんんんんんッ」

「クセになっちゃってんじゃねーか!!」



「……で？」

「んだよ青河童」

「なんだってこんなストーリーにしたのよアンタ？」

「あ？ 良いじゃねーか、ドロドロ五角形の百合ストーリー」

「や、流石のガリイちゃんもこれがだいぶ狂ってることくらいはわかるっつーの」

「うるせーな、だつたら自分でもっとマシな脚本書いてみるや」

「フアラちゃんとレイア演じる三年生の卒業を機に、この台本は始まっている。」

「青河童とミカはそれぞれ好意を寄せていた憧れの人を失って傷付いた後輩の役。」

「二人は傷を舐め合うように寄り添って行って、そこに割り込んで行くのが前からその二人を狙っていたフイーネが担当する非常勤の養護教諭。」

「ドロドロに泥沼になっていくに連れて、そんな噂を耳にした先輩二人がそれぞれの後輩への想いを自覚して更に泥沼……なんてのが俺が考えてみたストーリー。」

「頭の中で話作ってて普通に色んな意味で鳥肌立った。まあでも会心の出来だと思ってる（自画自賛）。」

「……今更ながらさ、オートスコアラー達はともかくあんたよくこれやる気になったな」「()にしていると暇なのだな」

「アツハイ」

「……『あのお方』のことを忘れさせる、とかつてお前は言ったな」

「……おう」

ルナアタツクの時、確かそんな感じの啖呵を切った覚えはある。

「忘れられるものか。未だに諦めてなどいない。だが……」

「？」

「今の私に手段が無い以上、せめてもの慰みに興じるだけの……そんな余裕が己の内に湧いただけのことだ」

「……さいで」

永い永い時間を生きてきたフィーネにとって、こんな時間は取るに足らないものなんだろうとは思う。

でもその言葉にはどこか——知識はあっても、出来ることが何も無いことへの、諦めみたいなものも、チラツツと感じられた。

「ヒロー」

「ちよつと待ってくれミカ。今レイアとファラちゃんのすっげえシーンだから」

「久しぶりにマスターに会いたいゾ」

「……」

その言葉に、カメラを回す手が止まる。

カメラの先で絡み合っていた二人も、横にいた清河童も、揃ってこっちを見ていた。
「……はあ」

一旦カメラを止めて、大部屋の隅にある、カーテンで仕切られた場所へと向かう。
カーテンを勢い良く開けて、その奥をみんなに。

「実は連れて来てたんだな」

「ん、oooooooo!!!」

「oooooooooooooooo!?!」

椅子に縛り付けられて口にガムテープ貼られたキャロルの姿。まあやったの俺なんだけどネ

オートスコアラが一斉にキャロルの所に駆け寄って、拘束を解いた——と思った
ら胸上げが始まっていた。

「お、おい！ やめろお前ら！」

「マスターが来てくれたゾ!!」

「感激です、ありがとうございますマスター！」

「派手に喜びを表すぞ!!」

「別に嬉しいとか思ってますけどね。マスターの面白い格好見れたんでガリイちゃん的には満足です！」

「ガリイは後で覚悟しておけ!!」

「……想い出は焼き付くしたはずだろう?」

「全部じゃないけど、オートスコアラー達に関することまで根こそぎ、な。けど……あの連中にしてみれば、消せない想い出のマスターだ」

「……奇妙なものだ」

「ほんとにな」

結局、キャロルの胸上げはまあまあ長いこと続いていた。



帰路。キャロルは置いてきた。

「いやー良いもん撮れたわー」

ビデオカメラの映像の中にあるのは、オートスコアラー with ファイネのあれこれ。連中の暇潰しにもなったみたいだし俺の趣味も満たせだし、良いこと尽くしとはこのことだね

「さて……ん？」

ポケットの中の端末が震える。手に取って見れば、そこには司令からの着信を示す画面。

「……はい、ヒロです」

『ヒロ君！ すまんが、至急今から示す場所へと向かってくれ！』

「……何かあつたんですか？」

『パヴァリア光明結社だ！ 連中、堂々と街で事を起こしたぞ！』

「——」

こんな形で、行動を？

いや、目的はわかってはいる、けどまさか……

「……了解です」

『頼むぞ！ 装者の皆も既に向かっている！』

「すぐに俺も行きます」

そこで司令からの通話は切れる。

ふー、と一息を吐いて、後ろを見た。

「……目的は俺ですか——サンジェルマンさん」

視線の先。いつものスーツ姿に、右手には金色に光るクラシッくなピストルを手にした、錬金術師の姿。

「……カリオストロと、プレラーティ。二人が拉致を見送った理由。そして」
ガシヤツ、とそのピストルを構える。

合わせて、俺も鎖を手を。

「ラピス・フィロソフィカスの初陣と共に……貴様の身柄を戴く、相原ヒロ！」
引鉄が引かれ、撃鉄が落ちる。

金色の光と共に、サンジェルマンさんの姿が変わる。

ラピス・フィロソフィカス。錬金術の秘奥……真つ先に、俺を狙いに来た辺り、いよ本格的に、というわけネ

「——上等ツ!!」

縛ってけZENRA

夜の街に突如として現れたアルカノイズの軍勢。

パヴァリア光明結社の錬金術師、サンジェルマン、カリオストロ、ブレラーテイがそれぞれ三手に別れ、装者達を分断させての陽動と本命を兼ねた策によるものだった。

『……サンジェルマン、うまいことやれてるかしら？』

『さてな。どちらにしろ、私達の役目はシンフォギア共の足止めなワケダ』

大軍、そう呼んで差し支えない数のアルカノイズ。

軍勢は二ヶ所に同時に発生、S・O・N・Gは現リディアン組と歌姫＋セレナのチームに別れ、それぞれ掃討に当たっていた。

「———だあクソツ！ ちよっせえクセに数だけは百人前かよ！」

「クリスちゃん、危ないツ!!」

「つと……悪い助かった！」

「行くデスよ調！ ぶっちKILLリーダー!!」

「うん、切ちゃん！」

たった四人、されど四人。

正規適合者のクリスに誰よりもポテンシャルが抜きん出た響、連携における相性と爆発力は他の追随を許さない切歌と調。

四人の奮闘を、文字通り高見の見物を決め込んでいたプレイヤーティは静かに見下ろしていた。

「……ふむ。想定してたよりもやってくれるワケダ。そちらはどうだ、カリオストロ？」

「こつちの子達もなかなかネ。二人おクスリ頼りなのに粘る粘る」

場所を移し、奏、翼、マリア、セレナの四人を見物するのはカリオストロ。

斬り裂かれ、突き砕かれ、細切れにされるアルカノイズとそれを行う装者達の様を楽しそうに見下ろしていた。

「ううおおらあ!!」

「奏、あまり無茶は!」

「このくらいなら無理の外! 後ろいるぞマリア!」

「わかってる!」

「道を開けるよ! 翼、行って!」

「ああ、助かるぞセレナ!」

減らせども減らせども後から湧き出る圧倒的な物量。

別の場所で戦う切歌や調と同様、奏とマリアがLINKERの効果時間に迫られている関係上、次第にジリ貧になるであろうことを、元F・I・S・のメンバーは感じていた。

『あーあ。あーし達のファウストローブも出来てればすぐに終わらせられたのに。なんで焦っちゃったのかしらサンジェルマンたら』

『だが、シンフォギアもまたアダムへの策に為りうることも、お前も承知の上なワケダ。英断とは言えんが、連中の実力を計れる上に、相原ヒロ一人相手ならばサンジェルマンだけでも事足りる』

『あーしもあの子と遊びたかったナー』

『ならサンジェルマンの吉報を待つワケダ』

一方で、S・O・N・G・司令部では一つの疑念が上がっていた。

「……なにか、妙だな」

「どうしました、司令?」

「奴らの動きに、打倒の意志が見えん。そういうことだろうか?」

「ああ。キャロルの言うとおり、アルカノイズの動き、並びに錬金術師達には、装者の皆の相手は……まるで、ものついで、という風に思えてならん」

「ついで、ですか？」

「加えて、あの二人の頭……サンジェルマン、とか言ったな。奴の姿も見えん
では、狙いはいつたい……」

「——司令！」

「どうした、藤堯!？」

「ヒロくんの位置に、錬金術反応を検知！ 恐らく、サンジェルマンです!!」

「——それが本命かア!!」

『装者達！ その場でのパヴァリア光明結社の動きは陽動だ!』

「ど、どういうことですか師匠!？」

「なるほど、攻勢が緩いわけだ、なア!!」

「わたし達をこの場に釘付けにする……なら、狙いは!？」

『ヒロ君だ！ 二手で騒いでこちらの目を向けさせ——彼の拉致こそが、連中の今回の狙い!!』



息が詰まる。身体が重い。血が足りない。

生傷は全身に出来てるし、利き腕の右に至っては直撃食らってズタボロになってる。指先動かすのが精々だ。

それでも——膝を突くのはサンジェルマンさんで、立っているのは俺の方だった。

「おの、れ……この程度で……ッ」

「……やめましようや、今日は」

「ふざけるな……こんな、こんなことデッ」

ラピス・フィロソフィカスのファウストローブを纏えば、俺程度はすぐに捕らえられると高を括っていたのか。

サンジェルマンさんにも大なり小なり俺から受けた傷はあれ、それでも負傷のレベルは俺の方がやばい。

けど俺はまだ自分の足で立っている。

サンジェルマンさんが、立てない理由——

「この様な痛みにも、絶対負けたくない、ぐはあッ!?」キリキリ
「胃痛の時は無理は厳禁なんですって! やめましょ! ね!?」
胃痛だった。

締まらねーなあチクシヨウ!!



「落ち着きました?」

「……」

無言である。何かもう眼が死んでる。

ついでに言わせてもらおうと、止まる気配がなかったので拘束させてもらってます。

「……哀れ、無様と笑うがいい。理想を掲げ殉じると定めたこの身が、臓器の痛み一つで動かなくなるなどと……」

「……中間管理職って大変ですよネ」

しかも上も下もフリーダムしかいないし。

……とりあえず司令に報告入れとこ

「……あ、司令。とりあえずサンジェルマンさんは拘束しました」

『単独でか!』

「ええ、俺もズタボロですケド、まあ一応。ラツキーが色々と重なりまして。今近くにいるんで、逃げないよう見張ってはおります」

『……わかった。響君とマリア君がアルカノイズの包囲を抜けてそちらに向かっている。あちらもだいたい落ち着いたようだ。そのまま、サンジェルマンの監視を頼むぞ』
「りよーかいです」

通信を切ってサンジェルマンさんに向き直る。

「もうちよいしたらこっちの援軍来ますんで。俺としても仕事ですんでネ、申し訳ないけど大人しくしててください」

「……仕事だからと」

「ん?」

「職務でしかないから、我々に抗すると。そう言うのか、貴様は」

「……あー。まあ、他にも個人的な感情ありますケド」

カリプレが助けに来るっていう可能性はもう初めっから見越してる。

囚われのお姫様状態のサンジェルマンさん助けに来る（見た目は）女性の従者が二人とかそんな面白いやん?

「……ところで気になってたんですケド」

「……」

「黙秘貫きたいならご自由に。……なんでわざわざアダムの野郎に従ってるんです?」

「……答える義理は無い」

「んじや勝手に推測と憶測で語りますネ。パウアリア光明結社を立ち上げたのはアダム。一枚岩じゃないとはいえ、幹部のアンタ見てる限り実力者揃い。でも正直それ纏められるだけの才覚って、ぶっっちゃけアダムの野郎には無くないですか?」

「……」

前世から知ってる身、推測っつーか事実を述べていく。

「俺としてはあいつの実力直接見たこと無いんであれですケド……サンジェルマンさんでも勝てないんです?」

「……」

「無言は肯定と取られることありますよー」

「テキトーぶっこく。まあでもたぶん正解だという確信はあるからこれで当たりなんだろうネ。」

「……まあいいや。とりあえず……あいつの言うことーから10まで鵜呑みはダメだと思っわけですよ俺は」

「……何がわかる」

「おっ」

それまで口を閉じて無言を貫いていたサンジェルマンさんが顔を上げる。目をひん剥いて、怒り心頭と言った表情だった。

「貴様に！ 貴様のような樂觀した男に何がわかる!？」

「悪鬼外道の道にこの身を貶めるしか出来なかった私達に、あんな人でなしに従う道しか取れなかった私達に……気安く、わかった様なことを……!」

「……」

……断片的にしか、サンジェルマンさんの素性を俺は知らない

どれだけの地獄を歩いてきたのか、どれだけの苦難に苛まれてきたのか

その道の果て、辿り着いたのがアダムの下。今を生きる人間を犠牲にするしかないという悪の道。

自分で選んだ道とはいえ……まあ、嫌だわな

「……まあ、知った風な口利いたのは謝りますわ。けど」

だから、言っておく。これだけは言っておく。

その道の結末を知っているから。そして——俺はそれに、今でも理解はしても納得はしてないから。

「あいつ——」

『そこまでにしてもらおうよ、悪いけどね』

「!？」

「統制局長……何故!？」

辺りに響く、聞き覚えのありすぎるイケボ。

けど、見回しても姿は見えない。

『いやいや危ない。早死にするよ？ 無駄な知恵をひけらかすと』

「こんの、全裸……!」

「何故です局長!？」 相原ヒロについては、我々に一任すると!」

『よく言えたね、そんな無様を晒しておいて』

「……っ」

『それに……遅いんだよ、君は。色々とねえ。亀が歩く方がマシだよ、これなら』

「ぐだぐだ倒置法晒してねえで、出てこい全裸マン！」

「出てるよ、ここに」

「なっ!？」

遠巻きに聞こえてた声が、気付けば背後から。

振り向いたと同時に、炎を纏った帽子が俺の右腕を抉り抜いていた。

「——いつ、あああああ!!？」

傷口が裂けて拡がり血が吹き出て、肉の焼ける音と不快な臭い。

予想以上の激痛に、情けない声を出すことしか出来なかった。

「ハハッ！ 脆いなあヒトの身体は」

「……へッ。今日はちゃんと服着てるんだなこの野郎……!」

得意顔で俺を見下ろすアダムに返す。身体がもつとまともに動けば中指の一つでも立ててやったのにチクシヨウ

「……もう緩んでいるよ、鎖は。動けるだろうサンジェルマン？」

「……はい」

意識が腕の痛みに割かれたせいか、緩くなった拘束からサンジェルマンさんが抜け出し、再びファウストローブを纏う。

『逃げるヒロ君、無理に相手取る必要は無い！ アルカノイズは掃討したと報告を受けた、直に皆が到着する！』

「やー、そうしたいのは山々なんですけどネ。たぶんこれ逃げられないと思います。それ……」

『まだ何かあるのか!?!』

「この全裸野郎に、一発返してないんで」

それだけ言つて立ち上がつて通信を一方的に切る。

右腕がまともに動かない以上、左腕と両足だけで対処するしかない。

この二人を相手に、だ。

「……詰んでねえか、これ?」

目の前に迫る帽子と錬成された弾丸。身体を横に倒しながら、弾丸は避けて帽子は鎖で弾き飛ばす。

こういう時の常套は——！

「頭狙い!!」

「来たまえよ、聖遺物使い!!」

「相原ヒロツ!!」

向けられたサンジェルマンさんの銃、腕もろともそれに鎖を巻き付けて締め上げる。

その間に、左の拳にも鎖を巻き付けて、狙うは全裸野郎の顔面。

「甘いよ、その狙いは！」

——まあ、当然防壁に止められたわけ

「つぶね、とおっ!？」

銃声が聞こえた瞬間にバックステップ。着弾点から隆起する金色の岩を続けざまにギリギリで避けていく。

「先ほどからちよこまかと……!？」

「数少ない取り柄なんで！」

強がってはみるものの、普通に劣勢。ていうかヤバい。

サンジェルマンさんに注意を割けばアダムの帽子、かといってそつちに気を取られればサンジェルマンさんにやられて下手すりやオタツシャ重点でサヨナラ案件。

ラピス・フィロソフィカスのファウストローブのガードの硬さは折り紙つき、軽いダメージ与えるだけでも全力で殴らないと通らない仕様。決め手に欠ける手札な上に、ボロクソのこの身体には厳しすぎる。

そんなことを考えていた弊害か

「いっ!？」

脚を掠める弾丸に、思わず回避の動きが止まる。

続けざまに来るのは、アダムの帽子ではなく錬金術での攻撃。
それを見て俺は——思わず笑った。

「——マリアさんッ!!」

「任せな、さいッ!!」

気合一閃。

俺の目の前に躍り出たマリアさんのその槍が、迫る一撃を両断した。

「どおりやあああああッッ!!」

その隙を逃さないのが、S・O・N・G・随一のイケメン系女子。

咆哮と共に放たれたその拳は、サンジェルマンさんがいた場所に大穴を開けていた。

「シンフォギア……!」

忌々しげに呟くサンジェルマンさん。

それを尻目に、俺は走った。

「アダムッ!!」

「だから遅いと——なに!?!」

また防壁でも張るつもりだったのか、けどそれは今度は通さない。振り上げられたその手を、背後の空間から直接呼び出した鎖で縛り上げる。

硬直して生まれたその隙、逃がすわけが無い！

「右腕の借りじゃ、貰っとけ!!」

「びっ、うっ?!」

鎖を巻き付けた左の拳、おおきく振りかぶって真下からアダムの顎を打ち抜く。

痛打と衝撃に一瞬意識が飛んだようだけど、すぐに持ち直して退避。空中待機しやがった。

「ヒロさん、遅くなりました!」

「いや、ナイスタイミングよ響ちゃん!」

「ああ、ヒロ、こんなにポロポロに……!」

「毎度のことなんで、いや痛あい! 右腕触るの禁止イ!」

「ご、ごめんなさい!」

フラつく俺を支えようとしたんだろうけど、不幸にも右腕側からやってきたから引き離す。

わー、改めて見るとズタボロどころかズタズタだー俺の腕

「……やるじゃないか」

「ナメてかかりすぎなんだよ。そんなだから今みたいに俺みたいな生身のガキにカウンセラー食らうんだ、この慢心野郎」

一步踏み出して、動く左手の指を向けて、続ける。

「良いか、全裸。お前には足りてないものがいくつもある」

「なに？」

「情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！ 加えて速さも足りてねえが、それよりも何よりも——」

言つてやる。言いたかつたことを言つてやる。

造物主に造り出された、完全であるが故に発展性の無い、不完全な人形。原初のアダム。

生まれの素性的にしゃーない所もあるだろう、けど、生まれつきこいつに決定的に足りてないもの、それこそが

「——想像力が足りないよ、この不完全野郎」

「——不完全、だと？」

そして、その言葉はこいつにとって逆さ鱗でもあつて。

「僕を——不完全と言つたか貴様アアアア!!!」

予想通りガチギレ。たぶんもうこいつの眼には俺しか映っていないだろう。

「つーわけで響ちゃんとかマリアさん！ みんな来るまでサンジェルマンさんの相手ヨロシク！」

「ええ!? いや、私出来れば話し合いたい」

「向こう聞く耳持たないみたいだから、今回は見送って！」

「そんな!?!」

「というかヒロ！ あなた、そんな身体でまだ戦うつもり!?!」

「来てますヨ！」

「はっ!?!」

俺に飛び込んできたアダムを避ける。二人はサンジェルマンさんの攻撃を捌きつつ、マリアさんは適度に反撃を加えていた。

「マリアさん、LINKERの効果時間は!?!」

「……肌でわかる。もうあまり残っていないわね」

「だったら、私が」

「いいえ、それには及ばない——イグナイトで一気に決める!!」

——あつ、やべえ。忘れてた!

「マリアさん、イグナイトはちよつと待つ」

「抜剣!!」

自分の記憶力のアホさ加減を殴りたくなる。

制止は間に合わず、マリアさんは決戦形態——イグナイトモジュールを起動させてしまっていた。

「響ちゃん！ マリアさんを退かせて」

「余裕だねえ、余所見とは!!」

「つぶねえ!」

「連れて帰ろうと思ったけど、変わったよ、気が！ 残ってればいいさ、君の聖遺物が!!」

直に自分の手で屠るとでも決めたのか、錬金術を多用しながら俺へと殴りかかってくる全裸。鎖と手足でどうにか捌くも、伝えそびれたことが頭から離れない。

「邪魔なんだよゴルアツ!!」

「ぐっ……!?!」

「マリアさ……!!」

鳩尾辺りに拳を打ち込んで、鎖巻いた蹴りで吹き飛ばす。

その間に改めて伝えようとしたけど——もう、遅かった

「マリアさん!?!」

「かつ、あ……イグナイト、が……なぜ……」

ギアも解除され、倒れ伏すマリアさん。響ちゃんはそんなマリアさんを庇いながら、サンジェルマンさんを相手取っていた。

「……ああ、クソ」

それに気を取られて、アダムから目を離していた。

奴を探す中で上を見れば――

「黄金鍊成とかやめろよお前……ここ都心のど真ん中だぞ!!」

服が消し飛び、いつもの全裸。掲げた右手には、金色の光。

「っ、局長、なにを!？」

「造るんだよ、金を! 『鍊金術師』だからねえ、僕達は!!」

光は徐々に大きくなって、たぶんもう止められない。

「……ヒロさん、師匠が退避しろって。つんぐーすか級? とかなんとか」

「それ、戦略兵器って、ことじゃない……」

「……消し飛ぶぞ、ここら一帯。なのに響ちゃん、逃げれる?」

「絶対に嫌です」

「んじゃ、マリアさんのことよろしく」

「ヒロさん……?」

「ヒロ、あなた……」

鍊成を果たすのに、多少なりとも時間がかかるのは知ってる。でも、たぶん臨界点を越えてる以上、途中で阻止はたぶん無理。

なら、残された選択肢は一つだけだよネ。

「——起きろ、エア」

俺の言葉に、金色の波が立つ。

そこから現れたのは、久しぶりに抜く乖離剣。

「起き抜けで悪いけど——久々にデカいの往くぞ」

柄に右手を添えて、鎖で無理矢理に雁字絡め。なんとか動く指先で落ちないように固定して、左手も使って構える。

「ヒロさん!? それ使ったら……!」

「例によって死にかけるネ!」

言ってる間にも、黄金鍊成の光は強くなる。サンジェルマンさんは俺の拉致という目的を諦めたのか、既に回避の姿勢に入っている。

「思いついたのかい、止められると!?!」

「おう! 撃つてこいよド三流! 格の違いつてやつを見せてやる!!」

「——消し飛ば、それならばア!!」

そして撃ち込まれる、その光。

——爆破しきる前に、消し飛ばす。頼むぞエア!!

「エヌマ——エリシユ!!!」



結論から言つて、黄金鍊成をエアで打ち消すことには成功した。

直後にぶつ倒れた俺が目覚めた後に伝えられたことの顛末としては、こう。

黄金鍊成とエヌマエリシユの衝突が終わつた直後に、カリオストロとプレラーティ、装者のみんなが到着。

結社側はアダム奥の手とアルカノイズの軍団を潰されたこととファウストローブを持つのがサンジェルマンさんだけなこと、S・O・N・G。側はマリアさんと俺が倒れ、残りのLINKER使う組が使用限界に到達したことで動けるのが四人。

そのまま続けても痛みわけに終わるか、最悪、双方全滅の憂き目に遭うだろうことを察したサンジェルマンさんとカリプレが真っ先に撤退。アダムも気付けばいなくなつていたらしい。

市街地は、いくらかの建物が溶かされたらしいけど人的被害はゼロ。今回のアルカノ

イズの使い途が装者のみんなの陽動だったことが幸運だったらしい。

そしてS・O・N・G・は今、かつて響ちゃんの身体から零れ落ちた欠片——要は愚者の石の搜索にあたっているらしい。

「……なんで納得いってないんだろなあ、俺」

ラピス・フィロソフィカスのファウストローブはイグナイトモジュールを無効化する。それによつて、装者達は一度敗北する。そこから反撃の糸口として、愚者の石に辿り着く。その流れは、形は多少変われど原作に沿っている。

なのに、少なくともこれで良いはずなのに——

何故、俺の胸の内はこんなにももやつくのだろう

怒られ拉致られのち決戦

『——やあ。S・O・N・G.の諸君』

「アダム・ヴァイスハウプト……パヴァリア光明結社の首魁が、わざわざ通信回線をジャックしてまで何の用だ？」

『構わないよ、邪険にせずとも。あるんだよ、教えてあげたいことがいくつかね』

「生憎だが、貴様の戯言に貸す耳は持ち合わせていない」

『いいのかい？ 相原ヒロ——彼についてなのだがね』

「……なに？」

『シンフォギアの決戦形態……イグナイトモジュール、と言ったね、確か？ とつくに調べは付いているだろう、あれが無力化された原因については』

「……」

『そう、賢者の石。うちのサンジェルマンが手ずから錬成せしめた、錬金術の秘奥、あらゆる不浄を祓うモノ』

「そんなわかりきっていることを何を今更。戯言に付き合う気は無いと言った」

『——知っていたのではないかな、彼は？ イグナイトモジュールではラピス・ファイロ

ソフィカスには敵わないと』



「ヒロさん」

「はい」

「はつきり言うのと、私達は怒っています」

「はい？」

乖離剣の反動で意識落としてから、傷もほほ治って自由に動けるようになった。

深淵の竜宮で愚者の石を確保。その後みんなはカリオストロやプレラーティとの市街地戦も勝利したらしく、今のところは順調に原作の流れだなと思っていた矢先。

病室に乗り込んだできた響ちゃん以下数人にベッドを取り囲まれて困惑する間に怒られていた。

「んじゃ、まずはお前がベッドで寝たきりになってた理由を言ってみろ」

と、奏さん。

「えーと……とりあえずサンジェルマンさんとタイマンして、アダムが乱入してきた、黄金錬成しようとしたのを乖離剣でぶち砕いてぶっ倒れました」

「そうだな、それで合ってる」

「では次だ相原」

間髪入れずに翼さん。その手に持ったTSURUGIは何なんですか？

「はい」

「こうして担ぎ込まれるのは何度目だ？」

「えーと………忘れました!!」

ズバババンツ!!

「ひいつ、壁がツ!？」

「剣だツ！（条件反射） こちらは真面目に訊いている!!」

「いや、本当に覚えてないんです！ マジです！」

「……………」

「……………」

「……………まあいい」

「ほっ……………」

「マリア」

「ええ。……………ヒロ」

「はい」

「次に生返事したら右腕……いえ、いいわ」

「何をする気!?! コワイ!」

じつとりと獲物を見る眼光で俺の右腕を睨んできた。まだここは完全には治りきつてないのに!

「まず私達を助けてくれたことには、素直に礼を言うわ。ありがとう」

「へ? ああ、いえ」

「でもそれであんな状態になったことは、あの状況と聖遺物の性質上仕方ないとはいえ……それをいとも容易く抜く貴方の精神を疑ってもいます」

「えっひどい」

「私達全員の総意だから残念ながら当然と思いなさい。響」

次に前に出てきたのは響ちゃん。ちよつと涙目。

「……ヒロさん、私によく無茶ばかりするなー、とか言っていましたよね?」

「ルナアタックとかの時ね」

「なのに、どうしてそう言うヒロさんはこんなことばかりするんですか?」

「いやほら、今回は状況が状況だったし」

「……あの二人に囲まれた時、素直に逃げればあそこまでひどいケガしなかったのに……」

「……あー」

司令にも言われてたけど、まあ確かに逃げなかったのはちよつとあれだったかなーなんて反省はした。ぶつちやけ意地になってたし。

「……セレナさん、お願いします」

「そんなわけで、これからお説教だからね」

「拒否権は」

『『無い(です)』』

「わあい四面楚歌!!」

一斉にまったく同じイントネーションだったよ!



「ヒロ君が、ラピス・フィロソフィカスの力について知っていた、だと……!?!」

『彼はあの戦闘の最中止めようとしたそうだよ、イグナイトの使用を』

「……それが事実だとして、それがどうした」

『そこで僕はこう考えた。ラピスについて知っていたのなら——あれへの対抗策について、初めから知っていた。その上で伏せていたのでは、とね。君達に』
「バカな、うちの研究員でさえ、それを見るまでは存在すら知らなかったことを」
『そこで教えてあげるよ。僕が立てた仮説を、ね』



つらい。ひたすらにつらい。

けど、そんな時間も終わりそうになってきた……と信じたい。

「ちゃんと聞いているのヒロ!」

「聞いてます! ちゃんと聞いている! これから先、多少は自重するからもう勘弁して!」

「多少!?!」

「だってみんなじゃどうにもならない時とか俺が出張るしかないじゃん!」

「それでこれまでみたいに医務室送りなんてことになったら本末転倒だよ! ていうかやっぱりちゃんと聞いてなかった!」

「いやあの……本当にごめんなさい! 許して!」

俺の主張とみんなの主張がどうにも決定的なところで噛み合わない。心配してくれてるのはわかるしありがたい。ギアも纏えない生身である以上、今までの俺の行動がかなりの無理無茶無謀だっていうのも自覚はしてる。

だからといって、それで色々と見過ごせとかそんなのはお断り。ここまで好き勝手やってきた手前、はいそうですかと簡単に引き下がることなんて出来ない。

まあ、そんなこと言ったら監禁コース待った無しなだけどネ

「……どうしてもやめないつもりなんだな、お前」

「いや、自重はしようとは思ってますケド……」

「だが今はそう言えども、その時になればお前は簡単に……」

「簡単なつもり無いんだけどナー」

何かもうこのまま平行線から抜け出せそうにない気がする。

最終手段の不貞寝で逃げようか、とも思い始めたところで、ドアが開いた。

「司令?」

そこにいたのは司令と緒川Ⅱサン。後ろにはいつも仕事熱心なクローンヤクザめいた黒服のみなさんの姿も。

「し、師匠?」

「緒川さんも……それに、これは一体……」

「……ヒロ君」

物々しい雰囲気の中、司令にしては齒切れ悪く口を開く。

「はい」

「君には、あの奏と翼のライブ以降、半ば無理矢理な形ではあったが、二課に参加してくれてから様々なことで助けてもらってきた。了子君をフィーネの呪縛から解き放つことが出来たのも、偏に君の尽力あればこそだ」

「はあ、どうも」

「そんな君を相手に、こんな事を言うのは俺としても本意では無い……だが、あえて言うおう」

そこで言葉を切る司令。

本心から心苦しそうに、絞り出すように、その先を口にした。

「——暫くの間、君に監視を付けさせてもらおう」

「……待てよ、旦那。どういうことだ」

「すまんが、俺達自身まだ半信半疑といったところでもある。詳しくは話せん」

「それで俺が納得するとも?」

「してもらう他に無い。……これまでの事件を遡る内に、俺達の中に君へのある疑念が生まれた、とだけ言っておく」

「疑念って、それだけで!？」

「師匠、説明してください! どうして……!」

「……すまん」

苦虫を噛み潰したように、苦し気に俯きながらそう呟いた司令。本意じゃない、というのも本当なんだろう。そこに至った経緯までは察せられんケド。

「……必要なことですか、司令」

「万全を期する、という意味では、な」

「……んー」

ベッドに倒れこんで唸る。しばし考えて……

「……了解です」

「ヒロ!？」

「お前、そんなあつさり納得するのか!？」

「納得はしてませんよ。ただ……司令にそんな顔されたら、断るに断れません」

「……すまない」

「いや謝られても」

「恨んでくれて構わん。それだけのことをしている自覚はある。……杞憂に終わった、と判断でき次第、すぐにでも自由になれる」

「それ確約してくれるだけで十分ですわ。……ただ」
「？」

「こうなつた理由、きちんと説明してもらえますよね？」

「……ああ。約束する」



艦内の廊下を歩く弦十郎と緒川の二人。共に表情は暗い。

「……緒川」

「はい」

「こんなことを言うのは大人として失格だろうが……俺は、今回の件ほど自分の立場や役職を恨んだことはない」

「……心中、お察しいたします」

「奴の言葉を全て鵜呑みにするほど短絡的ではないつもりだ。だが……」

「……これまでの彼の行動、言動に関する不信な点について、こちらにも心当たりがあることも事実です」

「ああ……」

思い出すのは、アダムの言葉。

相原ヒロへの疑念を浮かべざるを得なかった、一つの仮定。

『カリオストロとプレラーティは、いたく気に入っていたようだよ、彼を。何度か逢いに行っていたそうさ。僕はともかく、サンジェルマンにさえ黙って、ね。……限らないだろう、何の情報も仕入れていないとは。その上で……黙っていたとしたら？』

「ありえん、と思っっているさ」

「私もです。ですが……」

「……この艦に縛ることだけはしたくなかった。だから帰宅の許可も出したが……万が

一もある。ヒロ君を頼むぞ、緒川」

「心得ています」



「うーわ雨だ。先に家着いてよかったー」

艦内に縛り付けておけば良いものを、こうして帰らせてくれたのは司令のせめてもの温情か。まあありがたいけど。

降りだした雨に濡れないように、いつものママチャリにビニールシートを被せる。そしてふと気付く、第三者の視線。

「……見られてるナー」

転生者としての立場上、不用意に誰にもこの先のことを話せないとはいえ、流石にちよつとばかりくるものがないでもない。

何に対して疑われているかは知る由も無いけど、俺としてはS・O・N・Gの不利益になるようなことはしていない……はず。

「はあ……はやいとこ部屋入ろ」

そうぼやいて自分の部屋へと歩を進めた、その時だった。

「……………おい」

赤い光と共に目の前に現れた魔法めいた紋様。

どう考えても錬金術なそれに頭痛がしてきた……けど、そこから出てきたその姿に、思わず息が止まった。

「カリオストロ……プレラーティモ」

別に姿を見せたことについては、特に驚いてはいない。原作でもアダムの目を逸らす

ために二人して死んだフリをしていたんだから。

でも、その有り様は俺の知るものとは大きく違っていた。

「おい——なんだよそのケガ!？」

意識を失っているらしいプレーヤーティも多少の傷はあれど、カリオストロはそれと比べるべくもないほどの重傷。

予想とかけ離れていたその状態に、思わず駆け寄ってしまった。

「……………あ。よかつた……………無事に、着いた……………」

「生きてることに関しちや薄々わかつてたから良いさ。けど、明らかに付けられたばっかの傷だろこれ……………」

「はっ、はは……………あーしと、したことが……………今までで一番の、ヘマ……………ゴフツ!？」

「……………何があつた」

「ハアツ、ハ……………きよく、ちよう……………」

「なに?」

「局長に、死んだフリ……………見抜かれて、た」

「——は?」

……待て

ちよつと、待て。なんだよそれは

そんな、そんな展開——！

「……あの無能全裸に、そんなこと見抜けるわけ」

「あーしも、そう思ってたんだけど、ネ……あいつ、もう今までの顔だけの男じゃ……」

「……それで、俺の所に？」

「ええ……もう、あなたが最初で、最後……あいつが、サンジェルマンに何をするかもわからない……だから……！」

血と汗に塗れた沈痛な表情を俺に向けるカリオストロ。

前にこいつに言った「いざという時はサンジェルマンを守る」という言葉通り、きつとここからがその時なんだろう。

けど

「……判断としちゃ、あながち間違いとは言い難いよ」

「……？」

「如何せん……タイミング悪すぎなんだよなあ」

そう言つて、振り返る。

視線の先には黒服組に加えて、緒川さんの姿。

全員が警戒心MAXで、俺を含めた三人全員に向けて得物を構えていた。

「……………これ、つて」

「色々あつてさ。ついさつき監視されることになったのよ、俺」

「……………相原さん」

「誤解だ……………なんて言つても、状況的に厳しいよなあ」

強くなる雨足の中、向かい合う俺と緒川さん。

緒川さんの後ろの黒服達も、どうするべきか考えてる途中なんだろう、グラスアン越しに視線が揺れてるのがわかる。

「……………今投降すれば、すぐにプレラーティとまとめて治療してもらえるぞ？」

「……………それも、良いかもネ……………けど！」

「はあっ!？」

ズタボロの身体を跳ね上がらせて、俺を羽交い締めにしてくるカリオストロ。しつかりとプレラーティの前に出る辺り、流石の年の功、というべきか。

「撃ちたいなら、どうぞぞ！　ただし……………この子も、一緒に連れてくわ！」

「お前……………！」

「今そつちに降れば、あーし達は、自由に動けなくなる……………そうなつたら、局長……………アダムの奴に……………！」

「相原さん、突き放してください！ 司令も僕も……いえ、誰も貴方を！」

立ち位置が変わり、緒川さん達と睨み合うのはカリオストロ。

俺自身は、ここでどちらに立つべきかを、未だに決めかねていた。

(……どうする。カリオストロに味方したが最後、事が終わった後でマジに拘束される可能性だつてある……だからって、下手にこの二人を突き放したら……！)

このまま時間が過ぎるだけなら、カリオストロが衰弱しきって終わるかもしれない。

けど、装者達に手傷を負わされ、アダムと交戦してなおプレラーティをこの数日間守りきったカリオストロは、今まさに極限状態、手負いの獣と同じ——あらゆる意味で、最も危険な状態にある。そう簡単には倒れないだろう。

(決めろ、決めろ相原ヒロ……この場の最適解は——！)

「信じていたよ。彼を選ぶと」

「——」

その声と共に、緒川さんを除く黒服のみんなが、断末魔も上げることなく、一斉に塵になった。

「もう、バレた……?!」

「……アダムッ!!」

視線を向ければ、そこにはもはや見慣れた立ち姿だけは紳士然とした男。

大雨の中でも悠然と佇むアダムは、緒川さんには目もくれずカリオストロへと蛇の如き鋭い目を向けた。

「やれやれ。サンジェルマンの下へ連れて行ってあげようと思っていたのだけどね」

「何をぬけぬけと……あーしとプレラーティを贄にしたいだけのクセしてよくも……！」

「それよりも何だい、その銃を構えている男は？」

「緒川さんは関係ねえ、とつとと用件言えこの無能」

「……やれやれだよ、本当に……カリオストロとプレラーティを返してくれるかな？」
煩わしげに首を振り、そう口にしたアダム。

緒川さんに目を向ければ、あちらも俺に目だけを向けていた。いざという時は緒川さんもアダムを相手取るつもりなんだろう。

「……断る、と言ったら？」

「君達には理由も義理も無いだろう、その二人を庇い立てするような。だが、僕達にはまだ必要だ」

「僕達？ はっ、『僕』の間違いじゃなくって？」

「……」

「局長、いや、アダム。あんたが何を目的にしてるかはあーしには興味無い。けど……それがサンジェルマンのためにならない、ってことだけは、よくわかる」

「本当にそう思うのかい？ 忘れたわけでもないだろう、僕が何のために結社を立ち上げたのか。それに、賛同してくれた、サンジェルマンも。……君達が戻らないのなら……彼女を使うしかあるまいよ」

「いいや」

アダムの言葉、カリオストロへの脅しを含ませたその発言に、俺は叩き付ける。否、と驚いた様子の緒川さんとカリオストロ、怪訝な表情のアダムを尻目に、続ける。

「お前はその手段は、それだけは取らないし、そもそも取ることも出来ない」

「……あるのかい、根拠が？」

「自分の目的を果たすには必要だろ？ 邪魔者を阻む壁、つてやつがさ。カリオストロとプレラーティが離反してる以上、お前がそれで使い捨てられるのは……サンジェルマンさんしかないない」

「……」

「目的完遂どころか、そこに至る経緯さえ自分一人じゃお膳立てすら出来やしない。……だから無能だつてんだよ。お前は」

「——やはり知っているのか、君は全てを」

「もうこの際だからぶちまけてやらあ——知ってるよ。お前に関わる全てを」

状況は既に佳境。隠し立てする理由もあまり無い。

もう後々に俺が拘束されようと、目の前のこいつを少しでも揺らがせてやれるなら、それで十分だ。

「……やはり、最大の障害は君だった、というわけだ。そしてやはり、君はS. O. N. G. にさえ隠していた！ 切札を、僕の計画を、僕への策を！ 全てを知っているながら！！」

「カツ！ どうせいつかはバレるんなら引き延ばしといた方が気楽なだけだ！ なあ——

——プレラーティ！！」

「えっ?」

俺の呼んだその名に、カリオストロが固まり、視線を倒れているプレラーティへと「……やれやれ。空気は読めんが——タイミンクの読み方は一流なワケダ!!」

跳ねるように起き上がったプレラーティが、その手から放った光弾でアダムを牽制、それはあつけなく防がれはしたけれど、そのほんの一瞬は、二人の錬金術師達が逃げ出す時間には十分だった。

「よし、そのまま……!」

「いや、お前も来るワケダ！」

「えっ」

プレラーティが発動させた転移から離れようとした瞬間、俺にくつついたままの力りオストロゴごと押し込まれた。

「なんで俺まで!?!」

「アダムへの最大のカウンター、お前を確保しておけば有用なのは間違いないワケダ！」

「なんでや!?! ちょ、タスケテ緒川さん！」

「相原さん……!」

緒川さんの声は最後まで届くことなく、一瞬の浮遊感の後に景色が変わる。

そこは、どこか覚えのある場所——俺が最初に、パヴァリア光明結社に拉致された場所だった。



『……緒川』

「申し訳ありません、司令。つい先程、彼のことを頼まれた矢先に……」

『いや、そもそもは彼を本部に留めておかなかった俺のミスだ。アダム・ヴァイスハウプ

トはどうした?』

「今の騒ぎの内に、退いたようです。重ね重ね、そちらも……」

『気にするな。それよりも……』

「……相原さんのこと、ですね」

『奴の言っていた仮説はともかく、ヒロ君がこの一件に関わる全てを知っていた、ということについては、クロ。ということか……』

「……司令、今後は」

『とにかく一度戻れ。アダムに殺られた者達の弔いもあるし……カリオストロとプレラーティが生きっていると判明した以上、どう動いてくるかも読めん』

「了解しました。直ちに」



「おかえり、アダム!」

「ああ。ただいま、テキキ」

「あの裏切った三流達は? ちゃんとお仕置きできた?」

「良い所で邪魔が入ってね。逃げられてしまったよ」

「ぶー。アダムを騙そうとかいかにも三流の考えそんなことだけど、許せない！」

「ハハツ、そう言つてやるものじゃあないよ」

「……局長」

「ああ、サンジェルマン。どうだい首尾は？」

「完了しました。すぐにでも実行に移せます」

「そうか。では……始めるのでしょうか」

（君には感謝しているよ、相原ヒロ。『想像力が足りない』、その一言は流石に堪えたことは認めよう。だが——それが首を締めることになる。君の、君達の）



転移の直後に、緊張の糸が切れたのか気を失つてぶつ倒れたカリオストロ。今はプレートティがつきつきりで傷の治療に当たっている。

本来なら、カリオストロに救出されてすぐに賢者の石の錬成にあたるはずだったプレートティが、そんな時間も無いほどにカリオストロにかかりきりになっている。

そして今の時間軸的に、アダムが計画を実行に移す前に止めることはほぼ不可能。

つまりこの時点で——ほぼ間違いなく撃ち込まれるであろう反応兵器を防ぐ手段が、無い。

「……いや」

そこまで考えて、一つある手を思い付く。

けど、それは賭けだ。負ければ破産待った無しの残り一回のBETで確率の低すぎる大穴に放り込むようなもの。

上手くいく確証も保証も無い。最悪、絶対に迎えてはいけない結末に至る可能性の方が高い。

だからとて、成功する確率もまた、0じゃあない。

「……自重する、って約束したばっかなのになあ」

手に握った乖離剣。原典におけるそれとは大きく劣化した贋作。

けど、この世界における摂理にこいつも当て嵌められているのなら——あるいは
そして——その日が来た

内通疑惑？ 知るか！ そんなことよりかなせれだ！

前―

S. O. N. G. 本部である潜水艦。

司令室に集められたシンフォギア装者達。だが皆、その表情は一様に暗い。

メンバーの一人である相原ヒロにかけられていた、パヴァリア光明結社との内通に關してもそうだが……ここに至るまでの過程、その全てを知らながら意図的に伏せていた、という事実は、S. O. N. G. 決して少なくとも小さくもない衝撃をもたらしていた。

重い空気の中、努めて平静を保つ弦十郎がその口を開いた。

「……先に伝えた通り、上はヒロ君……彼への捕縛命令を下してきた」

その言葉に、一同の表情が更に曇る。それに胸を痛めつつ、毅然とした態度を崩すことなく、弦十郎は続ける。

「無論、真偽のはつきりしないまま疑念だけでそうなるような真似をする者はここにはいない。恐らく、アダム・ヴァイスハウプトが匿名で密告でもしたのだろう」

「だったら、それを伝えれば！」

「伝えたさ。だが、それでもその命令を押し通してきた。……彼の立場が、ここに来て悪い方向に働いてしまった、ということだ」

響の意見に、苦々しく返す弦十郎。

国に依ることなく、二つの完全聖遺物を個人で保有するヒロの立場は、諸国から見ても相当に危ういものであると装者達も理解していた。

これまではS・O・N・G・預り、加えて数々の事件においてS・O・N・G・の立場で解決に尽力していたことと、ヒロの母親が国連相手でも強い発言力を持っていたことで、何とか黙認されていた。

が、それがここに来て、このような形で裏目に出ってしまったのだ。

「……このまま、ヒロが国連に捕まったら」

「そんなことにはさせせん。何があつてもだ。そのためにも——彼を我々の手で早急に連れ戻し、身の潔白を証明させなければならん」

不安げに語るセレナ。

パヴァリア光明結社の計画が大詰めを迎えている中での緊急事態、八人の装者の半分がまともに動けない状態でのこれは、かなり大きいハンデである。

だが、だからといって諦めるような者もないのも、また事実。

「奴らの計画を阻止、それと平行してヒロ君を連れ戻す。……響君、切歌君、奏、セレナ

君。この四人が砦となる——頼むぞ！」

「「了解（デース）!!」」

「……奏」

「ん？ どうしたセレナ」

「大丈夫、だよ。ヒロが、私達から離れるなんて、そんなこと……」

「……はつきりとはわからないさ」

「そんな……！」

「でも、だからあたしらが……S. O. N. G. が信じてやらなきゃいけないんだ。何
度もあいつに救われてきた、あたし達が」

「……そう、だよ。私達が最後まで、信じて。それで……助けなきゃ」



「……」

ソファでくつろぎながら天井を見上げる。

アダムが事を起こす場所はわかってるけど、ここからじゃ如何せん遠すぎる。

プレラーティを頼ろうにも今はカリオストロの治療中。

「……あ、ークツソ菌痒い」

決行日は、ほぼ間違いなく今日になる。なのに当日になってこのザマ、これまでのしっぺ返しなんだろうか。

「……ふう」

そんな風に考えてる所に、休憩にでも来たらしいプレラーティがやってきた。

どさつ、と俺の隣に座ると、疲れを見せている目元を軽く解していた。

「お疲れさん。カリオストロは?」

「傷の治療はとつくに終わったワケダ。だが、衰弱しきっている」

「この数日、まともに寝てなかったんだっけか?」

「ああ。私を庇ってあの有り様なワケダ」

悔しげに顔を伏せるプレラーティ。仲間意識の強いこいつのこと、殊更に悔しいんだろう。

「……悪い」

「何故お前が謝るワケダ」

「アダムがお前らのやろうとした事に気付いたのは、たぶんそもそも俺のせいだ。

……俺が、不用意なこと言っちゃまったばっかりに
そう。

原作におけるアダムは、あそこまで察しの良い奴じゃあなかった。何故なら奴には、「想像する」ということが出来ないはずだったから。

なのに、奴はカリオストロの死んだフリに気付いて、それを逆に利用しようとさえした。

「だから、そもそもは俺の——」

「のぼせ上がるなよ、ガキが」

言葉を最後まで紡げず、俺の胸ぐらを掴んだプレラーティの顔は怒りを含んでいた。

「なっ……」

「お前の一言が原因だと？ 奴自身がそう言ったわけでもなし、そんな事を言えるとは思い上がりも甚だしいワケダ」

「なん、だと……!」

「お前の言葉が原因で、だからお前が気に病むだと？ ハッ、くだらん。そんなことは最早どうでもいい」

怒りから一転、俺を蔑むように表情を変え、プレラーティは続ける。

「お前一人に出来ることなど、たかが知れているワケダ。そんな小僧が何を気にしたと

「ところでどうなるでもない。そんな思い上がりほざいている暇があるなら——動け」

「良いか、相原ヒロ。お前の考えは正義でなければ悪にもなりきれしていない——ただの、傲慢だ」

——何も言えなかった

だって、そんなこと、考えもしなかったから

傲慢。

そう言われて、初めて自分のこれまでを客観的に思い返せた。

イグナイトモジュールの使用を止めようとしたこと、キャロルの記憶の焼却を止めたこと、ウエルとナスターシャ教授の死を回避させたこと、フィーネの消滅、櫻井女史の蘇生

いや、奏さんやセレナを助けようと思ったことさえも——全部が、俺の思い上がりでしかなかったのでは

「……なる、ほど」

ぼつりと呟く。言って、切り捨てるのは悪い方に考える俺の思考。

傲慢だということは認める。言われてみれば確かにそう言われても反論できないだけの行動だった。

言われなきや気付かなかった自分を恥じる。そして、何でも出来るつもりになつた、俺自身を恥じる。

あの時、マリアさんのイグナイト使用を止められなかつたことを納得できなかつた理由も、わかつた。

「……ありがとな、プレラーティ」

「謝つたり礼を言つたり、忙しいワケダ」

「茶化すなよ、これでも真剣なんだから」

プレラーティに苦笑しながら答えて、立ち上がる。

何をするべきかはわかつてる。こいつに諭されたのは癪だけど、ぼやいてる暇も無い。

乖離剣に頼らず、反応兵器をどう防ぐかもまだわからないけど

「やるだけやるしかない。よな」

「行くのか？」

「ああ。送つてくれるだけでいい。そろそろアダムの野郎も動くはずだ」

「何故わかるワケダ？」

「前に使つてた隠れ家なんて、わかりやすい所に逃げ込んだのに何も無いからだよ。あいつからしてみれば、もうお前らに拘つてる時間も無いんだろうよ」

「……なるほど。一理あるワケダ」

一つ頷いたプレラーティは、懐からいくつかの転移結晶を取り出して、俺に差し出してきた。

「これは?」

「念のためなワケダ。持っていていけ」

「……サンキュ。んじゃ、ありがたく」

「……相原ヒロ」

「ん?」

「サンジェルマンを、頼む」

「……ああ。任せろ」

プレラーティが俺の足下に結晶を叩き付け、そこから広がる赤い陣。

目を閉じて身体が浮く感覚に身を任せて、一瞬で景色が変わる。

次に目を開いた時には、室内から森の中。視線の先には――

「……よう」

「来たね、やはり」

俺がここに現れるのをわかっていたかのような口振りの、アダムの姿。

少し離れた場所からは、金属のぶつかる音と閃光。たぶん、響ちゃんとか切歌ちゃん辺

りがサンジェルマンさんと戦闘中なんだろう。

けど、一つだけ記憶と異なるモノ。

上空——つまり、ティキへとレイラインからのエネルギーが集まっている。

本当なら不足分をサンジェルマンさんが補おうとした瞬間、要石の起動と一緒にそれは一時中断、後にアダムが天、星々のレイラインを使ったことで、神の力をティキに宿したはずだ。

ティキへとエネルギーが流れたまま、かつサンジェルマンさんが戦闘中。

つまりは——ティキの起動が夏に早まった分、パヴァリア光明結社は不足が出ないだけの生命を狩り獲ったことになる

これも俺が下手なことした揺り返し、なのかもしれない。

傲慢と言われた以上、なんでもかんでも俺のせいにするわけにはいかない……けど

「……言葉はいらねえ」

「そうだね」

鎖を取り出す。

腕に巻き付けて、ただニヤけたままのアダムの前に立つ。

「——そのツラ、泣きっ面に変えてやるよッ!!」

ケジメの一つくらいは、俺に着けさせる!!



夕空から夜へと進む暗闇の中、いくつかの場所で蠢く影があつた。

苦し気に呻いたかと思えば、狂つたやうにくぐもつた笑い声を上げ、ナニかを引きずる音と共に進み続けるそれ。

腐つた肉の臭い、時折吹き出る血の臭い、吐瀉物にも似た臭いの混ざり合つたやうな異臭を周囲に撒き散らしながら、ソレはずりずりと前へ前へと進んでいく。

やがて、ソレの視界にあるものが映る。

ヒトだ。ヒトがいる。そばにあるおおきな石を守るやうに立っている。

——にク

か細い声——否、声とは認識できない音として、石の側に立つ男の耳にそれは届いた。

——べ、夕い

走る。疾る。

だつて、そこに^在いるカラ。

——にク、ニク、ニクウウウウ!!!

——タベたイイイイよオオオオオ!!!
男が気付いた時には既に遅く

喉元に牙を食い込ませたソレの姿は——この世のモノでは、なかった



「要石の起動はどうなっている!?!」

「わかりません!　こちらからの通信にも返答無し!」

「チイツ……………!」

『弦!』

「っ、八紘の兄貴!?!」

『要石へと赴いた者達と連絡が取れん!　そちらはどうだ!?!』

「すまんっ!　こちらでも状況の把握が出来ていない!　…………アダム・ヴァイスハウプト…………こちらの反抗策さえ読んでいたとでも言うのか…………!?!」

神の力を手にするために、地脈のレイラインを開き、そこから神出る門を開こうと画策していたアダム。それへのカウンターとして、アダムが狙っていた地域に置かれた要石の起動によるレイライン遮断のために待機しているハズの構成員達との交信の途絶。

予期せぬ事態に司令室が右往左往する中、友里が一つの信号を受諾した。

「これは……エマーージェンシーコール!」

「なんだとオ!」

「映像、来ます!」

そしてモニターに映し出されるその映像。

その光景に、誰もが言葉を無くし、表情から色を失わせた。

「——ひっ」

「見ないで、調ツ!!」

「マリ、ア……なに……今の、なに……!」

S. O. N. G. 本部の司令室へと回ってきた映像に映っていたのは——紅だつた

「なん、だ……あれは……!」

姿だけ見れば、犬を思わせる四足歩行。だが、体軀はただの犬種を上回り、全身の皮が剥がれ、肉や骨が剥き出しとなったその姿。加えてその四肢には、所々に人間のそれと思しき形が見て取れる。

極めつけには——背中や腹に浮かぶ、人面。

要石起動のために待機していた構成員達を貪り喰らうその異形は、まるで獣と人間を

無理矢理縫い合わせたような、明らかに自然から生まれ出でた生物ではないと、ソレは如実に示していた。

「……獣と、ヒト……」

「……?」

「まさか……チツ!」

「待てキャロル、どこへ行く!」

「司令!」

「今度はなんだ!」

「錬金術反応を検知! ……ヒロ君が、アダム・ヴァイスハウプトと交戦中!!」

「なあっ……!」

「奏さんとセレナさんを救援に……ダメです、例の生物に囲まれて、抜け出せない!」

「……くっ……せめて頭を整理する時間くらい寄越せ!」

「……ああ、オレだ。厄介なことになっている。……動けるな?」

司令室の外。

端末を耳に当て、どこかの誰かと話すキャロルの姿。

その表情はどこか重い——だが、沈んではいなかった

「答えは聞かん。——手筈通りだ、行け」



「ツしやあつ!!」

「くつ……!?」

アダムの一挙手一投足を悉く鎖を交えて出だしで止める。時には死角、時には正面から放つ鎖で腕や足を縛り上げて、一瞬もたついた所に的確に一撃一撃を撃ち込んでいく。

前にサンジェルマンさんと二人がかりで来られた時とは違う。俺の身体も万全だし、何より一対一。

もちろん、小さいダメージは受けてはいるけれど、直撃は未だに無し。そもそもこいつは——

「懐に入られた途端にお粗末だなあお前!」

「乗るなよ、調子に!!」

暴風のような魔力の塊を撃ち出してくるも、抜き打ち故に直線的、それだけ大きければ物理的な質量もあるだろう、鎖で射線を逸らして再度懐に潜りこんで、がら空きのボ

デイに拳、次いで膝を叩き込んだ。

「ごふっ……チイツ！」

アダムが大きく後ろに跳ぶ。あえて距離を詰めずに鎖を振り回して牽制しておく。

……にしても、遅いな

地脈のレイラインから力をテイキに集め始めているなら、とつくに要石の起動にも動きがあるはず。

なのに、そんな気配が一向に……

「予想外だったかな？ 要石が起動されていないのは」

「っ……テメエ」

「策というのはいつでも読んでおくものさ、先をね」

「……何しやがった」

「放っただけさ。……番犬を」

「番犬、だと？」

「そうら……来たよ、ここにも」

「っ!？」

嗅いだことのない異臭が鼻をつく。

加えて聞こえてきた、妙な鳴き声にも似た音。

「……なん、だ」

——正直、気付けたのは奇跡だったと思う

「ツ、らあつ!!」

鼻が曲がりそうな、どぎつい臭いを濃く感じた背後に、全力で鎖を振るう。

不快な悲鳴を上げながら吹き飛んで木に叩き付けられたそれを見て、割増で吐き気が込み上げてきた。

「なんつ……!」

獣と思わせておいて、その実その姿はまるで人間と獣を無理矢理に混ぜ合わせて放置したかのような、異形。

顔面に食らった鎖と木に叩き付けられた衝撃で並の生物ならまともに立てないダメージだろうと、それはもう並とは言えない。

「……実にシンプルだ、獣とは。食欲と生存欲、縄張り意識、種の保存にのみ生を費やす。そこに理性を加えただけなんだよ、人間とは。そのくらいしか無い、違いなんて。おかげで——容易かった、縫い合わせるのは」

「……テメ、エ……まさか!」

この野郎、やりやがった……よりにもよって、こんな!

「人間と獣を——錬金術で混ぜ合わせやがったのか!?!」

「ご明察！ 人間の性別すら完璧に変えられる錬金術、加えて医術としても使えるのさ、錬金術は。……僕でも出来て当たり前前さこのくらいは」

「ふざけんじゃねえぞテメエ!!」

「大真面目さ！ ……それよりも、君がそこまで憤る理由が見えないねえ、僕には」
「なん、だと……!」

「——君とてそこまで関心は無いだろう、他人の……いや、誰の生命だろうと。似た者同士だよ、そういう点で僕らは」

「——」

頭が真っ白になる。なのに胸の奥底が、こいつへの激情で埋まる。

……初めてだ。転生してからこつち——これほど誰かに対して、怒りを覚えたのは
「テメエと……」

「ん？」

「テメエと一緒にすんじゃねえッ!!」

叫ぶと同時に、俺に飛びかかってきた獣の顎を鎖を巻いた拳で殴り潰す。耳障りな悲鳴を上げさせる間もなく、鎖で胴体を縛り上げて、そのままアダムへと振り回した。

「……………ああ。言い忘れていた」

炎の帽子でそれを両断、臓物を撒き散らしながら地に落ちたそれは、二つに別れても尚、俺だけを見て、その前肢だけで俺へと向かってきていた。

「……………ッ!」

「これらは全て死んでいるも同じき、とつくにね。終わっているものだ、生命としては。……………終わらせられるハズも無いだろう?」

「デメエ……………どこまで……………」

「動く理由はただ一つ——埋めたい、際限無き空腹を」

後ろから、またいくつもの気配。

振り返れば……………数匹

「……………クソッ、たれがアアアッ!!」



「……………くっ、げほッ!?!」

「セレナ!」

「なんなの……………なんなの、これ……………!」

「殴つても突き刺しても、止まりやしねえ……それに」

「ヒト、動物を……アダム・ヴァイスハウプト……どこまで……！」

ヒトとアダムの交戦地帯よりも少し離れた場所で、奏とセレナもまた、ヒトと交わらされた獣の軍勢に囲まれていた。

碎き、貫き、斬り裂いてなお立ち上がってくるその姿に、二人も次第に追い詰められてきていた。

加えて、理由はもう一つ

—— たすけて

—— クるシイ

—— おナか、スイた

—— どうシテ、ドウして、どうしてどうしてドウシテ

—— ワるいコと、シテナいの、ニ

「ぐっ、う……！」

「聞くな、セレナ！」

「わかつて、る……でも！」

胴体と一つに溶けた人面から溢れる、苦悶の声。

頭ではわかっている、ここまで混ざり合ってしまった以上、もはや救う手立てなど無

いということ。

それでもセレナ・カデンツァ・イヴには、それを聞き流すなどということは、どうしても出来なかった。

打ち倒す度に上がる悲鳴、立ち上る腐臭と苦し気な呻きに、セレナは胃の底から沸き上がる嘔吐感を堪えることで精一杯だった。

「……ヒロがアダム・ヴァイスハウプトと戦ってる。あたし達が任された以上、さつさとここを抜けて、ヒロの所に行かなきゃならないんだ。わかるな?」

「……わかってる。わかってるよ!」

「だったら……ぐっ!」

「かな……ッ!」

奏のL I N K E Rの制限時間が迫っている現状、泣き言ばかりも言ってはいられない。それに、別の場所でサンジェルマンと戦っている響と切歌の負担が増える前に、何としても自分達がアダムだけでも倒さなければならぬ。

だが、目の前の生物が、それを許してはくれない。

縛れる足、迫る牙

回らぬ頭でここを脱する最適解も、浮かばない

早い話が——じり貧だった

内通疑惑？ 知るか！ そんなことよりかなせれだ！—
中—

『……時間稼ぎ？』

『そう。君はシンフォギアに勝つ必要は無い』

『それは、どういう意味なのですか？』

『簡単だよ。神の力さえ得られれば、こちらの勝ち。つまり完成するまで留めておけば
良いのさ、シンフォギアを』

『……』

『……不服かい、サンジェルマン？』

『……いえ。その言葉にも、一理あることは。しかし、私が離れては祭壇と儀式の方は
……』

『そこは僕に任せてくれていい。対策はいくらか用意してある』

『そう、ですか……』

『最終目的を忘れてはいけないよ、サンジェルマン。他は全て些末な事さ、それに比べればね』

『……些末事……』

『勝つことよりも、負けないことを主軸に置いてみることだ。……相原ヒロ。彼のように』

『相原ヒロを？』

『そうさ。彼は勝つ戦いはしない……というより、出来ない男。だから負けない戦いをするしか出来ないのさ』

『しかし、あの男はフィーネにさえ……』

『実際にフィーネを降したのはシンフォギア。彼はあくまでその手助けをしたに過ぎない』

『……それは』

『相原ヒロには無いのさ——自分一人だけで勝てる土俵が、ね』

(……何を思い出している。今は目の前の事に専念すべきだというのに……)

響と切歌を相手取るサンジェルマン。その脳裏を過るのは、神出る門を開く儀式を行う前のアダムとの僅かな会話。

勝たなくてもいい、だが負けるな。

自分が執り行うはずだった儀式だが、不思議なことに自分が釘付けにならずとも神の力は確かにティキへと注がれている。

アダムが何をしたのかはサンジェルマンには知る由も無い、だがそのおかげで、眼前の敵を相手に立ち回ることが出来ている。

「ラピスを纏ったカリオストロとプレラーティを降したその力、確かに脅威だ。だが……それだけで、私をも押し通せると思うなよシンフォギア!!」

負けない戦い、というのはサンジェルマンはどうにも不慣れだった。加えて、ラピス・フィロソフィカスに対抗する機能を付与してきたシンフォギアの性能は、数的不利な点を差し引いてもサンジェルマンの実力を大きく上回っている。

だが、自身の錬金術とファウストローブをフルに活用し、あえて防衛に徹することでその差を埋めることが出来ていた。

「切歌ちゃん! このままじゃ埒が開かない!」

「だったらムリクリこじ開けるデース!!」

対する立花響と暁切歌。サンジェルマンを通らねば神の力の発現の阻止は出来ない。かといって、無防備なティキに狙いを定めれば——

「ぎせん!」

「デブース!?」

その間を逃さず、サンジェルマンのカットが入る。そのまま行動不能にでもさせられてしまえば、その瞬間に敗北はほぼ確定してしまう。

加えて

「くっ……奏さんやセレナさん、ヒロさんも危ないのに……!」

「この人のガード堅すぎデブスよ!」

奏のLINEKERの時間制限、入ってきた通信から伝えられた、未知の獣に囲まれている奏とセレナ、それに加えてアダムをも相手取っているヒロ。

様々な不利な要因は、響と切歌の胸中に決して小さくない焦りを生み出していた。

「……本当に!」

「?」

「本当に、こんなやり方しか無かったんですか!」

「何を今更……言葉尽くす時など、初めから無い!」

「だとしてもツ!!」

撃ち込まれた弾丸を拳で弾き、響がサンジェルマンへと肉薄する。振り抜かれた拳に対し、サンジェルマンはその手の銃で以て鏝競った。

「もはや時は無い! 今この瞬間にも、世界はバラルの呪詛という理不尽な支配に喘い

でいる! それは何故わからないツ!」

「それをどうにかするために、関係無い誰かを犠牲にしていいたなんて……そんなこと、許されるわけが!」

「赦しなど請わぬ、要らぬ、求めぬ!! 外道に墮するとも、死を灯すしか……私に残されたのはそれだけだツ!!」

意趣返すかのように、響の腹へとサンジエルの拳が入る。

追撃を避け、距離を離す響へと、その銃口が向けられた。

「……目の前のことに拘うのみの貴様達に、とやかく言う道理など無いと覚えろ、シンフォギアツ!!」

「……だとしても」

響が胸元、イグナイトモジュールの発動キーへと手をかける。それを見た切歌もまた、同じように

「——だとしても、止めてみせます! 他でもない、貴女のためにもツ!!」

「無理を通して道理なんてブッチ斬ってやるデス!!」

「イグナイトモジュール、抜剣!!」



「ツはははは！ 無様がすぎるねエ、相原ヒロ？」

どこか遠く聞こえるアダムの哄笑を聞き流しながら、口の中に溜まった血を吐き捨てる。

アダムが造り上げた人獣……もう面倒だからキメラでいいや。アダムに加えて3匹程度のそいつら、動きと膂力は完全に獣のそれ、加えてなまじヒトの理性が残ってる影響か、俺の動きを学習してきているかのような感じさえ出てる。

頭を潰してもハラワタ撒き散らしても、死なないどころか動きが多少遅くなるだけ。

乖離剣でまとめて消し飛ばすなんて手はこの状況では最悪手、避けられるか撃つ前に喉笛噛み砕かれてオタツシヤするのは間違いない

こんなキメラ共がほつつき歩いてるんじゃあ、並の人間に要石の起動は実質不可能、それこそ司令や緒川Ⅱサンなら話は別だけど、あの二人は司令部に缶詰

じゃあ直接ティキを叩けば良いだろうけど、それを見越してないわけもなし、サンジェルマンさんなら防戦に持ち込めば時間稼ぎ程度、なんてことないだろう。

早い話、詰んでね、これ？

「ははは……はあ。やれやれ、気に食わないねえ、その眼」

「あ?」

「何故抗う、絶望に? 何故齒向かう、劣勢に?」

「なに言ってるかわかんねーな」

「状況は既に決している。よもや君一人で覆せるとでも?」

「独力では何も為し得ない君が、一人で?」

「——」

身体が固まる

思考が止まる

……なんだ、こいつは今、何を言った……?」

「フィーネを降したのはシンフォギア。ネフィリムをバビロニアの宝物庫に押し込め、ノイズもろとも滅したのも。キャロル・マールス・ディーンハイムの世界の分解を止めたのも——シンフォギアだろう、全て」

「その時、何をしていた、君は? 状況に介入し、引つ掻き回し、事の結末は仲間を押付けて——肝心な所で、君は無力だ。そう、今も」

「……違う」

「できはしないのさ、何も。やり遂げることも、倒すことも……守ることさえ、何も」

「違う……!」

「違わないさッ！ 言っただろう、君と僕は似た者同士だと！」
「違うッ！」

「自分一人では何も出来ないんだよ、僕も君もッ!!」

「——黙れエエエッ!!」

3匹のキメラを鎖で縛って一纏めに、それを振り回してアダムへと叩き付けるように振り下ろす。

防がれるのはわかっている、だからあえて距離を取る。

翳したその手に、金色に輝く剣を握り締め

「何も出来ないだど!?!」

紅い波が渦を巻く

「俺がお前と同じだど!?!」

空気が変わる、世界が震える……地獄が生まれるその刹那を、世界そのものが感じ取っている

「ナメンじゃ、ねえ、この——クソ無能がアアアアッ!!」

生命が吸われる、視界が明滅する

これを外す、或いは撃ち漏らせば終わりだと頭ではわかっている——胸の内のど

す黒い感情を、抑えたくなかった

前世以来の、本気の殺意を

「消し飛べ人形! エヌマ——!」

「……やれやれ」

瞬間

振りかぶった右腕に、裂けるような痛みが走る

「はっ——!」

見ればそこには……4匹目。俺の右腕、肘辺りにその牙を食い込ませていて

「今いる分が全てなどと、一言も言っていないよ、僕は」

「がっ、アアアアアア!!」

すぐさま左手に乖離剣を持ち直し、獣の胴に臨界に達しているそれを突き立てる。回転を続けるそれが獣の腹を破り、肉を引き裂いて骨を砕き、臓物を辺りに撒き散らす。

——そして、逃げ場を失った力が弾ける。俺ごと周囲を巻き込んで

「は……あ、ぐ」

獣は剥がれたが、代償は洒落になつてない。真名開放までは行かなかつたから意識は保っていられるし体力にもまだ余裕はある。

けど牙の食い込んだ右腕からの出血は止まる気配は無く、爆ぜた乖離剣の力で身体中火傷だらけだし、吹き飛んできた小石なんかも食い込んでる

(自爆で重症とか、マジでダサイ……)

「否めないがね、拍子抜けは……けどまあ」

獣がにじり寄ってくる。

顎をガチガチと鳴らし、血走った目を向けてきている

——アア、メシ、だア

——ごハン……おナか、スイタあ

——ハア、アア、アアアアアアア

「——幕引だ」



異変が起きた。

奏が振るった槍が件の獣に触れた瞬間、先程までなら吹き飛ぶだけに留まっていたハズのそれが、消滅した。

厳密に言えば——灰となつて、消え去つた

「これ、は……!」

奏とセレナ、二人を取り囲む獣達をさらに囲むように、周囲に赤い紋様——錬金術を示すそれが現れる

そこから現れた存在、加えて通信機から聴こえてきたその声に、奏とセレナのみならず、S. O. N. G. と全員が言葉を失った

『マスター。指示通り、要石を一つ起動させましたわ』

『マスター。同じく、要石の起動と構成員達の救助を派手に完遂しました』

聞き覚えのある、どころかありすぎる女性の声が二人分。

S. O. N. G 司令部のモニターに映し出されたその姿、特に因縁のある翼とクリスの動揺は殊更に大きかった。

『はぁーい♪ 観てるかしらあ、ツ・ル・ギ・ちゃん?』

「ファラ・スーフ!?!」

『私に地味は似合わない。雪音クリス、私を降した装者……今の私は、あの時のお前より……目立っている! 派手に!!』

「レイア・ダラーヒムじゃねえか!？」

ファラ・スコーフとレイア・ダラーヒム。共にキャロルが造り出したオートスコアラ。ラー。

風と地を司るその二人、魔法少女事変に際し、S・O・N・Gと何度も衝突したかつての敵。

アルカノイズを従え、各々の得物を手にしたファラとレイアが、戦場に立っていた。

そして、キャロルのオートスコアラは、二人ではない

『ったーく。マスターの命令だからってなんで殺しかけてくれた連中を助けないといけないんだか』

『一番ノリノリだったのガリイだぞ』

『うっさい』

「ガリイ・トウーマーン、それに……!」

「ミカ・ジャウカーン……どうして……」

水のガリイ・トウーマーンと火のミカ・ジャウカーン。

同じくキャロルの配下である二人も、アルカノイズ召喚のための結晶を手に、そこにいた

「間に合ったか……やはり劣化躯体では限界もある、か」

「キャロル、これは……!」

連続して起こった、まったく予想しえなかった事態。

嘆息しつつ溢したキャロルへと、周囲の疑問が向くのは当然だった。

「……大したことは無い。あいつらに行動を起こさせるよう、以前から言っただけだ」

「けど、どうしてボクらに何も……」

「相原ヒロ。奴が向こうと内通してるであろう可能性があるのか?」

「ッ……」

「フンッ」

「……でも、どうして」

「……」

エルフナインの疑問に、僅かに顔を伏せる。迷いを含むその表情、だがそれでも、しっかりと顔を上げて前を見る。

「……オレにもわからん。そもそも記録として知るだけで、もうお前らとの間に起こった記憶など無い」

「キャロル……」

「それでも、一つだけ確証も根拠も無い確信と……言葉があつた」

「こと、ぼ？」

「……パパがいたら、なんて言うか」

「——ッ！」

「そんなわけのわからんもの……感傷、とでも言えば良いのか、わからん。だが、それが……理由だ」

「……そう」

見詰めてくるエルフナインの視線から照れ臭そうに顔を背け、キャロルは自身を慕うオートスコアラー達へと、告げる。

意志は強く、決意は硬く。記憶、想い出を焼き付くそうとも、胸に宿った想いだけを導として

「——オートスコアラー共！ やることは変わらん！」

「レイアとファアラは最優先で要石の起動！」

「ガリイとミカは足踏みしてる連中の道を開きながら、不様で出来ない、穢らわしい肉塊を優先して消してやれ！」

「不可能とは言わせん！ その果てに……あの無能に、吠え面をかかせろ!!」

『かしまりました』

『派手に了解！』

『はいはい』

『やあああああつてやるゾ!!』

指示に対する言葉もテンションもバラバラで。

だが、それが逆に、不思議と安堵を覚えさせるものだった。



だが、S・O・N・G.の面々は一つだけ疑問を持つていた。

オートスコアラアの面々はとある錬金術師の手で、ただの人間と変わらないレベルにまで性能が落ちている。

それを補うためにアルカノイズを用意してきたことは理解出来るが、獣を相手に通用するのか否か、と。

そして、その答えは既に提示されていた。可である。

「マスターから聞いています。錬金術で以てヒトと獣を組み合わせた不死の猟犬。死なず、朽ちず、ヒトの姿ですらない汚物。されど」

「そもそもノイズは人間を殺すためだけの兵器。改良を加え、無機物さえ対象としたアルカノイズでさえも、本質は変わらない」

「なまじ人間らしさを残したのが逆効果。半端とはいえソレが「人間」と定義されるなら、アルカノイズは例外無く殺しにかかる」

「一匹残らずミナゴロシだゾ!!」

フアラとレイアは要石を、ガリイとミカはそれぞれ奏、セレナの二人とヒロの救援に回る。

「ほーら速く行きなさいな！　そこにいられると邪魔！」

「お前ら……」

「……奏、行こう」

「……ああ。礼は後だ！」

予想よりも大幅な時間のロス。神の力が完成するよりも早く、アダムを押さえなければならぬ。

これ以上のロスは許されない。故に奏とセレナは急ぐ。
アダムと相對する、ヒロの所へと

「アルカノイズの数間違えてたゾ」

「何やってんだミカアアア!!」

一方、ヒロはヒロで再び窮地に立たされていた。

ミカ率いるアルカノイズが即座に獣を殲滅、残るはアダムとなったと思つた矢先、残つたアルカノイズが一齐にヒロへと矛先を向けた。

傷の影響で満足に動けないながらも応戦するヒロと、「やっちまった」と言わんばかりの顔をしているミカ。

まさかだつた救援が不可抗力とはいえまさかの敵に回つた事実には、ヒロのメンタルは大いに削られた。

だが、それも長くは続かない。

マイナスな意味では無く、間違いなくプラスの意味。

数分前、奏とセレナの二人が獣の包围を抜けた。

そしてそれを追い討つだけの数の獣は既に残らず、阻むものはもう無い。

即ち——

「————ヒロー————ツ!!」

「届いたぞ、ようやく!!」

ガングニールの天羽奏とアガートラムのセレナ・カデンツアヴナ・イヴ

二人の刃がアダムへ届く——!!

「シンフォギア……!!」

「時間も無い、出し惜しみは無しで往くぞセレナ!!」

「うん!」

二人が同時に、胸元へと手をかける。

ギアの制御を司るそれを取り外し、掲げた。

それは、かの魔剣の発動と同じ姿

「イグナイトモジュール!」

リミテッドエディション

「限定仕様!」

「——拔剣!!」